

大学院論文集

第10号



杏林大学大学院国際協力研究科
2013年3月

目 次

関口美緒：心理動詞のアスペクト —局面指示体系による分析—	1
辛 奕羸：認知言語学の観点から見た中国語の「的」の意味変化と文法化	21
山内 美穂：コーパスを利用した日中同形語対照研究 —中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得支援のために—	39
田 帥：現代中国語の新受身表現「被 XX」について —「被」の新しい使用法に関する研究—	59
染谷真己子：日本の女性労働力活用の課題	73
蔣 家義：日本語構造伝達文法の中国語への適用 —述目句の研究—	87
坂寄 仁美：マンガにおけるオノマトペの考察 —音韻形態と表記形態の分析を中心に—	105
指導教授推薦文	123
2011年秋学期・2012年春学期国際協力研究科修了者論文題目一覧	129

心理動詞のアスペクト

—局面指示体系による分析—

関口 美緒

要 旨

先行研究においては心理動詞のアスペクトの存在を確認することはできないとされてきた。特に心理動詞に終結点を見出すことは不可能であるという解釈が一般的である。しかし、心理作用が働き、心理を表出するということは、生理的にも心理的にも“実際に”時間経過とともに生起している。現実心理作用が起こるときには時間経過が発生しているのに、言語としての心理動詞に時間経過が把握できないとして処理するのはあまりに短絡的ではないかと思われる。現実と言語のギャップがどうして発生するのか、またそこには何が原因となって解釈の相違が生じるのかという疑問を解明すべく、今泉（2000）の「局面指示体系」による分析方法を使用し、解決の糸口を見出していく。

キーワード：アスペクト、局面指示体系、進行局面、結果状態継続、記憶継続

0. はじめに

先行研究において“心理体験をそのまま述べる動詞は、アスペクトから開放されている”（国研 1985）、またこれらのタイプの動詞は“動きの始まりや終わりが定かではなく”（小泉 1989）、“終結点が把握し得ない”（森山 1983）とされてきた。また工藤（1995）は“日本語においても英語においても、内的情態動詞は、典型的アスペクト対立を實現しない点で共通している”と述べている。

しかし、吉永（2008：97）は、“心理動詞はアスペクトから開放されているとはいえず、心理動詞にもアスペクトがある”という新たな見解を打ち出した。廖（2005）、湯・蔡（2006）、杉村（2007）は、心理動詞のアスペクト概念の有無を心理動詞と開始、継続、完了の後項動詞との結合において証明している。特に問題となるのは、終了・完了の後項動詞「終わる、終える」との共起関係である。

本稿では、先行研究における新たな見解を受けて、心理動詞のアスペクトはどのよ

うにとらえるべきなのかを今泉（2000）モデル（局面指示体系）を使って分析を行う。今泉は動作動詞と状態動詞の全てのアスペクトパターンを分析している¹。これらに心理動詞の下位分類の動詞を対応させて考察を試みる。

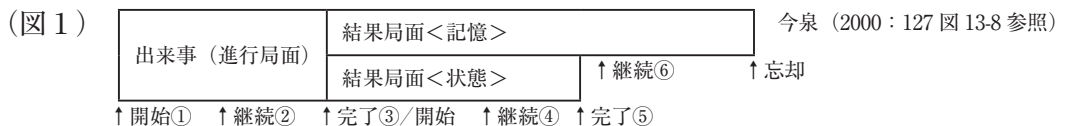
1. 心理動詞に参考となる今泉（2000）局面指示体系モデル

今泉（2000）は、動作動詞と状態動詞における全てのアスペクトパターンを研究している。今泉の分析に沿って心理動詞のアスペクトを調査する。今泉は主に7タイプの動詞アスペクトを紹介している。その中で心理動詞では3タイプの動作動詞のアスペクトが応用できる。

1.1 継続動作動詞・一般的な出来事（読書のアスペクト）

これはもっとも一般的な継続動作動詞のアスペクトで、①から⑥全ての局面アスペクトが表現される。

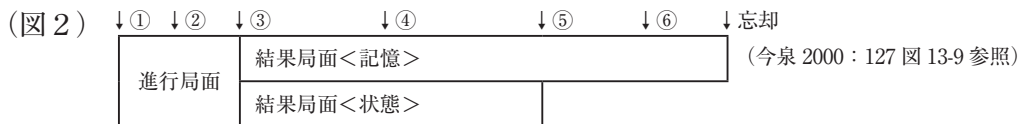
ここでは、「ティー」は進行局面として認知される傾向が強い（今泉 2000：127）。結果局面<状態>については、その本を読んだ結果の知識の維持状態か否かが継続の手がかりとなるので客観的に外観から判断することはできない。



- (1) 今、推理小説を読んでいる。(②進行局面「継続」)
- (2) その小説は昨日読んでいるから、結末を知っている。(④結果状態継続中)
- (3) その本は十年前に読んでいる。(⑥記憶継続中)

1.2 継続動作動詞・短い出来事（着衣のアスペクト）

進行局面が 1.1 に比べて極端に短い。短い出来事では、「ティー」は結果局面<状態>として認知される傾向が強い（今泉 2000：127）。結果局面<状態>は外観による客観的判断ができるものが多く、この場合、着物を着ているか否かということで外観から判断できる。

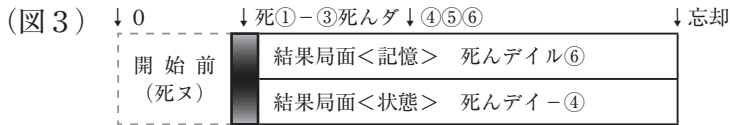


1.3 結果状態継続の瞬間動作動詞（死のアスペクト）

進行局面が無い。「死んだ人」のように「タ」によって名詞を修飾する場合は、結果局面<状態>が継続中なら「状態」を表すこともできる（今泉 2000：128 図 13-10）

¹ 今泉の研究は、日本語構造研究において「全ての可能性を網羅する」という方針を持つ。これは本研究の求める現実と言語の全ての可能性をできるだけ証明するという方針に近いものである。関口（2012）は、言語学に生理学的分析を取り入れた研究を行っており、人間存在の全体的な視点から心理動詞をとらえるという方針を持つ。

参照)。



- (4) たった今、死んだ。(③局面変化の「タ」)
- (5) 彼はもう死んでいる。(④結果状態継続中)
- (6) 二十年前に彼は死んでいる。(⑥記憶継続中)

2. 感覚動詞 (受動的情報感知動詞) のアスペクト

2.1 感覚動詞の定義

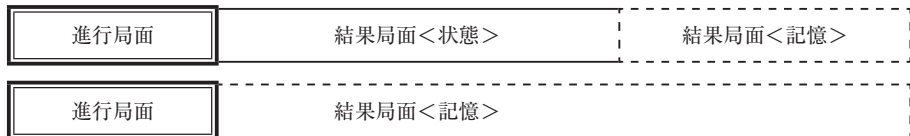
人間の感覚は、(中島 1999 : 133) によれば、五感および運動感覚、平衡感覚、内臓感覚の 8 種類に分類できるとされ、「視覚」「聴覚」「嗅覚」「味覚」「触覚 (皮膚感覚)」があり、「感覚受容器が単純な刺激を受容したことによる単純な過程を感覚と定義する。」とされる。

感覚動詞は、人間の五感に直接関わる第一次的な反応に対する言語的表現のことである (関口 2012 : 1)。日本語言語としての感覚動詞を考える場合、宮島 (1972 : 654-664) の「感覚動詞」のとらえ方が参考となる。それに加え、工藤 (1995 : 77) と吉永 (2005 : 88) の心理動詞と動作動詞の区別を加味した認識をもって本稿の「感覚動詞」の定義とする。宮島の「感覚」の範囲は、医学、生理学の認識に沿い、「視、聴、嗅、味、痛、触、温度、内部」の感覚を含む。そして自動詞が心理動詞、他動詞が動作動詞として扱われる。しかし、本稿では自動詞・他動詞という区別ではなく、受動的情報感知動詞 (見える、聞こえる、「擬態語+スル」形 [心理動詞])、能動的情報感知動詞 (見る、聞く、嗅ぐ [動作動詞]) の別とする。

2.2 感覚動詞のアスペクト

受動的情報感知動詞 ≡ 自動詞² (見える、聞こえる、音がする、におう、味がする、ザラザラする、ベトベトする等) のアスペクトについて能動的情報感知動詞 ≡ 他動詞 (見る、聞く等) と比較しながら分析する。

(図 4-1) 他 ↓ ①開始 ↓ ②進行中 ↓ ③完了 (行為完了) ↓ ④結果状態継続中 ↓ ⑤ (④完了) ↓ ⑥記憶継続中 ↓ 忘却



(図 4-2) 自 ↑ ①開始 ↑ ②進行中 ↑ ③完了 (刺激消滅) ↑ ④⑤ (結果状態継続中) ↑ ⑥記憶継続中 ↑ 忘却

図 1 では動作動詞に当たる能動的情報感知動詞 ≡ 他動詞には行為完了後の④の結果状態継続中が存在する。これは今泉 (2000 : 127、図 13-8) の一般の出来事のアスペ

² 「≡」については、関口 (2012) 参照。「自動詞・他動詞」という観点からの分類ではなく、感覚発生のメカニズムを考慮した結果、「受動的・他動的情報感知」という表現をする。

クト（読書のアスペクト）と同様であると解釈する。一方、心理動詞に当たる受動的
情報感知動詞≡自動詞には④の結果状態継続中の「テイル」は存在しない。例えば、
「見える」の場合の「テイル形」である「見えている」は②の進行中か⑥の記憶継続
中のどちらかしかありえない。つまり感覚動詞は刺激受信終了後、その状態が結果と
して継続する「着ている」というような現象は現実的に把握し得ないため、④の結果
状態継続中にはありえない。

④の結果状態継続中のない理由は、受動的情報感知動詞（≡自動詞）が感覚動詞（心
理動詞）であり、明らかに動作動詞である能動的情報感知動詞（≡他動詞）と異なる
からである。

3. 知覚動詞のアスペクト

3.1 知覚動詞の定義

知覚は、感覚として刺激が感覚受容体で受容され、刺激として脳の感覚野に情報が
送信された後、第二次段階である脳の認知野で認知されたものである。五感について
は、それぞれの第一次段階で確認された信号（視覚であれば、光という信号によって
網膜に映像が投影された単純な段階）が次の脳の認知野に送られ、さらに高度化され
た認知、記憶、他の情報との照合を一瞬の内におこない、知覚に至る。よって知覚動
詞は、感覚動詞に比べてさらに総合的な評価を伴う表現となる。「くたびれる」「疲れ
る」「くらむ」や、派生表現である「肩が凝る」「吐き気がする」などは直接五感の受
容体に到達した情報の表現ではなく、より経験的で総合評価を伴う表現である。つま
り、知覚動詞は感覚動詞より高度な認知と経験や評価などを総合して表現するもので
あり、脳の感覚野からさらに高次の認知野や情動野に達したときの段階を表現するも
のである。

(7) 今、火山の噴火の音が聞こえる。(聞こえている³) (聴覚②進行局面「継続」)

(8) 当時火山の噴火の音がこの辺りでも聞こえている。(聴覚⑥記憶継続中)

比較参考：能動的情報感知動詞≡他動詞・動作動詞のアスペクト

心 (9) 今、君の論文を見ている。(視覚②進行局面「継続」)

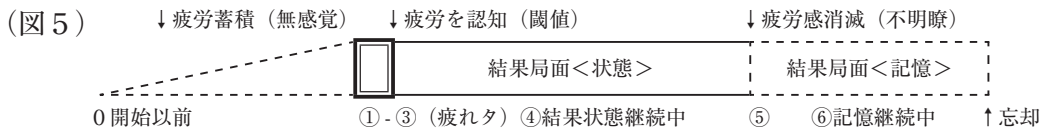
心 (10) 昨夜、そのドキュメンタリーを見ている。(視覚④結果状態継続中) 情報
有

3.2 知覚動詞のアスペクト

先行研究では、感覚動詞と知覚動詞のはっきりとした境界線はなかった。経験論的
に漠然と分類され、それは常識上良しとされてきた。本稿では感覚動詞と知覚動詞と
の間に今泉のアスペクトの観点から明らかな相違を見出す。

³「聞こえる」は一般的には状態（感覚の方に焦点がある）として解釈、可能は音を認識しにくい条件下な
どの場合「聞くことができる」という意味で使用。「聞こえている」は作用（出来事の方に意識的な焦点が
ある）として解釈。

知覚動詞「疲れる」の場合



感覚動詞と知覚動詞のアスペクトには、大きな相違点がある。感覚動詞は、刺激を受容している間のみが進行形の「テイル」であり、信号の受容が停止されたあとに結果状態継続中の局面は存在しない。これに対し、知覚動詞(図5)は身体や心理に外界から影響が与えられている単なる状態では、認知されない。ある程度の情報が蓄積された結果、はっきりとした認知がなされてはじめて知覚される。その認知は、一瞬のできごとであり、死のアスペクト(今泉 2000:128)に類似している。知覚動詞では認知されてからの結果状態④があり、これが「テイル」で表現される。

知覚動詞のアスペクトは、その身体状況が発生し始めてからその状況が明確なものとして認知された結果が開始かつ終了とされ、開始から終了までが瞬間的に起こる瞬間動詞に類似した特徴を持つ。例えば「疲れる」の場合、「疲労」は徐々に蓄積しているにもかかわらず、はじめは認識が無く、ある限界を超えた瞬間に突然身体が疲労していることを認識する。この瞬間、たとえば筋肉痛であれば乳酸が限界値であるマージナルラインを超えたときを「閾値(threshold)」という。現実にかかる生理現象と言語表現を対照させた場合の時間経過は一致する。またもう一つの特徴は、認知後は局面変化完了認知基の「タ」形で表現されることである(今泉 2000:128)。例えば、「疲れる」は、疲労を認知したときに局面変化完了認知基の「タ」の「疲れタ」で表現される。この「疲れタ」は一般的な過去形のタではなく直近過去のタであり、認知が行われたことを表し、局面が変化したことを表すのであり現実には「疲れている」という疲労の進行中を表現している。なお、局面変化完了認知基の「タ」は「事実の変化」と「認識の変化」があるが、知覚動詞においては「認識の変化」の「タ」であると解釈される。注:「局面変化完了認知基」は「完了基」という略称で表現する(今泉 2003:61)。

- (11) 4時間の会議が終わったとたん、どっと疲れた。(③完了基の「タ」)
- (12) 一晚寝ても、疲れている。(④結果状態継続中)
- (13) 五年前のあの重大な会議の後、数日回復できないほど私は疲れている。(⑥記憶状態継続中)

4. 思考動詞のアスペクト

4.1 思考動詞の定義

「感覚(2.1参照)や知覚(3.1参照)」は何らかの刺激・情報源に対して、情報が五感の受容器から神経経路を通り脳の感覚野、認知野、運動野を経由する生理的現象である。そしてこの生理学的な経路をたどる段階で認知される現象が言語表出されたも

のが心理動詞となる。感覚・知覚は、人体にとって生命維持にもつながる原始的・基礎的な段階である。次の段階である「情動・感情」は、感覚・知覚より高次の脳認知の段階である。それら高次の脳認知は、記憶の情報にフィードバックされ、過去の記憶を感情の経験に対照させながら記憶心象として情動野へ信号伝達される。さらに高次元の概念 (concept)・判断 (judgment)・推理 (reasoning) を伴うより知的な作用が行われたものが「思考」である。「思考」には、ある思想を惹起する「心的過程⁴」とある課題に対処する「心的操作⁵」という2種類の機能がある。このように思考には時間的経過を示す「過程」や意図的・意志的にコントロールする「操作」といった概念が存在する。したがって思考動詞にも時間的な概念が当然存在すると考えるのが妥当である。特に、心理動詞と「開始、継続、終了」の後項動詞との結合関係に関する先行研究 (廖 2005、湯・蔡 2006、杉村 2007) で、思考動詞と後項動詞「終わる、終える」と共起した例が数多くあげられている。

「思考動詞」は2節・3節で扱った受動的側面の強い「感覚動詞・知覚動詞」とは異なり、心理の時間的経過と意図性・意志性によりコントロール可能な側面が強いと考えられる。これは「動作動詞」とも共通する特徴である。「思考動詞」は「心的過程」と「心的操作」という2つの特徴を持つ。つまり「思考動詞」は「心理表象 (mental representation) (高野 1994 : 62)」に投影され、価値判断・推測・検索から論理化・記憶化・概念化にいたる過程またはその一部を (動詞として) 言語表現したものであると定義づけられる。

4.2 意志性・意図性の有無による継続動詞「考える」

思考動詞「考える」は、意志性・意図性のある場合と意図性のない場合では③の進行局面の完了の解釈が異なる。

先行研究において「考える」の③の局面に後項動詞「終わる、終える」が共起するという Goo/Google 検索の結果があげられている (廖 2005、湯・蔡 2006、杉村 2007)。さらにその理由を分析した結果、「考える」の持つ「意志性・意図性」が影響していると判断している。また朴 (2006 : 263) は「意志性・意図性」と「終わる、終える」の局面動詞との関係について「「～おわる、～おえる」だけは「意思的行為の終了のみを表す」前項動詞に使われるという制約がある」と述べている。このように先行研究では、「思考動詞」にあたる動詞群、特に「考える」について「意志性・意図性」を伴うという制約がある場合に「～おわる、～おえる」という終了の後項動詞の共起関係を認めている。この考察を踏まえて「考える」のアスペクトを分析する。

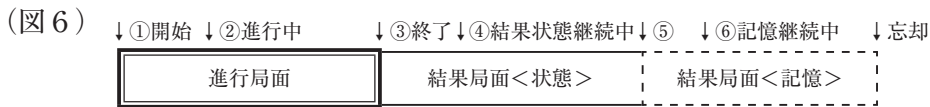
4.2.1 意志性・意図性がある場合の「考える」

意志性・意図性がある場合とは、例えば「試験時間が限られている」場合や「思考

⁴ 「メンタルモデル (人間が心の中に作る事物の雛形)」や「心理表象」に見られるような認知で Johnson-Laird 理論として知られている (高野 1994 : 第1章)。

⁵ 「問題解決」に至る手法など。(高野 1994 : 第1章)

を伴う仕事などで期限が決められている」場合などがある。つまり経験者に時間制限が与えられ、それをコントロールする必要性があり、終了が明確に設定されているという想定の下での知的脳内行為がなされている時の言語的表現である。



③の進行局面の完了は、経験者が時間をコントロールするため明確な線引きができる。つまりある事象に対して「考え」を終了させる時間をさす。③の終了には、「強制的終了（外部からの強制力）」「解決的終了（目的達成）」「放棄的終了」などがある。

(14) 今、この試験問題について考えている。(②進行局面「継続」)

(15) 君の質問については、昨夜のうちに考えている。考えてある⁶。(④結果状態継続中)

(16) 十年前中国で教えていたとき、その問題について考えている。(⑥記憶継続中)

④の結果状態継続中での進行形は、考えた結果、考えた内容や情報が頭に入っている状態を示し、この場合の「テイル」には意図性を持つ「テアル」に置き換えられる。⑥の記憶継続中の進行形は、過去に考えていたという出来事を回想しているに過ぎず、その内容や情報の残存については問わない。③の進行局面の完了では、「覚えた」の「タ」で表現するが、この場合の過去形としての意味合いには一連の作業完了（記憶すべき内容の完全把握）と同時に局面変化完了認知が起きて、記憶の結果状態継続局面が開始される。

4.2.2 意志性・意図性が無い場合の「考える」

人は「考える」時、意志性・意図性を伴わず自然発生的に思考をする場合も多い。この場合、当然③進行局面の完了は不明瞭となり、時間の明確な区切りを持たない。考える内容は、その対象が漠然としていたり、回想であったり、思考と瞑想の間であったり、過去に思考していた事の継続や繰り返しであったりという多くのケースが考えられる。このような場合、絶対時間は経過しているものの、思考中の自己の時間は止まっていたり、逆行していたり、そして当然そのまま経過していたりといった不規則な時間経過がおこなわれていると思われる。開始も終了も不明瞭であるが、進行局面は確実に存在する。③の進行局面の完了は「自然消滅的終了」となる。



(17) 「どうしたの?」「え?あ、あの時のことを考えているんだ。」(②進行局面「継続」)

⁶「考えてある」の「テアル」は、④の局面のみを指し、「動作動詞」と「心理動詞」の両方の可能性がある。話者の意思的行為として解釈される場合、「心理動詞」からの「意味拡張」であると考えられる。

(18) 十年前、彼はそれについて入浴中に考えている。(⑥記憶継続中)

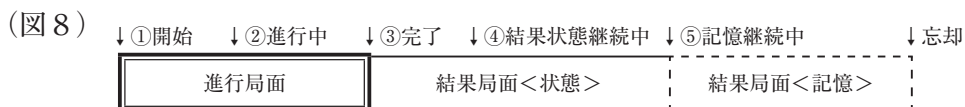
注：意思性・意図性のない場合の②進行局面は思考中であることを本人に認知させる事柄（きっかけ・記憶の引き金 trigger）が必要。

4.3 継続動詞と瞬間動詞の「覚える」

思考動詞「覚える」は、覚える対象の時間的性質によって「継続動詞」か「瞬間動詞」のどちらかの扱いになる。多くの動詞は「継続動詞」か「瞬間動詞」のどちらか一方の性質を持つのに対し、「覚える」は対象の性質によってどちらにも対応する。

4.3.1. 継続動詞の「覚える」

「覚える」が継続動詞として機能する場合とは、覚える対象がある程度時間を有する出来事の場合である。例えば、英単語を 100 語覚える（数量 Capacity）、数学の公式を理解し記憶する（過程 Process）、また何度も覚えることを繰り返し、それを一つの単位的出来事として解釈する（頻度 Frequency）などのように時間の幅を要する場合である。



今泉（2000：127）の一般の出来事のアスペクト（図 13-8）と同様に全てのアスペクトの流れが確認できる。継続動詞としての「覚える」は（19）のものである。

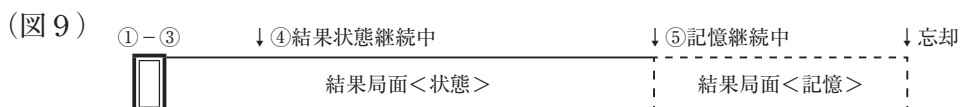
(19) 今、明日の試験に向けて英単語を 100 語覚えているんだ。(②進行局面「継続」)

(20) 試験のために（英単語は）100 語も覚えている。覚えてある。(④結果状態継続中)

(21) 十年前の受験で英単語を相当数覚えている。(⑥記憶継続中)

4.3.2. 瞬間動詞の「覚える」

瞬間動詞としての「覚える」が意味する思考行為は、その記憶の対象となる事象の容量が少ない一過性のもの、つまり記憶作業が一瞬の内に終了する場合である。「認知」してそれを「記憶」という過程であり、4.3.1 の「記憶行為」の継続や積み重ねの行為を有しないため、進行局面は瞬時であると解釈でき、結果状態の継続局面に重点が置かれる。



この場合、今泉（2000：128）の瞬間的出来事のアスペクトに類似する。②の進行局面の進行中は瞬間的で言語表現できない。「テイル」は④の結果状態継続中と⑥の記憶継続中のみで使われる。瞬間動詞の場合、①から③の進行局面で「覚える」「覚えている」は使えず、完了基の「タ」が使われる。その後その記憶したことを忘れる（覚えている状態の消滅）までが④の結果状態継続中の「覚えている」になる。

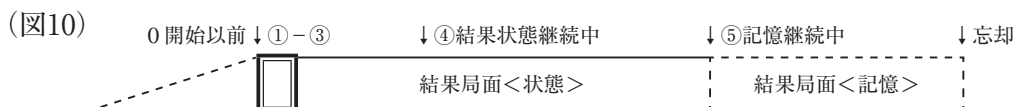
- (22) 「先生の名前覚えた？」 「うん、覚えた。簡単だもん。」 (③完了基の「タ」)
 (23) 「先生の名前覚えてる？」 「もちろん、覚えてるよ。」 (④結果状態継続中)
 (24) 五年前、彼女の電話番号を聞いたとたんに覚えている。(⑥記憶状態継続中)

4.4 瞬間動詞「知る、分かる」と「ひらめく」の相違

思考動詞には、2タイプの瞬間動詞がある。「知る、分かる」のタイプは、知識や情報の獲得後に重点が置かれているためその知識や情報を維持している状態に注目した言語表現となる。一方、「ひらめく」タイプは、その思考行為に注目されるために実際には結果状態は継続されるにもかかわらず、その局面の言語表現はなされない。

4.4.1 知識・情報獲得の瞬間動詞（知る、分かる、理解する等）

「知る、分かる」のタイプは、思考動作というよりも知識や情報を理解することに重点があり、思考行為後の結果状態に重点が置かれる。思考後の結果状態とは、その知識や情報を単に一時的に記憶保持しているか、それらが自己知識の一部（同一化identification）となっているかの状態である。

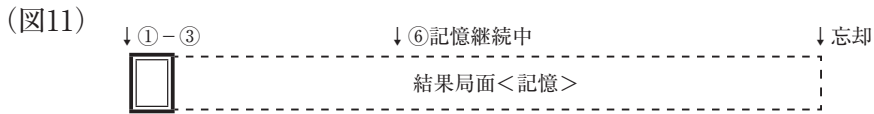


①から③の進行局面に至る前に0という「開始以前」の段階がある。「知る、分かる」という思考行為は瞬間であっても、その行為には前段階がある。まず、知識や情報が蓄積され、脳内に存在する過去の記憶との照合がなされ、それが新たな情報として受け入れられたとき認知されたことになる。受け入れ以前の段階が「0」の「開始以前」である。進行局面は、瞬間的に終了し、知識や情報が思考行為の結果残っている状態が結果状態継続中の「テイル」で表現される。局面②は表現されにくい。

- (25) 「あっそうか、密室のトリックが解った。」 (③完了基の「タ」)
 (26) 「もうそのトリックは解っている。お前が犯人だ。」 (④結果状態継続中)
 (27) その理論は昨日論文を読んだからもう知っている。(④結果状態継続中)
 (28) 十年前にその原因はわかっている。(⑥記憶継続中) 情報の有無は不問

4.4.2 思考行為瞬間注目型の瞬間動詞（ひらめく、思いつく、心に浮かぶ等）

「ひらめく、思いつく」のタイプは、その重点が知識や情報の獲得ではなく、その行為によって局面が急遽変化したことに重点がある。関心のある出来事としてはその瞬間のみなので、実際には④の結果状態継続中という知識維持の状態はあるものの通常言語表現はしない。また、0の「開始以前」の状態については、4.4.1のように知識や情報の理解の過程ではなく、過去の思考行為の過程が重要視されないタイプの「着想、アイデア」が対象となり開始以前の思考行為はあまり強調されない。「心に浮かぶ」には④がある。



(29) 「あっ、いいアイデアがひらめいた。」(③完了基の「タ」)

(30) 彼は八年前、散歩中にその理論がひらめいている。(⑥記憶継続中)

5. 感情動詞のアスペクト

5.1 感情動詞の定義

感情の定義については、まず感情における心理学の視点と日本語言語表現からの視点の相違について考察する。人間の感情の動作・振る舞いの主な構成要素は、顔の表情と非言語動作⁷である。エクマン (Hockenbury 1998:333) は、感情を表わしたり、コミュニケーションをとるのに最も重要なのは、顔の表情であるとしている。顔の表情は、7000 以上存在する。さらにエクマンとフレセンは、顔の筋肉組成から分析し、人間の感情の基本的な表現(The Emotion Basic Expressions)は6種類であるとした。それは、「怒り、幸福、悲しみ、嫌悪、恐れ、驚き」(anger, happiness, sadness, disgust, fear and surprise plus contempt)であり、この6つの感情は、万人に共通するものである⁸。これはそのまま基本的感情にもなる (Hockenbury1998 : 328)⁹。この6分類とジェームスの人間の本能に関する感情リスト (James's List of Instincts1890, Hockenbury 2004 : 298) において共通に設定されている分類項である fear (恐怖)、anger (怒り)、disgust (嫌悪) の3つの感情は他と異なり人間の先天的な本能に基づいて現れるものであり、その表出過程は他の要素 (経験や環境、社会文化など) には影響されず、直接的に情動として表出されると考えられる (Hockenbury1998 : 328 関口訳)。ダマシオは、情動にはジェームス学派的いう「第一次情動 (生得的)」とさらにその高次に位置する「第二次情動 (後天的)」があるとしている。さらに感情には「情動的感情 (情動に影響される感情)」と「背景的感情 (情動に基づかない身体や風景のイメージ・記憶の想起)」としている (ダマシオ 2010)。

日本では感情を「喜怒哀楽」として表現してきた。喜は pleasure or joy、怒は anger、哀は sadness、楽は happiness (「楽」は「楽な (easy, comfortable)」ではなく「楽しい」と解釈する) であるとするならば、心理学上の感情の捉え方と日本語

⁷ Nonverbal behavior とは、言葉を伴わず、うれしい時にガッツポーズをしたり、欲求不満の時にドアを乱暴に閉めたりする態度 (Hockenbury1998 : 333, 関口訳)。

⁸ 例外としてエクマンは日本人はある特殊性を見せる国民であるとしている。それは社会文化に左右される感情表現で、これを display rules という。日本人は、通常であれば「嫌悪 (disgust, distaste)」や「恐怖 (fear)」を表す場面で、微笑む (smile)。日本人の文化表現習慣から否定的な感情を表わすべきではないという心理が及んだものである。(Hockenbury 1998 : 334 関口訳)

⁹ Hockenbury quoted from Paul Ekman1992a; David Matsumoto2000.

の感情表現の捉え方には違いが見られる。基本概念の違いは、エクマンが人間の表情としての情動を対象としているのに対し、「喜怒哀楽」が日本語の言語の表現としての感情・情緒の分類であるということである。

エクマンの分類のうち、特に「嫌悪、恐れ、驚き」は直接五感に関係する。五感の不快感（負の感覚）から「嫌悪」感が沸きあがる。「恐れ」は、過去の経験や情報と照合され、それは何か身体に危険をもたらすであろうと判断された情報への感情の反応である。感覚器官からの限度を超えた強い刺激は「驚き」となる（驚きには正負の感情はない）。快・不快は最も下位に属する感情である（Maslow 1970, "Basic needs", Hockenbury 2004 : 332）。怒り・悲しみ・幸福はさらに深い感情の上（高次で上位に属する）に成り立つ（Maslow 1970, "Psychological needs~Self-fulfillment needs", Hockenbury 2004 : 332）。

日本語の「喜怒哀楽」は直感的な五感の快・不快ではなく、より上位の感情段階に存在する。日本人の情緒について九鬼（1999）は「快—不快、緊張—弛緩、興奮—沈静」の3軸と中核（core）の情緒の関係を論じている。この3軸については核になる情緒（感情）基盤「驚、欲、寂、嬉、愛、恋、悲、憎、怒、恐¹⁰」からのベクトルの関係であると解釈する。九鬼はこれらの感情の関連性を系図（九鬼 1999 : 194）にしている。これらの感情は切り離されてはおらず、ベクトルによる方向性と力によって別の感情を引き起こす。つまり日本人の感情は微妙な力加減と方向性により繊細に変化するとしている。

このようなことから日本語の感情を表現することばに、心理学上の分類をそのまま適応することはできない。日本語の感情表現の「核」になる語ですら、心理学での「基本情動」より高次な感情も含まれ、それらの「核」になる語同士や派生の関係も複雑である。本稿は日本語の特徴と生理学・心理学との現象の違いを考慮した上で、実際に起きている生理的・化学的・物理的現象から推察して言語活動にマッチングしていく方法で外見からは見えない心理の時間的経過や心理変化の局面を見出していくのが妥当であるという立場に立つ。アスペクトつまり時間的経過や局面の変化は日本語の特徴の追及（語の意味や文法）というより、より身体の心理学や生理的現象（脳科学）に照らした方が解明しやすいということである。したがって前項の「感覚動詞・知覚動詞・思考動詞」の定義である科学的解釈での方法を使って感情動詞を定義する。「五感の感覚受容器による受動的な情報感知より上位に位置し、脳の情動野で認知され、経験や情報から総合的に判断された人間の直感的情動または情的過程による感情を表現する動詞、つまり「情動」と「感情」¹¹を表現する動詞」である。

¹⁰ 九鬼は「核」とは名づけていないが、情緒の系図の中で最も大きな円で囲まれた情緒を著者が「核」と命名した。

¹¹ Damasio (2010:236-237) は、「情動 (emotion)」と「感情 (feeling)」について述べている。「感情」は、情動が微妙に変化したより複雑な認知的内容と（略）身体状態が少しずつ変化したものと結び解いた時に経験される。感情は情動に基づいているといえる。

5.2 感情の継続動詞—対象相手がいる場合と具体的原因が明確な場合

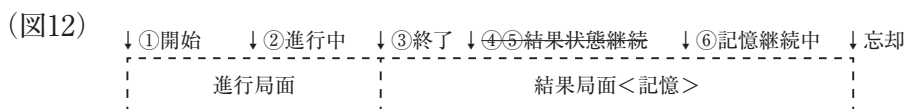
継続性のある感情動詞のアスペクトには2つのタイプがある。対象物に対する感情を表現する場合と、具体的な原因が明確な場合である。2者の線引きについては考察中であるが、前者(5.2.1)は「感情(feeling)」が、後者(5.2.2)には「情動(emotion)」を表す動詞が相当するであろうと思われる。

5.2.1 対象となる事象のある継続動詞

対象となる事象がある場合とは、相手や出来事が対象となる場合が多く、文章の中においては目的格を必要とする。③の進行局面の完了には2つのパターンが考えられる。一つは自然消滅的終了のタイプ、もう一方は目標の変化による終了のタイプである。これらの場合、対象は「ヲ」格で表現される場合が多い。

5.2.1.1. 感情の自然消滅的終了の継続動詞(愛する、憎む、恨む、恋する、好む、嫌う等)

感情の消滅パターンとして、「自然消滅や時間経過による忘却」が考えられる。この場合、③の進行局面の完了は曖昧であり、その完了には時間軸(横軸)の経過を有する場合が多く、その経過は徐々に度合いが減少していく右肩下がりの線を描く。



感情動詞の継続動詞の特徴として、結果状態継続中は存在しない。「テイル」形があるのは進行中と、記憶状態継続中のみである。

(30) 私はかわいい子供たちを愛している。(②進行局面「継続」)

(31) 二十年前、私は彼女を憎んでいる。(⑥記憶継続中) 現在も憎んでいるかは不問。

また感情動詞において「ル」形が進行局面を表すこともできる。本稿では詳細にふれず、別稿に譲る。

5.2.1.2. 対象の変化による終了(愛する、憎む、恨む、恋する、好む、嫌う等)

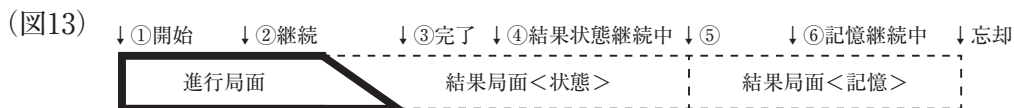
もう一方の感情の消滅パターンは、目標の変化による興味の消失が考えられる。それは、新しい相手の登場、新たな人生の目標の出現などがある。これらの場合、③の進行局面の完了はある程度明確な終了の線引きができる。また特異な例では、同様の対象への正反対の感情発生による終了がある。この場合は、ある程度明確な線引きができるが、それと同時に全く正反対か別の感情と入れ替わる。どちらも③の進行局面の完了から次の局面へ移行する場合、すでに同じ動詞の延長線上ではなく、別の感情への転換が行われる。当然、その現象からも感情動詞の継続動詞という性質からも④の結果状態継続中は存在しない。④の結果状態継続中が表現できないので、例文からは5.2.1.1と同様な現象を示すが記憶状態継続中と同時に進行して異なった感情に変換されるといった2つの現象が起こる。

(32) 五年前、別の男性を愛している。(⑥記憶状態継続中)

(33) しかし、今は主人を愛している。(②進行局面「継続」)

5.2.2. 特定の具体的原因の明確な場合の継続動詞

(弱る、楽しむ、苦しむ、喜ぶ、怒る、悲しむ、悩む、喜怒哀楽等)



(34) 彼女は彼のギャンブル癖に悩んでいる。(②進行局面「継続」)

(35) 乗客は飛行機が大幅に遅れたことで怒っている。(②進行局面「継続」)

5.2.1 の対象事象や対象相手に比べて、原因・理由が特定の具体的な場合、感情動詞の継続動詞はその原因・理由を「デ」格や「ニ」格で表現することが多い。③の進行局面の完了の理由は、その具体的理由が消滅されたときであるため、5.2.1 に比べて明確な終了点が認識され、終了に要する時間軸も短い。この場合の動詞群は、5.2.1 の動詞群に比べて総合的認知を伴わない単純な感情の反応を表わす感情動詞である。③の進行局面の完了の時間軸に要すると思われる時間はその理由によって異なるが、「終了・除去・解決」の場合はその到来の瞬間で完了し、「妥協・放棄・断念」の場合はそこに至る過程が存在する。

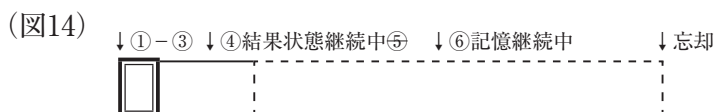
5.3 感情の瞬間動詞—感覚・反射的な場合と認知・評価的な場合

5.3.1 感覚・反射的反応の瞬間動詞

感情動詞において感覚・反射的反応、つまり感情が思考的認知野と結びつかずに(または結びつきが非常に弱い)直接直感的に表現されるタイプの瞬間動詞は、結果状態継続中の状態を表現するかしないかの2つのタイプがある。今泉(2005:128 図13-10)で参考になるのは、瞬間的出来事のアスペクト(死のアスペクト)であり、どちらも進行局面がみられない点に共通性がある。しかしこの場合、死のアスペクトにみられる開始前の状態の存在は確認されない。

5.3.1.1. 結果状態継続中のある感覚・反射的反応の瞬間動詞

(驚く、キレル、ビックリする、呆れる等)



①-③の進行局面は一瞬にして起こる。その結果の状態④が継続する。「驚く」の場合、「驚いている」は④の結果状態継続中の出来事である。しかしこの場合の継続時間は短時間である。また、⑤の結果状態継続完了のアスペクトは明確に表現されないため言語表出されない。

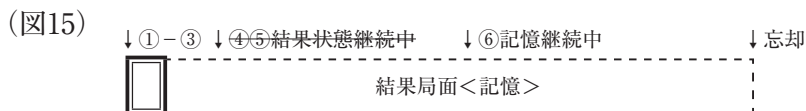
(36) 「突然、暗闇から出てくるなんて。ああ、ビックリした。」(③完了基の「タ」)

(37) 私は彼の失礼な質問にまだキレている。(④結果状態継続中)

- (38) 私たちは、その政治家の非常識な言動に呆れている。(④結果状態継続中)
 (39) *彼は、五年間ずっと驚いている。(④は短時間のみ表現可能) 時間の副詞
 (40) 彼は、五年前その出来事に驚いている。(⑥記憶継続中)

5.3.1.2. 結果状態継続中のない感覚・反射的反応の瞬間動詞

(かっとする、ドキッとする等)



今泉 (2000 : 128) の死のアスペクトの進行局面同様、①から③の局面は一瞬で起こる。この場合、④の結果状態継続中はなく、したがって⑤の結果状態完了もない。

- (41) 私は、彼の失礼な態度にかっとした。(③完了基の「タ」)

注：非アスペクトの単なる出来事とも考えられる。

- (42) *その結果を知って、かっとしている。

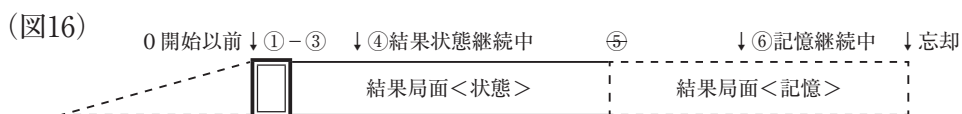
- (43) *突然、部屋の明かりがついて、ドキッとしている。

- (44) 五年前、運転中に突然人が飛び出してドキッとしている。(⑥記憶継続中)

5.3.1.1 と 5.3.1.2 は瞬間動詞の性格上、①から③の進行局面が瞬時であるという解釈に共通性があるものの、結果状態 (④や⑤) の解釈が明らかに異なる。また同じ瞬間動詞であっても「死のアスペクト」のように開始以前の予備段階の状態はみられない。

5.3.2 認知・評価的反応の瞬間動詞 (失望する、落胆する、がっかりする、しらける等)

感情動詞の瞬間動詞で認知・評価的な反応を示す動詞は、その認知・評価的言語表出を示す前にその感情を確認するまでの開始以前の予備段階がある。これは、今泉 (2005 : 128) の瞬間的出来事の「死のアスペクト (図 13-10)」の解釈に類似する。



0の予備段階は、期待があって、現実がそれにあわないことが認知されるまでの期間を指し、それが認知された時、①の進行局面の開始へ変化する。瞬間動詞であるため①から③の進行局面は瞬間的である。③の進行局面が完了した時、事実の局面変化完了認知の開始の「タ」による言語表現がなされる。④の結果状態継続中は「テイル」で表現され、記憶継続中においても「テイル」で表現される。

- (46) 私はその残念な結果を知って (0 予備段階)、落胆した。(③完了基の「タ」)

- (47) 数日たっても私は落胆している。(④結果状態継続中)

- (48) 五年前、私はその出来事に落胆している。(⑥記憶継続中)

6. 「テアル」と「シマウ」の解釈

6.1 「テアル」の解釈

思考動詞「考える」「覚える」などの④の結果状態継続中であることを表すために使用可能な表現として「テイル」と「テアル」がある。「テイル」が単に進行中であるのに対し、「テアル」は目的があつて意図が働いた場合に使われる。そのため、「テアル」は心理動詞で意志性・意図性がある場合にのみ使用可能であるが、心理動詞のもつ受動的な性格性の中では制限されるため、動作動詞のように使用頻度は多くはないと思われる。

6.2 感情動詞＋「シマウ」と局面変化完了認知基「タ」の解釈

「シテシマウ」の「シマウ」は“後悔、不本意、残念”等の意味を含有する（例：「愛してシマウ」は不本意の意味を含有）。アスペクトについては、心理動詞では「局面変化完了認知の開始」と解釈されるが、元来「シマウ」は「かたをつける。終わりにする。」の意味であるから、動作動詞の場合は額面どおり「完了」と解釈する。しかし、「愛しちゃった」の場合、「愛してしまった」の意味であるから、③の局面変化完了認知の開始であり、④の結果状態の「愛シテイル」が開始されることになる。それとは対照的に「恋に落ちた」は動作動詞「落ちる」の心理的表現であり、③の瞬間動詞終了の「タ」である。

さらに「タ」の心理動詞と動作動詞における焦点の相違を局面別に示すと表1のようになる。

(表1) <心理動詞と動作動詞の「タ」と「テイル」の重点の相違>

	①タ (開始)	②テイル (進行中)	③タ (完了)	④テイル (結果状態)
心理「愛する」	◎	◎	×	×
動作「読む」	△	◎	◎	○

注：①から④の番号は、局面の番号である。

(49) 愛したときから、苦しみが始まる。(完了基・開始「タ」)

(50) 僕は彼女を愛しちゃった。(「シマウ」の完了基の「タ」)

(51) 僕は彼女を愛シタ。(過去形の「タ」、完了基の「タ」のいずれも可能)

(52) 僕は彼女に恋をしタ。(完了基の「タ」、ヲ格使用)

動作動詞 (53) 僕は恋に落ちタ。動作動詞の心理的表現

英語 (54) I fell in love. (fall の過去形、落ちタ)

以上のように「シテシマウ」を「心理動詞」に結合させた場合と「動作動詞」に結合させた場合とでは、それぞれの「タ」が対応する局面が異なることがわかった。その違いは、局面による重点度の違いからなるものであると思われる。しかし、思考動詞の「考える」の場合、感情動詞の「愛する」とも若干異なる局面を示す。今後の課題とする。

7. まとめ

以上のように心理動詞の場合は、状態動詞や動作動詞とは異なり多種多様なケースに分けて考える必要がある。しかし、心理動詞の場合も今泉（2000）の分析方法を応用して考えることができる。以下、考慮すべき点、比較すべき点をまとめる。

7.1 感覚動詞と知覚動詞

7.1.1 感覚動詞と動作動詞の差異

先行研究（国立国語研究所 1972）では、五感の感覚を表現する動詞は他動詞、自動詞に関わらず「感覚動詞」として位置づけている。しかし、局面指示体系（今泉 2000）による分析の結果、異なったアスペクトを示すことが判明した。五感の感覚を表現する動詞の内、他動詞≒能動的情報感知動詞には、今泉（2000：127）の一般の出来事のアスペクトが相当する。能動的動作であるので一般的な動作動詞と同様に全てのアスペクトが存在する。一方、自動詞≒受動的情報感知動詞は心理動詞の感覚動詞であり、この場合経験者が自らの意志を持って情報受信をコントロールすることはできない。その特徴として、刺激の消滅と共にその状態が終了するため、④の結果状態継続中とその完了のアスペクトは存在しない。

7.1.2 感覚動詞と知覚動詞の差異

吉永（2008）は、感覚動詞と知覚動詞を「知覚感覚的心理動詞」として分類し、英語においても Pustejovsky（1993）は、Perception（知覚・感知）動詞として分類している。しかし、五感に直接関係する動詞（国立国語研究所 1972）は、「感覚動詞」として取り上げ、工藤（1995）も「感覚動詞」と「知覚動詞」を分けている。生理学からの観点からも関口（2012）はその差異を考察している。この考察から、今泉の局面指示体系のアスペクト分析をおこなった結果、双方には明らかな差異が見られた。感覚動詞は五感の感覚器官が刺激を受信している間、つまり進行局面の認知が強調され、結果状態継続中がないのに対し、知覚動詞は進行局面にあたる認知は瞬時であり、その後の結果状態継続中が表現される。

7.2 思考動詞のアスペクトの多様性

7.2.1 意志性・意図性による差異

思考動詞は、意志性・意図性がある場合は、より動作動詞的なアスペクトを示し、無い場合は③の進行局面の完了が不明瞭な心理動詞的なアスペクトを示す。意志や意図を持って時間のコントロールをする場合、今泉の一般の出来事のアスペクトに類似する。③の完了は「強制的終了」「解決的終了（目的達成）」「放棄的終了」などの理由で終了の時間が特定できる。一方、意志性や意図性が無く、自然発生的に思考が浮かんだ場合、③は不明瞭で表現できない。先行研究で明らかにされた心理動詞と完了の後項動詞「終わる、終える」の共起例の多くは、思考動詞の意志性・意図性がある動作動詞としての特徴をもつ場合であると考えられる。

7.2.2 継続・瞬間の両面を持つ動詞

思考動詞「覚える」は、その記憶する対象によって継続・瞬間動詞の別がある。「覚える」は意志的・意図的な心理の動詞であり、この点で動作動詞と同様のアスペクトを示す。

7.2.3 二種類の瞬間動詞

思考動詞には2種類の瞬間動詞がある。知識・情報獲得を目的とした瞬間動詞「知る、分かる、理解する」などは、④の結果状態継続中が強調される。そして知識・情報を認知する以前の0の段階があり、実際のアスペクトはそこから始まっている。一方、「ひらめく」は、集積された無作為の記憶が照合された結果、認知が偶然性をもってなされた行為であるため、0の開始以前の段階は含まない。また実際には④の結果状態は存在するものの、関心のある出来事としてはその瞬間のみなので通常④は言語表現がなされない。このように両者間には0の開始以前と④の結果状態継続中の解釈に相違がある。

7.3 感情動詞のアスペクトの多様性

7.3.1 目的語の違いによる二種類の継続動詞

「ヲ」格で表現される目的語の持つ範囲によって2つの異なった傾向の進行局面の完了(③)パターンが考えられる。各局面の現れ方は同じであるが、進行局面の完了時間・理由・原因等に差異が見られる。「愛する、憎む、恨む、恋する」などは、対象となる出来事(事象)や相手が存在する。しかし、それらは時間的にいつの間にか生起し、具体的に一対一で対応されるものではなく、漠然としている。この場合の③の進行局面の完了は、不明瞭であることが多い。③の終了理由には2通り考えられ、「自然消滅タイプ」として自然消滅、時間による忘却などの場合と、目標変化による「興味喪失タイプ」として新しい相手の出現、新たな人生目標、相反する感情への変化などの場合がある。自然消滅タイプの場合の③は全く不明瞭であるが、「興味喪失タイプ」の場合、線引きが可能である。しかしどちらにもいえることは、④の結果状態継続中と⑤の結果状態継続の完了が表現されず、進行局面に重点がおかれるという特徴があることである。

また、特定の具体的原因による場合、対象となる目的語は「ニ」格(「ヲ」格)で表現される。「弱る、まいる、苦しむ、楽しむ」などは、③の進行局面の完了は、問題解決・排除・妥協によって終了するため、終了の線引きがしやすい。これらの感情動詞は、外的な影響と経験者の感情双方の作用によって時間のコントロールがなされると考えられる。

7.3.2 三種類の瞬間動詞

7.3.2.1 感覚・反射的反応の二種類

感覚・反射的に感情を表わす瞬間動詞には、2つの異なったタイプのアスペクトがある。どちらも瞬間動詞であるので①から③の進行局面における「テイル」は実際に

も言語的にも表現されないが、「驚く、キレル」などには④の結果状態継続中が存在する。しかし、④の特徴としてその継続中の時間は非常に短期間である。一方、「かっとする、ドキッとする」などのようにその瞬間の局面変化完了認知を強調する瞬間動詞には、④の結果状態継続中は存在しない。「かっとしている、ドキッとしている」は⑥の記憶継続中にしか表現されない。どちらにも⑤の結果状態継続完了はない。

7.3.2.2 感覚・反射的反応と認知・評価的反応

感情動詞の瞬間動詞には、その反応の仕方によって2つのアスペクトが存在する。これは、感覚動詞（反射的）と知覚動詞（認知的）の差異の求め方と非常に類似していると考えられる。感覚・反射的反応の場合、0の開始前、つまり認知されるまで予備段階は無い。一方、感情の認知・評価的反応に伴って産出される瞬間動詞「失望する、落胆する、がっかりする、しらける」などは、認知行為自体は瞬時におこなわれるもののその認知までの知識や情報を評価する開始前の段階があり、今泉の瞬間的出来事のアスペクトに類似する。よって「テイル」は、④の結果状態継続中を表現する。すなわち0の開始以前の時間と④を表現しない感覚・反射的反応の瞬間動詞とは大きく異なる。

7.4 結論と今後の研究

以上のように心理は心的な活動であり外見からでは判断しにくい、さまざまな営みがある。心理動詞は、状態動詞や動作動詞に比べてアスペクトのパターンが多様である。本稿は今泉（2003、2005）の局面指示体系の理論、つまり状態動詞と動作動詞の全てのアスペクトパターン、そして心理動詞を対照させて得た結果、状態動詞と動作動詞の基本パターンのみでは説明のつかないアスペクトに発展した。しかし、同時に心理動詞にもアスペクトが存在することが証明された。心理動詞のアスペクトを今泉の局面指示体系と対照させると、「局面変化」がある部分では明確に表現され、またある部分では不明瞭であり、また現実にはあっても言語表現されないといった具体的な時間の領域が見えてきた。今後は、アスペクトの欠如している動詞についてその生理学的現象と言語的根拠を対照させ、原因と理由¹²を具体的に分析していきたい。

参考文献

- 今泉喜一（2003）『日本語構造伝達文法 発展 A』揺籃社
今泉喜一（2005）『日本語構造伝達文法 改訂 05 年版』揺籃社
金田一春彦（1950, 1976）「国語動詞の一分類」『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
九鬼周造（1999）「情緒の系図」『「いき」の構造他二編第 39 版』岩波文庫
工藤真由美（1995）『アスペクト・テンス体系とテキスト』ひつじ書房

¹² 本研究では「原因」を客観的・自然摂理的な個々の事象ととらえ、「理由」はその経験者の心理状態をひきおこした「原因」の総合的・経験的事象ととらえる。つまり原因は人類としてほぼ同じように存在するが、原因の認知（理由）は人それぞれであると解釈する。

- 小泉保他（編）（1989）『日本語基本動詞用法辞典』大修館書店
- 国立国語研究所（1985）『現代日本語動詞のアスペクトとテンス』秀英出版
- 国立国語研究所（1972）『動詞の意味用法の記述的研究』秀英出版
- 杉村 泰（2007）「複合動詞との共起から見た日本語の心理動詞の再分類」二〇〇七年日語教学国際会議論文集（東呉大学日本語文学系）
- 関口美緒（2012）「日本語感覚動詞の特徴—生理的現象から言語表出を考える」『言語と交流第15号』
- 高野陽太郎（1994）「第1章：思考の心理学」『岩波講座認知科学8 思考』岩波書店
- 中島義明他（1999）『心理学辞典』有斐閣
“The Yuhikaku Dictionary of Psychology”
- 朴 敏瑛（2006）「局面動詞「～おわる」と「～おえる」の構造と意味」韓国外国語大学 30,259-277
- 森山卓郎（1988）『日本語動詞述語文の研究』明治書院
- 湯 麗・蔡 親平（2006）「日本語における心理動詞のアスペクトについて—限界性と非限界性—」福井工業大学紀要第36号
- 廖 紋淑（2005）「局面動詞「～始める」「～続ける」「～終わる、～終える」と内的情態動詞との共起関係についての記述的研究」『ことばの科学』18、名古屋大学言語文化研究会
- 吉永 尚（2008）『心理動詞と動作動詞のインターフェイス』和泉書房
- Damasio, Antonio, R. (2010) 田中光彦訳『デカルトの誤り—情動, 理性, 人間の脳』(Descartes' Error — Emotion, Reasons and The Human Brains) 講談社
- Benson, D. F., M.D. (1994) 橋本篤孝監訳『思考の神経心理学』(The Neurology of Thinking)、金峰堂
- Hockenbury, Don H. and Hockenbury, Sandra E. (1998) 『Discovering Psychology』Worth Publishers
- Pustejovsky, James (1993) “Semantics and the Lexicon” Kluwer Academic Publishers 55-72
- Berrey, Lester, V. (1962) 『Roget's International Thesaurus, Third Edition』 Thomas Y. Crowell Company

認知言語学の観点から見た 中国語の「的」の意味変化と文法化¹

辛 奕羸

要 旨

助詞としての中国語“的”は、現代中国語文法で、重要な地位を占めている。現代中国語の“的”は形容詞>名詞>副詞>助詞の方向に沿って、文法化してきた。ただ、その文法化は1つの直線に沿って発展したわけではなく、“底”と“地”が“的”の発展に影響を与えている。本研究において中国語の“的”の意味変化を明らかにしたが、その過程において“的”の文法化には多元的要因があることが明らかになった。

キーワード：“的” 卓立 メタファー 文法代用 文法化

1.0 はじめに

「文法化」という語がフランスの学者 Antoine Meillet によって作られた用語であることは言うまでもないことである。(The term “grammaticalization” itself was apparently coined by the French linguist Antoine Meillet. (Hopper & Traugott 2003:19)) しかし、実は、「文法化」という概念は中国人学者が既に13世紀に提示している。元代の周伯琦の《六書正譌》に“大抵古人制字、皆从事物上起。今之虚字、皆古之实字”（おおむね古代人は事物から文字を作った。今日の虚字²はすべて古代における実字³である）という記載がある。そのような言語現象は中国語文法学で“实词虚化现象”と称された。これは、今日の文法化現象に相当する。

文法化の研究は歴史言語学の範疇に属しており、通時研究と共時研究を結びつけて、通時的側面から共時的平面上の現象を解釈する必要がある。Hopper & Traugottでは、

¹ 本論文は日本中国語学会 2012 年度第 3 回関東支部例会で行った口頭発表の内容に加筆修正を行ったものである。口頭発表の席上では有益なご意見やご指摘をいただきました。ここに深く感謝申し上げます。

² 古代中国語の“字”の概念と“詞”の概念はだいたい同じである。すなわち、古代の“虚字”は現代の“虚詞”である。“虚詞”は中国語学の用語で、一般言語学の機能語に当たる。本論文は中国語学についての論文であるので、「機能語」の代わりに、“虚詞”を使う。

³ “実字”は現代中国語の“実詞”である。

文法化は次のように定義された。

語彙項目や語彙的構造がある言語学的文脈において文法的機能を持つようになるという変化のことであり、一度文法化されると、新しい文法的機能へと発展しつづける⁴。

(Hopper & Traugott ; 1993、日野資成 訳：2003)

すなわち、文法化とは意味的には内容語から実質的意味を失わせる現象であり、機能的には文法機能だけを持たせることになる現象である。一般に、文法化は新しい文法形式を生じ、語が発音の変化を生じる可能性もある。文法化の過程は文字使用と音声と文法と意味などの関わる複雑な過程である。

中国語の“的”は現代中国語の文法において重要な位置を占めているが、古代語においては、内容語として使われていた。時間の流れとともに、名詞の意味がだんだん失われて、虚詞になった。本論文は、認知言語学の理論を使って、5つの問題をめぐって、“的”の意味変化と文法化を説明する。

(ア) 中国語の“的”が形容詞から名詞へどのように変化したか。

(イ) 中国語の“的”が名詞から副詞へどのように変化したか。

(ウ) 中国語の“的”が副詞から助詞へどのように変化したか。

(エ) 名詞から副詞までの変化と副詞から助詞までの変化はどのように異なるか。

(オ) 中国語の“的”の意味変化と文法化の特徴は何か。

初めに、2節で図を使って、中国語の“的”の意味的発展の記述を行う。3節では中国語の“的”の文法化における認知メカニズムを論じる。3.1節で、“的”の実詞としての意味派生過程の問題、すなわち、(ア)、(イ)の問題を扱う。また、3.2節で、“的”の虚詞としての意味派生過程の問題、すなわち、(ウ)、(エ)、(オ)の問題を扱う。最後に、まとめを行う。

2.0 中国語の“的”の意味的発展の記述研究

太田辰夫 (1985:320)、刘坚、江蓝生、白维国、曹广顺 (1992:143-145)、向熹 (1993:459)、曹广顺 (1995:136)、祝敏彻 (1996:47)、蒋冀骥、吴福祥 (1997:559-560)、俞光中、植田均 (1999:410)、石毓智 (2000:64)、冯春田 (2000:424)、齐沪扬 (2002:73) 蒋绍愚 (2005:175) などによって、“的”は“底”から発展したことが明らかになっている。また、“地”は“的”の使い方に影響を与えた。本節では、図を使って、“底”、“地”、“的”の意味的発展を簡単に紹介する。

⁴ 日野資成 (訳) (2003)『文法化』九州大学出版会

2.1 中国語の“底”の通時的な発展について

9世紀以前には、“底”は代名詞として使われていたが、9世紀以降、助詞になった。宋代においては、“的”が“底”にとってかわり、助詞として発展している。図1は“底”の意味的発展についての図である。

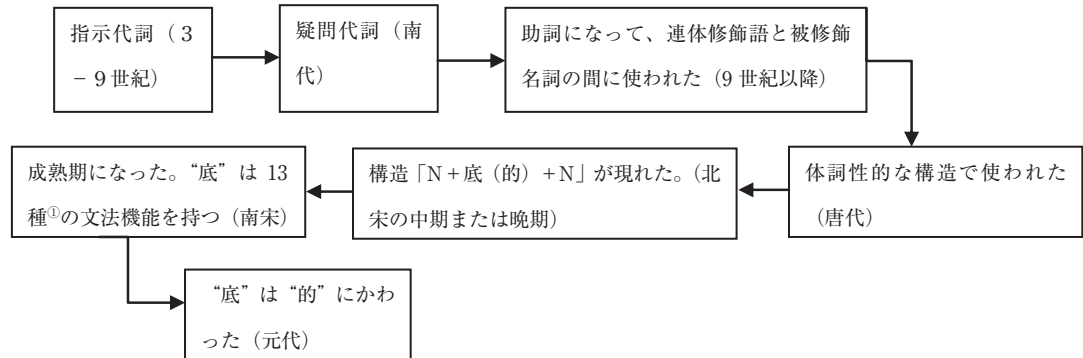


図1 “底”の意味変化

付注：

① “底”は次の品詞と結び付く。代名詞、名詞及び名詞性の修飾構造、形容詞及び形容詞性の修飾構造、動詞及び動詞性の連用修飾語と被修飾語からなる構造、数詞及び量詞、方位詞、動目構造、動補構造、主述語構造、介目構造、“兼語”類の構造、連動構造、固定構造と結び付く。

2.2 中国語の“地”の通時的な発展について

中国語の“地”は2種類の品詞として存在する。名詞と助詞である。“地”は名詞としての意味は助詞としての意味より多い。例えば、地面、場所、位置、領土、地区などを表す。一方に、助詞としての“地”は2種類の文法意味を持つ。すなわち、唐代において、“地”は限定語の後に使われる場合と補語の前に使われる場合があった。また、“地”は動態助詞の意味を表す。“着”の意味に似ており。普通、“站”（立つ）、躺（横になる）、坐（座る）などの自動詞に付けて使う。

“地”は助詞としての意味は多くないが、助詞の“的”の意味形成に影響を与えた。

2.3 中国語の“的”の通時的な発展について

現代中国語で、“的”は助詞として使われている。しかし、古代中国語では、“的”は形容詞と名詞と副詞と助詞としての品詞があった。図2は“的”の意味的発展につ

⁵ “底”の語源について、まだ統一的な意見がない。例えば、呂叔湘（1943）は助詞の“底”が助詞の“者”から来たと考えた。王力（1958）は音韻学の側面から“底”を考察して、助詞の“底”は助詞の“之”から来たと考えた。石毓智と李訥（1998）は助詞の“底”が統語構造「数詞+量詞+名詞」の類推から生じたと考えた。彼らは助詞の“底”は指示代詞の“底”から来たと考えた。江藍生（1999）は助詞の“底”が方位詞から来て、“底”の構造は「名詞+底+名詞」だと考えた。本論文では、助詞の“底”の文法意味に関する統一的な意見がある時代から検討する。すなわち、3-9世紀に、指示代詞であった“底”から扱う。また、本論文では、“底”の内容語としての意味を具体的に論じない。

いての図である。形容詞、名詞、副詞3つの“的”の意味発展は《汉语大字典》と《汉语大词典》と『全訳漢辞海』の記述に基づいて考察した。

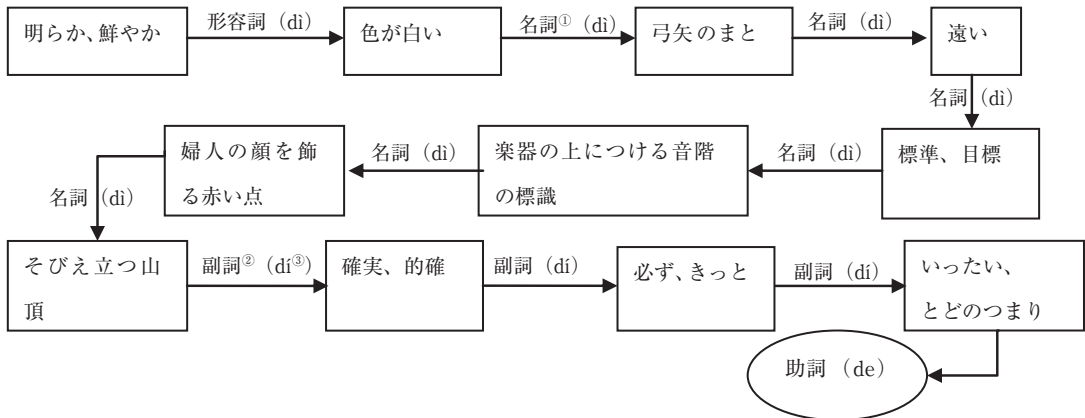


図2 “的”の意味変化

付注：

- ① “的”は名詞としては、ことわざ（弓矢のまとを表す）を除いて、現代中国語では使われない。
- ② “的”は副詞としては現代中国語で使われない。
- ③ 本論文では“di”（第四声）から“dí”（第二声）までの発音の変化過程は考察しない。

3.0 中国語“的”の文法化における認知メカニズム

2.3節にあるように、古代中国語の“的”には4種の品詞がある。時間的に、“的”が現れる品詞変化は形容詞>名詞>副詞>助詞の順である。《古代汉语虚词词典》(1999:95)によれば、虚詞としての“的”は実詞から発展してきたという。すなわち、現代中国語での助詞としての“的”は次第に発展してきたものである。次の節で、筆者は認知の側面から、“的”の歴史的な発展過程を詳しく論じる。

3.1 実詞としての“的”の意味派生過程

実詞としての“的”の意味派生過程は形容詞から名詞までの発展過程を指す。その派生過程はメタファーを通して形成された。本節では、形容詞と名詞の2つの部分に分けて、認知の側面から実詞としての“的”の意味派生過程を検討する。

3.1.1 形容詞としての“的”の意味発展

3.1.1.1 “的”の「明らかな、鮮やか」の意味から「色が白い」の意味までの発展

もともと、“的”は小篆文字で「𠄎」と書かれており、会意兼形声文字に属していた。すなわち、「𠄎」が意味を表して、「𠄎」は発音を表す。また、「𠄎」は「𠄎」の意味に影響を与えて「𠄎」の意味を形成している。形声文字としての「𠄎」の「𠄎」（「日」）の部分は“的”の基本的意味を表していて、「太陽」の意味である。「𠄎」（「勺_{シャク}」）の部分は発音を表す。また、象形文字としての「𠄎」（「勺」）の意味は勺でモノを取

ることを表す。会意兼形声としての“的”は「日+音符勺」(=太陽+音符勺でモノを取る)で、勺でモノを取る行為が可能になる条件を表している。その条件は光が明るいことであり、「日」の1つの属性から「明らか、鮮やか」の意味を得て形成されている。すなわち、“的”の基本的意味⁶は「日」が決めて、「勺」が影響を与えて、結果として「明らか、鮮やか」の意味になる。また、文字の書き方の変化とともに、「日」は隸書文字と楷書文字で「白⁷」と書くようになったので、「𠄎」(「日+勺」)の字は「的」(「白+勺」)になった。

会意兼形声文字の「𠄎」が「明らか、鮮やか」の意味から「色が白い」の意味まで派生したことは古代人の太陽観と関係がある。

日本語では太陽は赤いものと相場が決まっているが、中国には“白日”の語がある。これは太陽の色ではなく、天空に輝くその光を捉えた言い方であろう。太陽の明るさを明度の最も高い“白”で表したものと考えられる。“白日”は古典詩のなかによく用いられる。

(『日・中・英言語文化事典』：2000「白」の部分)

この記述からわかるように、古代人は太陽の光を描写する時、「白」を使っていた。すなわち、色の側面から太陽を描写すれば、「明らか」は「色が白い」ということになる。

このように、会意兼形声文字としての「𠄎」の2つの形容詞の意味は、意味を表すつくり「日」の部分から派生したものと考えられる。図3

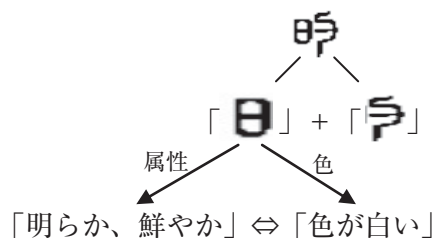


図3 “的”の意味派生

3.1.2 名詞としての“的”の意味発展

3.1.2.1 “的”の「色が白い」の意味から「弓矢のまと」の意味までの発展

中国の古代において、弓矢は武器として使われた。弓矢を射る人にとって、弓矢を

⁶ “的”の基本的意味はまだ統一的な意見がない。例えば、《大字典》では、“的”の基本的意味は「明らか、鮮やか」だと考えており、《古代汉语虚词词典》では、“的”の基本的意味は「白色」だと考えている。筆者は漢字の造字法と例文が現れた年代によって、“的”の基本的意味は「明らか、鮮やか」だと考える。また、本論文では、「明らか、鮮やか」を“的”の基本的意味として初めに検討する。

⁷ 本論文では、「日」から「白」までの変更原因を考察しない。

射る目的は目標に矢を当てることである。もちろん、その目標は人の場合もあり、モノの場合もある。その人またはモノは弓矢を射る人にとって、弓矢のまことに相当する。しかし、弓矢を射る行為は自然の世界で実行されるので、多くの人とモノの存在している中で行われる。どの人またはモノを目標として矢を射るのかは弓矢を射る人が決める。一般に、弓矢を射る人の心理的側面から見れば、射たい人またはモノは他のそうでない人やモノよりは卓立している。別の言い方をすれば、射たい人またはモノは弓矢を射る人の心理において、前景になっており、目標になりやすい。一方、他の人またはモノは弓矢を射る人の心理においては、背景になっている。ゲシュタルト心理学の観点からすれば、前景は背景より注意の焦点になり易いということになる。また、心理的側面から見れば、一般に、焦点は他の部分より「明らか、鮮やか」である。図4

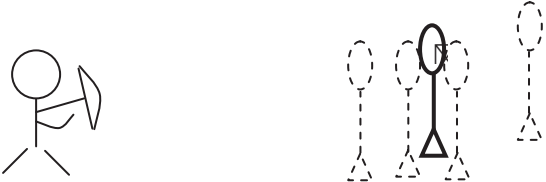


図4 “的”の意味発展（明らか、鮮やか）

すでに述べたことから明らかなように、「白い」という語は古代中国語で、太陽の光を表現したもので、この「白い」の中には「明らか、鮮やか」の属性が含まれる。このように、「白い」の属性と弓矢を射る人の心理の間に、一定の関係が生じる。

ラネカー（1999）は参照（reference）が人間の1つの基本的な認知方式だと考えている。一般に、私たちは1つの事物を基礎として、ほかの事物を認識する。その認識過程は参照活動である。ラネカーは参照活動を図5のようにとらえている。

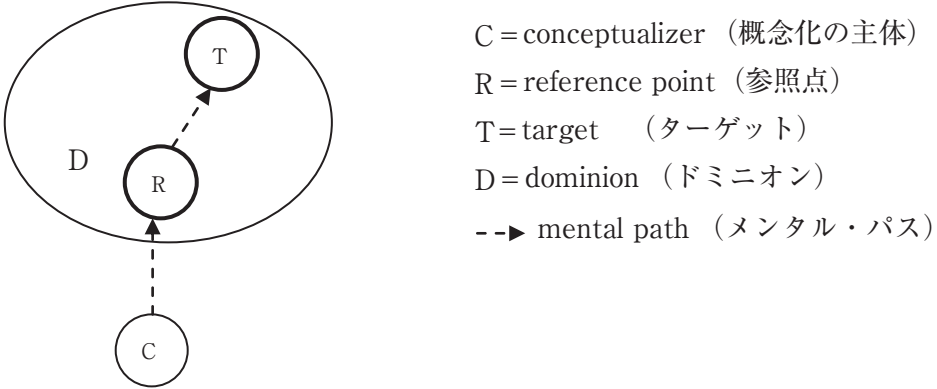


図5 参照点活動モデル Langaker2000:174

Cは概念化の主体（conceptualizer）を表している。すなわち、認識者である。認

識者とは、具体的にいえば、発話者と聞き手である。Rは参照点（reference）を表している。Tはターゲット（target）を表している。ターゲットとは、参照点構造において、認識者によって最終的に心的接触を受ける要素である。Dは参照点(R)によって限定されるターゲットの支配領域を表している。すなわち、参照点が到達することのできるすべてのターゲットの集合を表している。破線の矢印は概念化の主体が参照点を経由してターゲットに到達していくメンタル・パスを表している。ラネカーのその参照点理論について、筆者は参照点からターゲットまでの過程は言語の問題というよりは、人間の認知のプロセスであると考えたいと思う。メタファーは人間の1つの認知方式であって、参照点を通じて、比較する過程を経て事物の認知が行われる。

物体が「色が白い」という属性を持つということは人間の視覚的感覚によるものであり、一方、弓矢を射る人の心理は人間の注意力を伴う心理状態である。概念化の主体である人間は「色が白い」という属性を参照点として、人間の注意力を弓矢を射るままと引きつけることになるが、これは人間の視覚的感覚から注視点に至る心理過程であると考えられる。その過程はメタファーであると言える。

「色が白い」の意味から「弓矢のまと」の意味までの派生過程はメタファーである。

3.1.2.2 “的”の「弓矢のまと」の意味から「遠く」の意味までの発展

以上からわかるように、“的”はメタファーを通じて、「色が白い」の意味から「弓矢のまと」の意味を派生した。その派生した過程は色の視覚的感覚から弓矢を射る人の注視点への変化ととらえられる。弓矢を射る人にとって、「弓矢のまと」は他のモノより最も卓立している。しかし、弓矢を射る行為に対して存在するのは、弓矢を射る人とまとの2つの要素だけではない。弓矢を射るという行為は、弓矢が弓矢を射る人からまとまで飛ぶ過程を含む。すなわち、弓矢を射る行為には必ず3つの要素がなければならない。弓矢を射る人、まと、矢が弓矢を射る人からまとまで飛ぶ過程（距離）の3者である。認知心理学の観点によれば、視覚的注意の心理学的モデルはまず、情景の多い基本的な性格（色、方向、サイズ、距離）は別々にエンコードされて、異なる特徴マップを生じる。それらのマップは統合して、1つのマスターマップになる（図6参照）。注意の焦点はマスターマップからあるインフォメーションを使って、また、ある特徴はイメージに占める部分と結びつけて、その具体的な特徴が分析される。その後で、トリーズマン⁸（Treisman）の観点によると、それぞれの異なる性格は具体的な特徴マップでもう一度エンコードされて（記号化され）、大脳皮質の適正な部分に置かれる。（Solso.R.L. et al.:2008）図6参照。

⁸ トリーズマン（Treisman）によれば、視覚情報処理の初期段階でいくつかの単純な視覚的特徴が処理され、複数の特徴マップ（feature maps）として表象される。その後、顕著性マップ（saliency map）として統合を受け、興味の対象となる領域へ注意を向けるためにアクセスされる。（ウィキペディア：2002.10.14）

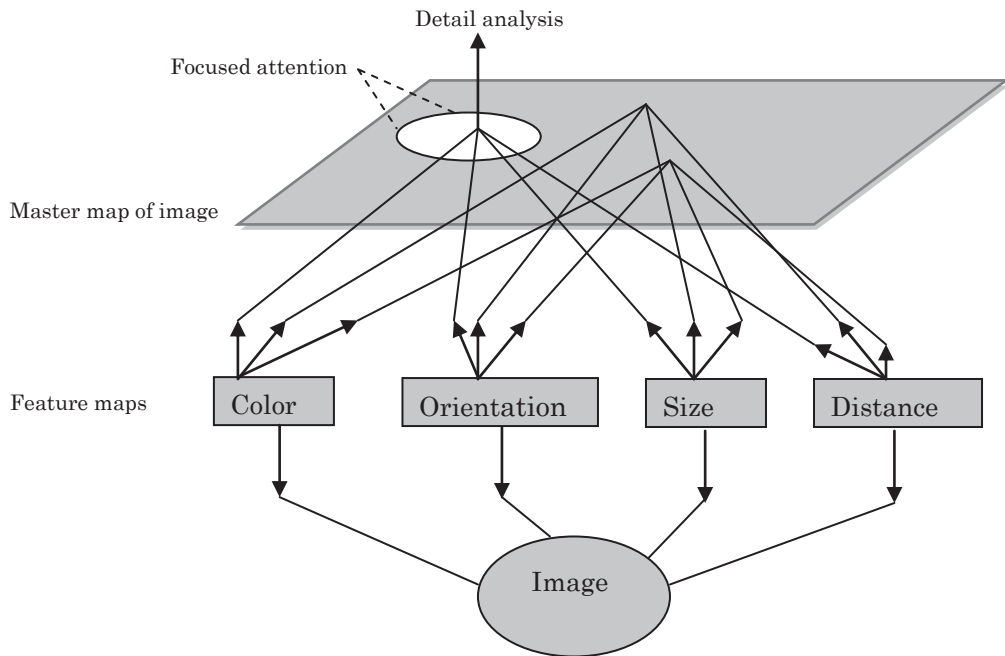


図6 視覚的注意の心理学的モデル (Solso.R.L. et al.:2008)

すなわち、注意過程が発生する時、距離という要素も1つの要素として記号化される。すなわち、弓矢を射る人においてはまことに注意する時、距離という要素がデフォルトとして含まれている。中国の古代において、弓矢は武器として人間に使われていた。一般に、弓矢を射る人と射たい人またはモノの間に、長い距離（遠さ）がある。弓矢を射る人は特定のな人またはモノを注視する時、実は自分とその人やモノまでの距離にも注意している。すなわち、注意という側面から考えると、「弓矢のまと」を注視する過程で、弓矢を射る人の意識の中に「遠く」という観念が含まれている。「弓矢のまと」に対する意識を分析すれば、少なくとも2つの要素が考えられる。すなわち、距離（遠さ）とモノ（弓矢のまと）である。

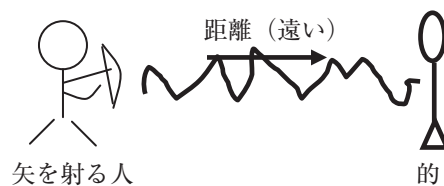


図7 弓矢を射る人の意識

「遠さ」の概念は「弓矢のまと」に対する意識の中から派生したと考えられる。

3.1.2.3 “的”の「弓矢のまと」の意味から「標準、目標」の意味までの発展

“的”は次に「基準、目標」の意味を持つことになるが、これは「遠さ」の意味から派生したのではなく、「弓矢のまと」の意味から派生したものと考えられる。

すでに述べたことであるが、「弓矢のまと」の意味は、弓矢を射る人の意識において「色が白い」という視覚的感覚から派生したものであった。すなわち、弓矢を射る人は「色が白い」という卓立の属性を参照点として、メタファーを通じて、「弓矢のまと」の意味を発生させた。弓矢を射る人にとって、弓矢のまとは弓矢を射る過程で最も卓立した要素で、注意を集中させる。注意というのは1つの心理過程であり、これに対して、認知心理学では次のような観点を持っている。

... attention: “the concentration of mental effort on sensory or mental events.” Research on attention covers five major aspects of the topic: processing capacity and selective attention, level of arousal, control of attention, consciousness, and cognitive neuroscience.

(Solso,R.L. et al.:2008)

注意とは、感覚・心理的事象に向ける精神的集中である。注意の研究には5つの側面がある。すなわち、処理能力と選択的注意、興奮レベル、注意制御、意識、認知神経科学の5者である。

(筆者 訳)

認知心理学では、注意は一連の心理過程を通して完成するものと考えている。その中に選択的注意というものがあるが、これはいろいろな暗示がある中で、自分の必要性から、特定の暗示を選び出すための注意である。例えば、弓矢を射る人は弓矢を射る行為を実行する時、弓矢のまとに注意する。その注意は一連の注意心理過程を経ての結果である。実は、注意行為を発生する前に、弓矢を射る人の大脳に、一連のいろいろな暗示がある。それらの暗示の中から一定の暗示を選択する。その選択は、弓矢を射る人が射当てたい目標であるか、あるいは弓矢を射る行為を行うのにふさわしい基準にあるかどうかによって、なされる。例えば、戦場で、ある人間が私たちにある程度の危険を与える可能性がある場合、私たちはその人間を敵と呼ぶ。すなわち、的にすべきであるとの基準に達したら、それは弓矢を射る目標になって、弓矢が射られる。しかし、もしその人間が敵であるとの基準に達しなければ、弓矢を射る目標になることはない。すなわち、弓矢を射る人はそれがあつる程度の基準を満たすか、あるいは射当てたい目標であるかどうかによって、弓矢のまとを選択する。このように、基準と目標が行為実行の原則となる。弓矢を射る人はこの原則によって、弓矢のまとを選択する。このようなことから、「弓矢のまと」の意味から「基準」の意味までの派生があり、この過程はメタファーであると考えられる。それで、「弓矢のまと」の意

味から「基準」の意味までは弓矢を射る人の意識内に発生する心理行為の過程であり、メタファーであると言える。

ただ、「弓矢のまと」の意味から「目標」の意味までの派生過程はメトニミーであると考えられる。全体と部分のメトニミーの中に、7つの下位分類があり、その1つとして「構成メトニミー」がある（李福印：2008）。これは事物名でその属性を表すものである。したがって、“的”で「目標」を表すことはこの構成メトニミーに相当する。実は、このメトニミーに関わる表現は現在でも使われている。例えば、子供が射的をして遊ぶとき、大人は子供に「目標を見て」と言うこともあるが、その目標は弓矢のまとを指している。

3.1.2.4 “的”の「弓矢のまと」の意味から「楽器の上に置く音階の標識」の意味までの発展

「楽器の上に置く音階の標識」の意味も「弓矢のまと」の意味から派生したものと考えられる。その派生過程はメタファーである。

以上に述べた「弓矢のまと」が派生した原因は、人間の視覚的感覚が弓矢を射る人の意識に影響を与えたことである。すなわち、弓矢を射る人にとって、弓矢を射る過程で、弓矢のまとは他のモノより卓立しているから、弓矢のまとは前景になりやすく、他の部分は背景になりやすい。弓矢のまとは卓立した属性を持つ。同じ道理で、楽器の上に置かれる音階の標識と弓矢を射るまととは同じ認知方式を持つものと考えられる。楽器を使う人にとって、「楽器の上に置かれる音階の標識」は弓矢を射る人のまとに当たる。楽器の上に置かれる音階の標識は曲を弾くための1つの要素である。楽器を使う人にとっては、楽器の上に置かれた音階の標識は楽器の他の部分より卓立している。ラネカー（1999）の参照点理論で考えれば、概念化の主体（弓矢の射る人）は（弓矢を射る時のような）卓立属性を参照点として、「楽器の上に置く音階の標識」を認識する。そのメタファー発生メカニズムは1つのモノに対する注意からもう1つのモノに対する注意を持つに至るまでの心理過程である。

3.1.1.6 “的”の「弓矢のまと」の意味から「古代婦人が顔に赤い色を使う装飾」と「そびえ立つ山頂」の2つの意味までの発展

「古代婦人が顔に赤い色を使う装飾」と「そびえ立つ山頂」の意味も「弓矢のまと」から派生したと考えられる。その派生過程はメタファーである。

古代婦人が顔に赤い色を付けるということは、もともと漢の時代、天子または諸侯の妻と妾が生理の期間に、奉仕することをまぬがれるために、自分の額に赤い点を施して印としたことに起源がある。女官がその印を見た時には、その妻と妾の名前を夜の当番の名簿に書かない。のちに、一般に婦人が赤い点を普通の顔の飾りとするようになるが、その当初は婦人は赤い点を使って身体状況の属性を目立つようにしていた

わけである。赤い点が卓立していたわけである。また、「弓矢のまと」の意味は弓矢を射る過程において、弓矢を射る人にとって、「まと」が卓立していた。このように、古代婦人の赤い色は「まと」を参照点として理解することができる。その派生過程は弓矢を射る人の注視点から女官の注視点までの変化の過程で、メタファーに属する。

同じ道理で、明朝に生じた“的”の「そびえ立つ山頂」の意味もメタファーを通じて発生した。「そびえる」と言う意味は他を見おろすように高く立つことである。例えば、田舎の風景（具体的な画面またはイメージ）の中で、そびえ立つ山頂は他の建物より卓立していて、前景になりやすい。また、そびえ立つ山頂は山がとても高いので、遠くからでも、見ることができる。しかし、見ることはできても、しばしば、頂上は一点のようにしか見えないという場合もある。その時、もし、観察者の注意が山にあるなら、一点としての山は弓矢のまとに似ている。すなわち、空は背景になり、頂上が前景になる。それで、「弓矢のまと」を参照点とすることによって、「そびえ立つ頂上」の意味が理解しやすくなる。その派生過程は弓矢を射る人の注意的意識から山を見る観察者の注意的意識まで変化した過程であって、これはメタファーである。

以上から見て、「的」の多くの意味はメタファーによって、派生したものと考えられる。ただ、言語発展とともに、名詞は1音節のものがだんだん少なくなってきたので、現代中国語では“的”もことわざを除いて、1音節のみの名詞として使われることがなくなっている。

以上は内容語としての「的」の意味派生過程である。次に機能語としての「的」の意味派生について検討する。

3.2 虚詞としての“的”の文法化

中国語の“的”はもともと形容詞として使われていた。時間の流れとともに、名詞になった。近代において、“的”には副詞の使い方が生じた。すなわち、“的”は文法化を発生して、虚詞になった。本節で、“的”は名詞から副詞までの虚化過程と副詞から助詞までの虚化過程2つの部分から述べる。

3.2.1 副詞としての“的”の意味発展及び文法化の発生

3.2.1.1 名詞としての「的」の意味から「確実、的確」の意味までの発展

漢代の後、“的”は副詞として使われるようになった。“的”の副詞としての意味は名詞の意味から発展した。上述のように、内容語としての“的”は、形容詞でも名詞でも意味拡張の過程では卓立が参照点となって、メタファーによって派生した。モノの卓立している属性は一定の確定性があるので、長い時間の中で、名詞としての“的”はその確定性が人間に認識されることになった。そのようにして副詞にまで変化した。その確定性は時間の流れとともに、肯定語気を伴うようになり、「確実、確かに」という意味を生じた。この意味拡張は人間の長い時間をかけた認知の結果であり、人間

の心理において肯定的認識を伴うようになったといえる。

実は、その派生過程もメタファーである。このメタファーの発生メカニズムは事物の確定性を参照点とし、具体的な事物から抽象的な心理現象を認識するかたちのものであった。

3.2.1.2 “的”の「確実、確かに」の意味から「必ず、きっと」の意味までの発展

前節で述べたように「確実、確かに」の意味を獲得したのは人間が長い時間をかけて事物の認識を拡張していったからである。しかし、一般に、人間は1つの事物または現象を認識する時、一面のみではなくて、多方面にわたって認識する。例えば、もし、認識の側面からその肯定心理を見れば、一種のモダリティを表していると感じられる。すなわち、“的”の確定性はモノの確定性の「認識」も表すことができる。それで、「必ず、きっと」の意味を生じた。その派生過程はメタファーである。確定性を参照点とする確定の推測から断定までの認識の拡張過程がここにある。

「確実、確かに」の意味から「必ず、きっと」の意味までの派生過程はメタファーである。確定性を参照点とする、確定の推測から断定までの派生過程である。

3.2.1.3 “的”の「必ず、きっと」の意味から「いったい」の意味までの発展

一般に、「必ず、きっと」の意味は人間の心理で100%の確信の程度を表す。しかし、普通、人間の認識と現実の間には誤差があるので、100%の確信は現実では実現しない場合もあると考えられる。もし、「必ず、きっと」が強い（卓立した）気持ちを伴って、事態の認識を述べるのであれば、疑問文では強い（卓立した）疑問語気を表すことになる。すなわち、「いったい」という意味である。それで、「いったい」の意味派生の原因はモダリティでの変化であるといえる（肯定語気から疑問語気への語気変化である）。

以上、副詞としての「的」の意味発展を検討した。副詞としての“的”が3つの意味を取るようになった原因は人間がモノに異なる認識を持ったことにある。副詞としての“的”は名詞の意味に沿って生じたが、名詞範疇を超えて、副詞になった。その時、“的”の実質の意味が虚化されて、文法化現象が生じた。“的”の意味は虚化されたが、文法上では、副詞の“的”は名詞の“的”より大きな文法機能を持つようになった。例えば、副詞としての“的”は修飾語として、他の品詞を修飾することができる。“的”がだんだん名詞の意味を失って、機能語になったからである。西晋時代から“的”は名詞の意味がだんだん無くなって、機能語になって、副詞として使われるようになった。

3.2.2 副詞としての“的”から助詞としての“的”までの文法化について

宋代において、“的”はすべての内容語の意味を捨てて、助詞になった。また、そ

の時から、“的”の意味発展は主に文法上において展開した。本研究では現代中国語の“的”が助詞になる過程で、音韻代用の要素があるほかに、上に述べたような固有の要素があると考えている。中国語の“的”の発展は独自の文法化の過程を持っている。

すでに見たように、西晋から宋代まで“的”は副詞として使われた。また、宋代から“的”は“底”の代用として、初めて助詞として使われることになった。本研究では“的”が“底”の代替として助詞になったことには、“底”と“的”の音韻が近いだけではなく、“的”自体の発展と結びついていると考えている。

まず、意味から見れば、“底”の助詞としての意味の発展はすでに完成していた。すなわち、宋代には、中国語の“底”は内容語の意味を持つだけではなく、機能語の意味も持つことになった。また、中国語の“底”は名詞として、高い使用頻度がある。“底”はになう意味が多いので、使う時、使い方が混乱しやすい。そこで、言語使用の複雑性を減少するために、“底”の一部分の意味を取り去った。また、宋代には、副詞としての「的」は内容語としての意味がだんだん失われて、機能語になった。《現代汉语语法研究教程》(2003:193)によれば、機能語の意味は2つの側面がある。すなわち、文法意味を表す側面と語用意味を表す側面である。また、この2つの側面は相互に依存している。宋代には、副詞としての“的”はすでに文法意味を表すようになっていた。このように、意味の側面から見れば、すでに助詞となっていた“的”が“底”のかわりに使用されるようになったということは歴史的発展の必然だといえる。

次に、音声から見れば、宋代において、「底」の読み方と「的」の読み方が似ていたということがある。潘悟云の制作した「廣韻查詢系統」(ソフト)によれば、宋代の時、「底」は[tiei]と発音され、「的」は[tiek]と発音されていた。

最後に、統語の側面から見れば、副詞としての「的」は名詞としての「的」より自

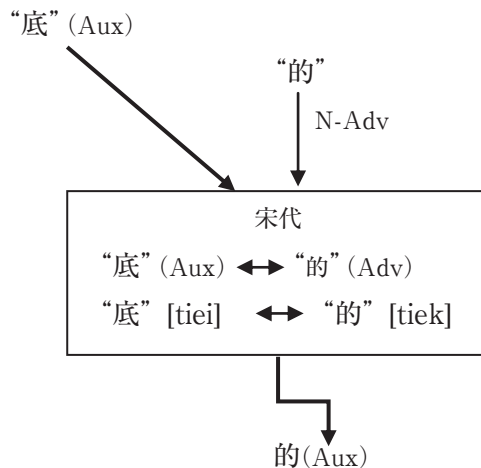


図8 “的”が“底”の代わりに文法化した過程 A

由であった。また、時間の経過とともに、「的」は名詞としての意味を徐々に失い、徐々に文法意味を強くしていった。「的」のそちらの特徴は「底」に取って代わるだけの勢力があった（図8参照）。

しかし、「的」は「底」に代わる過程で、「底」の持っていた「地」の使い方も受け継いだ。唐代には、「底」と「地」は別々に使われていたが、五代十国の時代には、「底」と「地」は同じように使われていた。宋代において、「底」と「地」はもう一度別々に使われたのであるが、同じように使われた場合もあるので、現代中国語で、「的」の使い方の中に「地」の使い方が残っている（図9参照）。

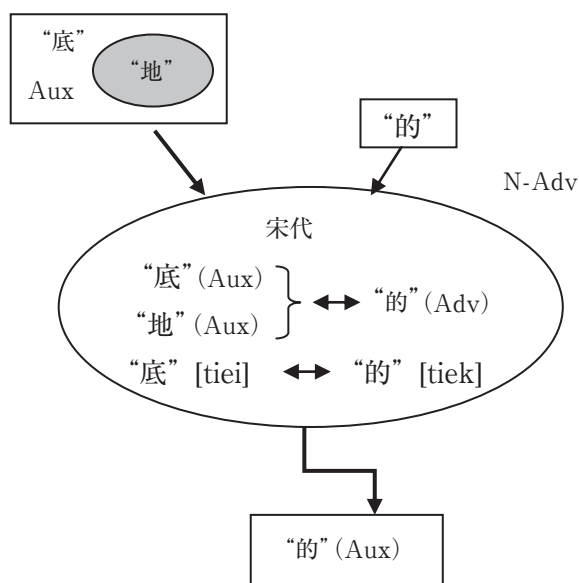


図9 “的”が“底”の代わりに文法化した過程 B

以上、「的」が形容詞から助詞へと意味発展した過程を論じた。以上の分析から見て、「的」の意味発展には人間の認知要素が大きくかかわっている。「的」の形容詞から副詞までの変化をもたらしたものは人間の認知の展開である。同じものでも長い時間の認識の変化によって、そのものに対するさまざまな理解が出てくる可能性がある。さまざまな理解の発生とともに、内容語の範疇がだんだんゆるみ、機能語へと変質することもある。すると、語の使い方が変わり、意味をもう一度分類しなければならいことになる。そのようにして品詞が変わっていくものと考えられる。

4.0 まとめ

認知言語学の研究者は言語の意味構造と客観世界は対応しておらず、言語の意味構造は人間が客観世界の認識を通じて、その認識のプロセスで形成する概念と対応していると考えている。文法化は抽象的な意味変化の過程であり、メタファー、範疇化などの

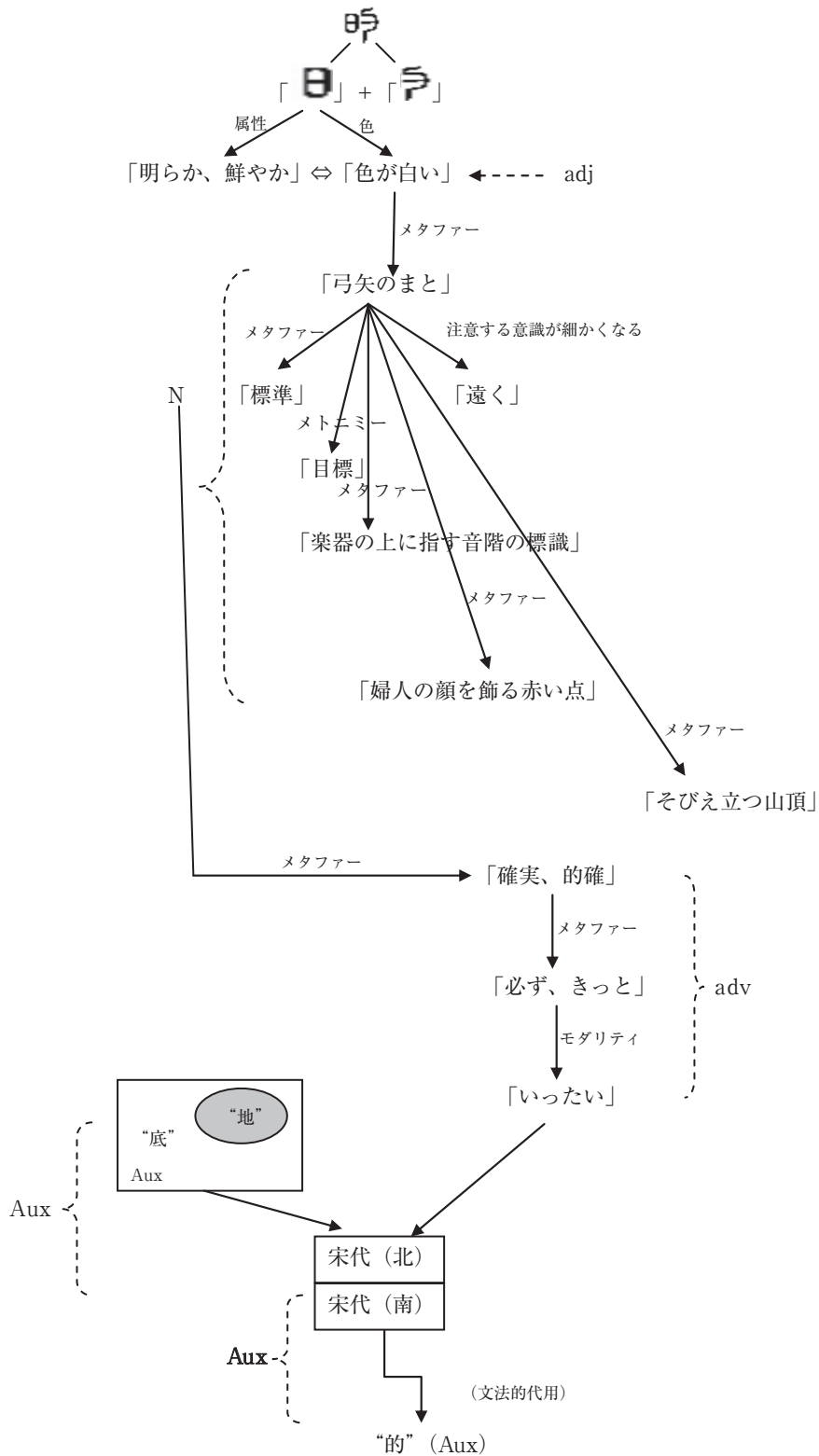
認知過程を通して実現する。中国語の“的”はそれらのプロセスを通じて、文法化し、助詞になった。しかし、中国語の“的”の文法化は直線的な発展をしたわけではなく、複数の要素を受け入れて発展した。複数の要素を受け入れる際に、“底”の“N+底+N”の使い方を受け入れたので、現代中国語で、“的”が名詞と名詞をつなぐことができるようになったのである。

参考文献：

- 赤祖父哲二、川合康三、金文京、斎藤武生、ジョン・ボチャラリ、林史典、半沢幹一
(2000)『日・中・英言語文化事典』マクミランラングージハウス出版
- 太田辰夫(1958)『中国語歴史文法』江南書院
- 佐藤進、濱口富士雄(2000)『全訳漢辞海』三省堂
- Hopper, P. J. and Traugott, E. C. (1993) Grammaticalization. Cambridge University Press (日野資成訳(2003)『文法化』九州大学出版会)
- Langacker, R. (1993) “Reference – point Constructions” Cognitive Linguistics (4-1) Mouton de Gruyter
- Langacker, R. (1999) Grammar and Conceptualization. Mouton de Gruyter
- Solso.R.L.and MacLin.O.H.and MacLin.M.K. (2008) Cognitive Psychology (8edition) Prentice Hall
- 曹广顺(1995)《近代汉语助词》语文出版社
- 冯春田(2000)《近代汉语语法研究》山东教育出版社
- 汉语大字典编辑委员会(1986-1990)《漢語大字典》四川辞书出版社、湖北辞书出版社
- 黄洁(2010)“基于参照点理论的汉语隐喻名名复合词研究”《语言教学与研究》5
- 蒋绍愚(2005)《近代汉语研究概要》北京大学出版社
- 蒋冀骧 吴福祥(1997)《近代汉语纲要》湖南教育出版社
- 江蓝生(1999)“处所词的领格用法与结构助词“底”的由来”《中国语文》第2期
- 吕叔湘(1943)“论底、地之辨及底字的由来”《汉语语法论文集》商务印书馆
- 罗竹风(1986-1993)《汉语大词典》上海辞书出版社
- 陆俭明(2003)《现代汉语语法研究教程》北京大学出版社
- 李福印(2008)《认知语言学概论》北京大学出版社
- 刘坚、江蓝生、白维国、曹广顺(1992)《近代汉语虚词研究》语文出版社
- 齐沪扬(2002)《语气词与语气系统》安徽教育出版社
- 潘悟云 制作 廣韻查詢系統 上海师范大学语言研究所
- 石毓智(2000)《语法的认知语义基础》江西教育出版社
- 石毓智、李讷(1998)“汉语发展史上结构助词的兴替——论“的”的语法化历程”《中国社会科学》第6期

- 王力 (1958) 《汉语史稿》 中华书局
- 向熹 (1988) 《古代汉语知识辞典》 四川人民出版社
- 向熹 (1993) 《简明汉语史》 (下) 高等教育出版社
- 俞光中、植田均 (1999) 《近代汉语语法研究》 学林出版社
- 祝敏彻 (1996) 《近代汉语句法史稿》 中州古籍出版社
- 中国社会科学院语言研究所古代汉语研究室 (1999) 《古代汉语虚词词典》 商务印书馆
- <http://ja.wikipedia.org/wiki/> 特徴統合理論 (2012.10.14)

中国語の“的”の意味の発展



コーパスを利用した日中同形語対照研究

——中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得支援のために——

山内 美穂

要 旨

日本語の漢語に多く見られる中国語と同形の語は、中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得に正負両方の転移をもたらすことが先行研究で示されている。しかし、先行研究の多くは、同形語の日本語・中国語間の辞書的意味の異同に注目したものである。本稿では、日中各コーパスから抽出した用例を分類し、さらに各母語話者の使用を基盤にした用法に着目して、初中級で学習する同形語10語を比較した。その上で、中国語を母語とする日本語学習者の漢語使用に影響をもたらす要因をさぐった。その結果、学習者の漢語使用には、母語での使用頻度の高い用法が大きく影響していることが分かった。そしてその影響により、語によって文法上の誤用につながるものや、または意味の取り違いをもたらすものがあることが示唆された。

調査にあたっては、各母語話者による実際の用例に基づき分析を進めたいという考えから、日本語と中国語の各コーパスを使用した。

キーワード：日中同形語、コーパス、用法、使用頻度、母語転移

I. はじめに

日本語の漢語の多くは中国語からの借用語であるが、日本で作られた漢語が逆に中国へ輸出されたケースもある。したがって、漢語の中には中国語と同形の語、いわゆる日中同形語（以下、同形語）が数多く存在する。このため、中国語を母語とする日本語学習者（以下、学習者）の漢語習得においては、正負両方の転移が見られることが指摘されてきた。例えば次の(1)(2)の文は学習者の作文から抽出した例だが、下線部の漢語の使い方には母語である中国語の影響がみられ、現代日本語として不自然である。

- (1) 私は日本の茶道を了解したいです。
- (2) 先生はいつも学生の生活に関心します。

(1) (2) の文が日本語母語話者には不自然に感じられるのは、「了解」や「関心」などの語が日本語・中国語ともに同形でありながら、そこには何らかのズレが存在するからである。学習者はそのズレに気付かずに同形語を使用しているのだと考えられる。

これまで、そのズレの正体を明らかにしようとする研究では、主に辞書的意味の異同に関心が向けられてきた。もちろん、日本語と中国語間の辞書的意味の重なりや違いは、学習者に正負両方の転移を起こさせる一つの要因であろう。しかし、実際の語の使用場面で話者は、意味のほかにも、文法的性質、文体などを考慮しながら、その場その場で適当な用法を選んでいる。母語の転移をさぐる場合は、語の全般的用法に着目してその影響を観察することが必要と考える。

本稿では、学習者が初中級で学習するいくつかの同形語が、日本語・中国語の各母語話者にどのように捉えられ、またどのような条件の下で使われているのかを意味的、文法的両側面から把握する。そして、その中国語としての同形語の用法が、日本語学習者の漢語使用にどう影響しているのかをさぐる。意味的・文法的側面の把握にあたっては、各母語話者による実際の用例に基づき分析を進めたいという考えから、日本語と中国語の各コーパスを使用した。

Ⅱ. 本稿における同形語

大河内 (1992) は、同形語を「双方同じ漢字 (簡体字は問わない) で表記され、二字以上の組み合わせで一定の意味を持つ字音語」と述べている。本稿で対象とした同形語もこの定義と同様である。しかし前述したような学習者の不自然な表現は、実際には字音語に限られているわけではないと予想される。和語に漢字をあてた漢語も、それと同じ組み合わせの単語が中国語にあれば、やはり、不自然な使用をまねく可能性のある同形語となる。したがって、本論を進める上での同形語とは、大河内 (1992) よりさらに広義の「日中双方同じ漢字で表記される二字以上の熟語」と定義する。

Ⅲ. 先行研究と問題の所在

1960年代から記述的研究や分類を中心に進められてきた同形語研究により、日本の漢語と中国語との間には、同形であっても意味的に類似する語や異なるものがあるということが、明らかにされてきた。文化庁 (1978) は中国人学習者への日本語教育の参考資料として、2000語の漢語を、「(Same:S) 日中両国語における意味が同じか、またはきわめて近いもの」「(Different:D) 日中両国語における意味が著しく異なるもの」「(Overlap:O) 日中両国語における意味が一部重なっているが、両者の間にずれがあるもの」「(Nothing:N) 日本語の漢語と同じ漢字語が中国語に存在しないもの」の4つに分類しリストを作成した。このリストについては、荒川 (1979) 他が「(1) 中国語の規定のあいまいさ、(2) 目的と方法の矛盾、(3) 分析の不徹底」とい

う3点で批判したが、この漢語分類自体は日本語教育における日中同形の漢語の習得研究にもしばしば用いられてきた。

陳(2003)では、文化庁(1978)の分類の(Overlap:O)をさらに3つに下位分類した上で、言語習熟度により3つのグループに分けられた台湾人日本語学習者を対象に、各カテゴリーに属する漢語40語の難度を調査した。その結果、日本語習熟度に関係なく(Same:S)は易しく、(Different:D)は困難であること、(Nothing:N)の中には構成する漢字から意味を推測できるものと、それができないため難しいものがあることを明らかにした。加藤(2005)も文化庁(1978)の(Nothing:N)を2つに、また(Overlap:O)を2つに下位分類した上で、初中級語彙28語の漢語を含む日本語の短文を日本語として正しいかどうか被験者¹に正誤判断させるという手法で、どのカテゴリーに正の転移が、または負の転移が起こりやすいか、化石化しやすい語はあるかを調査した。その結果、(Different:D)の語は中国語の負の転移を受けやすいが、言語習熟度が進むにつれ正答率は日本語母語話者に近づき、正しく習得されるということが示唆された。(Same:S)では正の転移が認められ、(Nothing:N)では負の転移は起こっておらず、どちらも同様に言語習熟度が進むにつれ正答率は日本語母語話者に近づいた。しかし、(Overlap:O)の語は上級になっても正答率が上がらない語もあり、習得の難しさが示された。加藤(2005)は(Overlap:O)の語が他のカテゴリーの語と大きく異なるのは、少なくとも日本語か中国語のどちらかで多義語であるからだ指摘している。さらに、多義語である(Overlap:O)が習得できにくい理由について、母語と目標言語を一対一で結び付ける「対連合学習」によって次のように説明している。「学習者の語彙習得は、母語の概念表象(意味)に目標言語で新たな名前をつけていく『対連合学習』で進められるが、多義語である(Overlap:O)の語にはそれが適用できない。したがって、出てきた文脈の意味だけでなく、他の用法例も与えて多義語であることを気付かせることが有効であろう」。

さらに小森・玉岡・近藤(2008)では、中国語と日本語で意味の一部が異なる類義語(O語)や、意味が完全に異なる異義語(D語)の認知処理過程が、学習者の日本語習熟度の向上に伴いどのように変化するか注目した。その結果、中国人学習者は日本語習熟度が高くなっても、O語やD語の同形語の認知処理過程で日本語義の活性化が効率的ではないことや、日中の共有義のあるO語の方が認知処理が困難であることが示唆された。これらの知見は同形語である漢語教育において参考となるものであるが、課題も残されている。

まず、先行研究の多くが同形語の辞書上の意味の異同に注目したものであることである。石・王(1983)、候(1997)など、品詞の違いが学習者の漢語使用にもたらす影響の研究もなされてきたが数少ない。同形語の不自然な使用の原因を辞書的意味の

¹ 同調査は、被験者を予めテストによって上級・中級・初級に分け行ったほか、テスト結果への母語の影響の有無を調べるために、中国語母語の学習者だけでなく、英語と日本語の母語話者も被験者としている。

異同からだけ、または品詞の面からだけで考えるのは不十分で、語によっては、意味的要因や、或いは文法的要因、または複合的な要因が同時に影響するものなどに分かれる可能性も考えられる。

また、従来の研究で漢語は意味の異同によりいくつかのグループに分けられ、日本語・中国語間で「意味が異なる語」や「意味の一部が重なる語」は習得が困難だとされてきたが、日本語と中国語で意味のどの部分が異なっていて、どの部分が重なっているのかは明らかにされていない。例えば日中間で意味の一部が重なっており「中国語にのみ独自の意味」をもつ語があったとする。その語の「中国語にのみ独自の意味」が中国では「よく使われる一般的な意味」であった場合、母語である中国語の影響は負の転移となって現れやすいことが予想される。しかし、語によっては「日本語と中国語で共通する意味」が日中でともに「よく使われる一般的な意味」であった場合、その語がたとえ「意味の一部が重なる語」であっても負の転移は顕在化しないということもあるだろう。「意味の一部が重なる語」がおしなべて学習者の習得や使用に影響するとは、単純には言えない。

これらをふまえて本稿では、同形語の日中間のズレについて従来のように辞書だけに依拠するのではなく、日本語と中国語の各コーパスから母語話者による実際の用例を抽出し、それを語義²、品詞などの側面から分類・分析することで、各語の日本語・中国語それぞれの用法の違いを把握しようと試みた。また中国語としての用法が中国語を母語とする学習者の漢語使用に及ぼす影響を、学習者の作文からさぐった。具体的方法は以下に述べる。

IV. 研究方法

1 研究対象となる同形語の選定

同形語は数多く存在するため、本研究では初級から中級までに習得済みの語で、学習者にとって習得が困難な語に対象をしぼる。したがって、以下の方法で本研究の対象とする同形語を選定した。

- ① 独立行政法人・国際交流基金が編集した『日本語能力試験 出題基準』の4級～1級の語彙の中から、『中日大辞典』『大辞林』『広辞苑』『現代漢語詞典』に基づき、日本語と中国語との間で「意味が異なる同形語」および「意味が一部重なる同形語」計147語を抽出した。「意味が異なる同形語」および「意味が一部重なる同形語」を抽出した理由は、先行研究により習得が困難であるとされているからである。
- ② 中国の大学生（日本語科3年）の日本語作文400本から、日本語として不自然な使用がされている日中同形の漢語の用例を抽出し、その出現回数順にリストを作成した。

² 本稿では「語が持つ意味」を表す語として「語義」という語を使用する

③ 上記の①で抽出された 147 語のうち、②のリストで不自然な使用の出現回数が上位の語を選び出し、以下の 10 語を本研究の対象とした。

「了解」「熱心」「関心」「緊張」「支持」「表現」「感情」「活動」「問題」「素質」

2 調査

1) 調査 1

日本語・中国語の各母語話者が上記 10 語の同形語をどのようにとらえ、どのような条件の下で使用しているかをみるため、日本語と中国語の各コーパスから抽出した例文に含まれる同形語の分類を行った。使用したコーパスは以下の通り。

日本語コーパス：国立国語研究所『現代日本語書き言葉均衡コーパス 2009 年版』

中国語コーパス：①関西大学『現代中国語コーパス（現代汉语語料庫）』

(<http://china.fl.kansai-u.ac.jp/>)

②北京日本学研究中心『日中対訳コーパス（中日対訳語料庫）』

上記の各コーパスから 10 語の同形語について日本語・中国語それぞれの用例文をランダムに 100 文ずつ抽出する。さらに、それぞれの用例文に含まれる同形語を「語義」「品詞」「共起する語」の観点から分類した。さらにこの分類をもとに、各同形語の品詞や語義などを日本語・中国語別に並べて示した「日中対照表」³を作成した。分類は、日本語・中国語ともに筆者が行い、中国語の分類については、中国語母語話者のインフォーマント 4 人（遼寧省出身・杏林大学博士前期課程大学院生・20 代、山東省出身・杏林大学博士前期課程大学院生・20 代、北京出身・日中通訳者・40 代、上海出身・専門学校日中通訳養成科担当講師・40 代）に、用例の分類が妥当かどうかをチェックしたうえで意見を述べてもらった。なお、中国語に関しては「日中対照表」で比較が容易なように、日本語で品詞を表記し、また中国語文を読んで判断できる語義を日本語で表した。

2) 調査 2

本研究の対象とした 10 語の同形語を、学習者がどのように使用しているかを見るために、各同形語を使った日本語の短文を 1 語につき 3 つずつ作ってもらった。

調査 2 は 2 回にわけて実施した。1 回目は「了解」「熱心」「関心」「緊張」について調査し、2 回目は「支持」「表現」「感情」「活動」「問題」「素質」について調査した。2 回にわけた理由は、調査協力者への負担と 1 回の調査にかかる時間を考慮したからである。

1 回目は 2010 年 3 月、中国福建省アモイ市の集美大学日本語科に協力を依頼し実施した他、北京市の大学院在学中の日本語学習者、日本の大学および専門学校に在学

³ この表は日本語と中国語の各母語話者の用法を実例に基づき把握するために、コーパスから抽出した用例に含まれた同形語を「語義」「品詞」「共起する語」について分類したものであり、各同形語の語義や品詞を定義するものではない。

中の中国人日本語学習者に協力者になってもらった。1回目の調査協力者は以下の構成で合計95人。

- ・福建省アモイ市の集美大学日本語科：2年生34人、3年生18人、4年生9人
- ・北京市の日本語専攻大学院生9人
- ・日本の大学に留学中の中国人大学生（平均日本語学習期間4年10ヵ月）6人
- ・日本に留学中の専門学校生（平均日本語学習期間2年10ヵ月）19人

2回目は2011年3月、東京都福生市の日本語学校・新日本学院に協力を依頼し実施した。2回目の調査協力者は以下の構成で合計55人(中国語を母語とする学習者)。

- ・日本語学習期間1年以上2年未満：33人
- ・日本語学習期間2年以上3年未満：12人
- ・日本語学習期間3年以上4年未満：6人
- ・日本語学習期間4年以上6年未満：4人

調査2で得られた全作文の中で、各同形語の使い方が文法的、意味的に「日本語として不自然なもの」を「誤用」とし、その誤用のタイプを分類し、誤用全体に占める出現率を算出し「誤用タイプ分類表⁴」を作成した。

V. 結果

前章の調査1と調査2で得られたコーパス用例の分類に基づく「日中対照表」⁵と「誤用タイプ分類表」の関連を見ながら、各語について分析を行った。以下では、調査対象となった10語についてそれぞれ詳しく述べる。中国語のコーパスから抽出した用例には、それぞれ筆者による翻訳文を（ ）中に記した。

1. 了解

表-1は「了解」の「日中対照表」である。コーパスから抽出された用例からは、日中共通の語義は観察さ

表-1 「了解」の「日中対照表」

中国語				日本語			
品詞と出現比率	語義と出現比率			品詞と出現比率	語義と出現比率		
名詞	37%	知っていること、知識	13%	名詞	73%	事情や内容の理解	15%
		取材や調査を通じて知り得たこと	24%			承認、納得し認めること	58%
		今まで知らなかったもの、部分を知る	21%			サ変動詞	27%
よく知っている(対象に人を含む)	17%	納得し承認する	16%				
取材や調査を通じて知り得る	14%						
動詞	63%	調査し、把握する(つかむ)	11%				

れなかった。日本語の「了解」では、(a)の例文のように「承認、納得し認めること」という語義で使われている名詞での用例が最も多く58%を占めていた。

(a) 事前に相手方の了解なしに使ってはなりません。

そのほか、日本語の「了解」は事情や内容が「分かる」という、いわば「暗黙知」

⁴「誤用」は複数のタイプに分類されるケースもあった。

⁵各語の「日中対照表」中、日本語・中国語間で共通している語義には網掛けをしている。

的に使われているのに対し、中国語はこれから「知る」ことや「知っている」という、いわば「明示知」的使い方がされ、しかも (b) の用例のようにその対象には人も含まれる。

(b) 我和您都不了解他们。(私もあなたも彼らのことをよく知らない。)

品詞の面で見ると、日本語「了解」は73%が名詞として使われ、それ以外はサ変動詞として使用されていた。一方、中国語は37%が名詞、それ以外は動詞として用いられている。どちらか一方にしかない品詞は存在しないので、日本語では多くは名詞として、中国語では動詞として使用されている可能性が考えられる。また、金田一(1976)が分類した動詞の相(アスペクト)で見ると、日本語の「了解」は「瞬間動詞」であるが、中国語の「了解」は「瞬間動詞」的側面をもつと同時に、「継続動詞」的側面も持つ。「調査し、把握する」という語義で使われている場合がそれである。

表-2は調査2で作成した「了解」の「誤用タイプ分類表」である。学習者の「了解」を使用した作文で「誤用」と判断したものは131例あった。「了解」の不自然な用法には品詞の取り違いは見られず、「誤用」は全て日本語にない語義での使用であった。これは前述したように、日本語・中国語それぞれが異なる語義をもつことが影響していると言える。また、品詞の取り違いは見られないものの、学習者の作文には(3)のような「これから…了解します」を使う表現が少なからず見られた。

表-2 「了解」の「誤用タイプ分類表」

		誤用(不自然な使用)例	誤用全体に占める割合
了解	日本語にない語義(今まで知らなかったもの、部分を知る)で使用		50.0%
	日本語にない語義(人のことをよく知っている)で使用		25.0%
	日本語にない語義(よく知っている、知識がある)で使用		22.0%
	日本語にない語義(知っていること、知識)で使用		1.5%
	日本語にない語義(取材や調査を通じて知り得る)で使用		1.5%

(3) これから日本についての本をたくさん読んで、日本の文化を了解します

中国語の「了解」を使用して表せるアスペクトの範囲は日本語よりも広く、学習者の漢語使用には、中国語「了解」の語義だけでなく、アスペクトの範囲も影響していると言える。

中国語の「了解」を使用して表せるアスペクトの範囲は日本語よりも広く、学習者の漢語使用には、中国語「了解」の語義だけでなく、アスペクトの範囲も影響していると言える。

2. 熱心

表-3から、「熱心」は日本語と中国語に共通する語義もあるが、中国語には日本語にない「親切心にあふ

表-3 「熱心」の「日中対照表」

中国語				日本語			
品詞と出現比率	語義と出現比率			品詞と出現比率	語義と出現比率		
形容詞	85%	物事に対し積極的である、熱意がある	55%	ナ形容詞	99%	物事に対し積極的である、熱意がある	99%
		親切心にあふれる、心温かい	30%				
動詞	8%	尽力する	8%				
名詞	7%	熱意、熱い心	5%	名詞	1%	熱意、熱い心	1%
		親切心、温かい心	2%				

れる、心温かい」「親切心、温かい心」という語義もあることが分かる。たとえばコーパスからの用例(c)がその例である。

(c) 意大利公民日前收到“器官捐献卡”后,表现出巨大的热心。抽样调查结果表明,70%的意大利公民表示愿意在死后捐献器官。(イタリア市民は先日「臓器提供カード」

を受け取り、その温かい思いやりの心をアンケートに反映させた。70%の人が死後の臓器提供を希望しているというのだ。)

品詞の側面から見ると、日本語・中国語とも「熱心」で多く見られた用法は形容詞としての用法であった。わずかだが、両者とも名詞としての用法もある。しかし、中国語だけに見られたのが、「動詞」としての用法である。

「熱心」を使用した学習者の作文で「誤用」と判断したものは140例あった。表-4「誤用タイプ分類表」に見られる「誤用例」の半数以上を占めるのが、

表-4 「熱心」の「誤用タイプ分類表」

誤用（不自然な使用）例		誤用全体に占める割合
熱心	日本語にない語義（親切心にあふれる、または、温かい心）で使用	57.9%
	サ変動詞として使用（例：熱心する）	22.1%
	名詞としては日本語にない形で（例：熱心をもつ、熱心がある）使用	18.6%
	その他（例：熱心的）	2.9%

(4) の作文のような「親切心にあふれる」「温かい心」という日本語にはない語義での使用である。

(4) 知らない人に会っても熱心になりたい。

また、「サ動詞として使用」の誤用も22.1%見られた。これは、中国語に動詞としての用法があることが影響していると考えられる。「熱心」は品詞と語義の違いの両方が、学習者の漢語使用に複合的に影響しているといえる。

3. 関心

「関心」は日本語、中国語ともに「物事に興味をもったり、注意を払う」という共通の語義をもつ。ところが、中国語「関心」では約半数が

表-5 「関心」の「日中対照表」

		中国語		日本語		
品詞と出現比率		語義と出現比率		品詞と出現比率	語義と出現比率	
動詞	83%	物事に興味をもったり、注意を払う	39%	90%	物事に興味をもったり、注意を払うこと	90%
		人や人の生活を心配して気にかける	44%			
名詞	17%	物事に興味をもったり、注意を払うこと	8%	10%	人に興味をもったり、注意を払うこと	10%
		他人を心配して気にかけること	9%			

(d) の用例のように「人や人の生活を心配して気にかける」という使い方をする。

(d) 家里所有的人里面、只有一个年老的佣人王妈关心她、常常偷着照顾她。（家の中でただひとり年老いた使用人の王媽だけが、彼女を心配して気にかけ、こっそりと面倒をみてくれていた。）

日本語でも「関心」の対象が「人」になることもあるが、その場合も対象となる人に対して「興味をもつ」ということに重点がおかれる。品詞面では、日本語の「関心」は名詞として使われる。コーパスの用例では、「関心+を+他動詞（例：もつ、示す）」や、「関心+が+自動詞（例：集まる、高まる）」や「関心+が+形容詞（例：深い、高い）」の形が多く見られた。一方、中国語の「関心」は名詞としての用法もあるものの圧倒的多数は動詞としての用法であった。

「関心」を使用した学習者の作文で「誤用」としたものは130例あった。表-6の「誤

用タイプ分類表」を見てみると、86.2%を占めているのが、(5)の作文のように「関心する」「関心している」などのサ変動詞としての使用である。

(5) 私は親の健康に関心します。

これは前述したように、中国語の「関心」は多くの場合、動詞として使用されることと関係があると言える。また、「心配して気にかける」という日本語にはない語義での使用も27.7%見られた。「関心」は「熱心」と同様、品詞と語義の違いが学習者の漢語使用に複合的に影響していると考えられる。

4. 緊張

表-7を見て分かるように、中国語の「緊張」は日本語よりも多くの語義をもっている。しかも、コーパスの用例の半数近くが、用例(e)

のように日本語にはない「事態や状態が差し迫っている」という語義で使われていた。(e) 现在我参加了北京骨伤中医学院的中医专科班的学习。虽然学习紧张,但内心充实。(今、私は北京骨傷中医学院の中医専科で勉強している。勉強は忙しく気が抜けないが、精神的に充実している。)

品詞の面を見ると、日本語の「緊張」は61%が名詞、39%がサ変動詞として使われていた。一方で、中国語の「緊張」は94%が形容詞としての使用であり、名詞での使用もあったが、わずか6%であった。

「緊張」を使用した学習者の作文で「誤用」と判断したものは42例あった。表-8は「緊張」の「誤用

タイプ分類表」である。「緊張」は日本語・中国語間で共通する語義もあれば、中国語のほうにはいくつかの日本語にはない語義もあった。しかも、用例の半数近くが日本語にはない語義で使用されているものであった。しかし、誤用例の66.7%を占めたのは、(6)の作文に見られるような「緊張だ」「緊張な」といったナ形容詞としての使用であった。

表-6 「関心」の「誤用タイプ分類表」

		誤用 (不自然な使用) 例	誤用全体に占める割合
関心		サ変動詞としての使用 (例: 関心する、関心している など)	86.2%
		日本語にない語義 (心配して気にかける) で使用	27.7%
		ナ形容詞連体形での使用 (例: 関心なこと、関心なのは)	2.3%
		名詞としては日本語にない形で使用 (例: 関心をありがとう、関心の話)	6.2%
		その他: 関心を寄ります、関心が持っている 等	3.8%

表-7 「緊張」の「日中対照表」

中国語				日本語			
品詞と出現比率		語義と出現比率		品詞と出現比率		語義と出現比率	
形容詞	94%	精神が張りつめている	8%	名詞	61%	精神が張りつめている状態 (「感」と共起)	25%
		空気が張りつめている (ビリビリしている)	3%			空気が張りつめている状態 (ビリビリしている状態)	7%
		相互の関係が好ましくない (「関係」「緩和」などと共起)	16%			好ましくない相互の関係 (「関係」「緩和」などと共起)	17%
		身体の一部や全体が固くなっている	1%			身体の一部や全体が固くなった状態 (「性」「型」と共起)	12%
		事態や状態が差し迫っている	47%				
		不足している	17%				
名詞	6%	過密だ、混んでいる	2%	サ変動詞	39%	精神が張りつめる	35%
		精神が張りつめている状態	3%			相互の関係が悪化する	2%
		好ましくない相互の関係	2%			身体の一部が固くなる	2%
		供給不足	1%				

表-8 「緊張」の「誤用タイプ分類表」

		誤用 (不自然な使用) 例	誤用全体に占める割合
緊張		ナ形容詞としての使用 (例: 緊張だ、緊張な、緊張すぎ など)	66.7%
		「緊張になる (なりません)」	21.4%
		名詞としては日本語にない形で使用 (例: 緊張の雰囲気、緊張の気持ち)	7.1%
		日本語にない語義 (供給不足、緊迫している) で使用	4.8%

(6) 舞台に立ちあがる前に、緊張な気持ちで胸が一杯です。

つまり、「緊張」は、語義の違いではなく、品詞の違いが学習者の漢語使用に大きな影響をもたらしているといえる。表-7から見て取れるように、中国語の用例では94%の「緊張」が形容詞として使用されている。初中級の学習者はこの中国語としての用法を日本語使用にも持ち込んで、「緊張だ」「緊張な」といったナ形容詞としての使用をしてしまっていると考えられる。また21.4%を占めたのは「緊張になる(なります)」という表現であった。五味・今村・石黒(2006)では「中国語の発想では、自然に生起する事柄と人為的な事柄を明確に分け、前者には「～になる」、後者には「～する」を当てて考える傾向がある。そのため、自然に生起する事柄に「～する」を使うのは心理的に抵抗が強い」という中国語母語者のコメントを紹介している。「緊張」というのは「変化」が感じられ、自然に生起する事柄を表す言葉であるため、「緊張」を形容詞ととらえている中国語母語の学習者にとっては、「緊張になる」と「～になる」をつけたくなくなる心理が働くと考えられる。

5. 支持

表-9からは、日本語と中国語それぞれの「支持」は微妙に異なる語義で使われていることが

表-9 「支持」の「日中対照表」

中国語		日本語			
品詞と出現比率	語義と出現比率	品詞と出現比率	語義と出現比率		
名詞	20%	12%	ある人(少なくとも身内以外)や団体の意見や行動に賛同すること	49%	
			支援、応援、サポート		
動詞	80%	8%	賛同、賛成	2%	
		47%	支える、応援する、サポートする	ある人(少なくとも身内以外)や団体の意見や行動に賛同すること	48%
		18%	ある人(身近な人や身内も含めて)や団体の考えや意見に賛成、賛同する	支え持つこと	1%
		15%	持ちこたえる、維持する	支え持つ	
		49%	サ変動詞		

示された。日本語も中国語も「ある人や団体の意見や行動に賛同する」という同じような語義をもつが、分類の結果によると、日本語は用例(f)のようにその「人」や「団体」に身内などの親しい人は含まれない。

(f) 同じく民主党を支持する両勢力の、もう一つの重要な対立点は、イスラエル問題で、...

一方、中国語では賛同の対象は身内も含む。その語義の違いは、日本語・中国語それぞれの「支持」の文体の違いをも生んでいる。日本語の「支持」は身近な話題というよりも、多くは政治や経済が関わる固めの表現で用いられていたが、中国語の「支持」は用例(g)に見られるように身の回りのごく近い人や事柄に関する表現にも使用されていた。

(g) 但当父亲与他谈起离婚的愿望的时候他支持了父亲。(しかし父親が離婚したいと言い出したとき、彼は父に味方した)。

また、品詞の面を見ると、日本語の「支持」は51%が名詞、49%がサ変動詞として使われている一方で、中国語の「支持」は20%が名詞での使用であり、80%を占めたのが動詞としての使用であった。

学習者による「支持」を使用した作文で「誤用」としたものは50例あった。表-10によると、学習者による「誤用例」の54%を占めたのは、「応援（する）、サポート（する）」など、

表-10 「支持」の「誤用タイプ分類表」

		誤用（不自然な使用）例	誤用全体に占める割合
支持		日本語にない語義（応援する、サポートする、或いは、応援、サポート）で使用	54.0%
		日本語と微妙に異なる語義（身近な人の意見や日常的な事への賛成する、或いは身近な人の意見や日常的な事への賛成）で使用	34.0%
		「もらう」と共起（例：支持をもらう）	12.0%
		「（人）に支持する」	14.0%
	その他：支持ではありません。等	2.0%	

(7) の作文に見られるような日本語にない語義での使用であった。

(7) 家族の支持のおかげで日本に留学することができます

また、「誤用例」の12%を占めた「支持をもらう」という表現であるが、これは前述したように、中国語の「支持」の80%が動詞としての使用ということと関係があるろう。中国語で「支持」を名詞として使用することは少ないが、名詞として使用する場合は「得到」という動詞の目的語として用いることが多い。「得到支持」は「支持を得る」とも訳せるが、初中級の学習者は「もらう」は習っていても「得る」は習っていない可能性が高く、「支持をもらう」としてしまうと考えられる。

6. 表現

表-11によると、日本語の「表現」は「内面的・主体的なものを文学作品、芸術などで表す」という語義で、多

表-11 「表現」の「日中対照表」

中国語				日本語			
品詞と出現比率		語義と出現比率		品詞と出現比率		語義と出現比率	
名詞	24%	様子や状況の表れ	5%	名詞	63%	内面的・主体的なものの文学作品、芸術などを通じた表れ	63%
		思想や感情の表出	6%				
		内面的・主体的なものの文学作品、芸術などを通じた表れ	5%				
		態度、ふるまい、反応、パフォーマンス	8%				
動詞	76%	(様子や状況を) 表す、表れる、呈する	21%	サ変動詞	37%	内面的・主体的なものを文学作品、芸術などで表す	37%
		思想や感情を表出する	19%				
		内面的・主体的なものを文学作品、芸術などで表す	23%				
		發揮する、ふるまう	13%				

くは表情や身振り、言語面、芸術面などで使われていた。一方、中国語の「表現」も「表す」ことではある。しかし、ほかにも「様子や状況」「思想や感情」を「表す」あるいは、「様子や状況」「思想や感情」が「表れる」ときにも「表現」は使われていた。また、「態度、ふるまい、反応、パフォーマンス」あるいは用例(h)のように「發揮する、ふるまう」という語義でも使用されていた。

(h) 今天自己表现得太软了、在众人面前灭了威风、吃了亏。(今日は弱腰にふるまい過ぎて、大勢の人の前で威厳をそこね、馬鹿をみた。)

品詞においては、日本語の「表現」は63%が名詞、37%がサ変動詞として使われていた。中国語の「支持」は24%が名詞での使用であり、76%を占めたのが動詞としての使用であった。

学習者の「表現」を使用した作文で「誤用」としたのは22例あった。表-12から、学習者

表-12 「表現」の「誤用タイプ分類表」

		誤用（不自然な使用）例	誤用全体に占める割合
表現		日本語にない語義（發揮する、ふるまう、或いは、態度、ふるまい、反応、パフォーマンス）で使用	86.4%
		日本語にない語義（様子や状況を呈する、或いは様子や状況の表れ）で使用	13.6%

の「誤用例」は、全て日本語にない語義での使用であることが分かる。(8)の作文はその例の一つである。

(8) 今度の試合によく表現したいです

「表現」は日本語・中国語で共通する語義もあるが、中国語には日本語にない語義があり、初中級の学習者はその語義を日本語使用の場にも持ち込んでいる。品詞の取り違えはみられなかったので、「表現」は中国語のみの語義が漢語使用に影響をもたらしているといえる。

7. 感情

表-13から、日本語の「感情」は名詞で「外界の刺激に対する心理反応。気持ち」とい

表-13 「感情」の「日中対照表」

中国語				日本語			
品詞と出現比率		語義と出現比率		品詞と出現比率		語義と出現比率	
名詞	100%	外界の刺激に対する心理反応。気持ち	44%	名詞	100%	外界の刺激に対する心理反応。気持ち	100%
		人や物に対する親密感、情愛、愛情	56%				

う語義で使われていることが分かる。中国語の「感情」も44%が日本語と同じ語義で使われていた。しかし、中国語の「感情」は56%が用例(i)に見られるように、「人やものに対する親密感、情愛、愛情」という語義で使用されていた。

(i) 他和她的感情又是那么好。(彼と彼女はあのように親密な気持ちを通わせている。)

日本語の「感情」は100%名詞として使われていた。中国語の「感情」も100%が名詞での使用であった。日本語・中国語ともに品詞は名詞のみなので、品詞の取り違いによる不自然な使用例はない。

表-14 「感情」の「誤用タイプ分類表」

		誤用(不自然な使用)例	誤用全体に占める割合
感情		日本語にない語義(愛情、親密感)などで使用	93.5%
		「深い」と共起(感情が深い)	25.8%
		「良い」と共起(感情が良い)	19.4%

学習者による「感情」を使用した作文で「誤用」としたものは31例であった。学習者の不自然な使用は、「愛情、親密感」などの日本語にない語義での使用がほとんどである。表-14からもわかるように、全「誤用例」の25.8%は、(9)の作文のように「深い」と共起するものである。中国語コーパスの用例を分類した結果も全用例(100例)中8例は「感情」と「深」がともに文中に表れていた。つまり中国語母語話者にとって「感情」は深みを持つものだと考えられる。

(9) 親は子供と感情が深いです

日本語の「感情」は「深い」「深まる」などの語とは共起しない。むしろ、共起する頻度が比較的高かった語は「湧く(わく)」8例、「高(たか)まる」「たかぶり」3例などの、いわば「方向が上向き」の語であり、また、そのほかに「抑える」3例、「鎮める」「押し殺す」1例などの「方向が下向き」の語とも共起していた。「感情」は中国語のみの語義が漢語使用に作用し、共起する語にも影響をもたらしていることが示唆される。

8. 活動

表-15から見てとれるように、日本語・中国語ともに名詞、動詞で「何らかの事を積極的に行う」という共通する語義が見られた。

表-15 「活動」の「日中対照表」

中国語				日本語			
品詞と出現比率		語義と出現比率		品詞と出現比率		語義と出現比率	
名詞	72%	何らかの事を積極的に行うこと	38%	名詞	92%	何らかの事を積極的に行うこと	88%
		行事、催し、イベント	34%			活発に動くこと	3%
動詞	23%	何らかの事を積極的に行う	3%	サ変動詞	8%	活動写真(映画の昔の言い方)	1%
		何かのために奔走する、働きかける	5%			何らかの事を積極的に行う	5%
		運動する、身体を動かす	5%			活発に動く	3%
		活発に動く	9%				
		ぐらつく、動揺する	1%				
形容詞	5%	固定していない、移動可能	3%				
		活発、機敏、いきいきしている	2%				

日本語は名詞88%、サ変動詞5%とほとんどがこの語義で使用されていた。中国語は名詞38%、動詞3%がこの語義での使用であった。一方、中国語の「活動」にしか見られなかった語義に「行事、催し、イベント」があり、全体の34%を占めていた。(j)がその用例。

(j) 图为首都各界迎接新世纪新千年庆祝活动中、欢乐的人群打起锣鼓、舞起长龙。

(写真は新たな世紀を迎えたミレニアムの祝賀行事で、喜びに沸く人々。銅鑼を鳴らし、龍の舞を舞っている。)

日本語の「活動」は名詞としての使用が92%で、8%がサ変動詞としての使用であった。中国語の「活動」も名詞での使用が多く72%であった。動詞としての使用は23%で、形容詞としての使用は5%。

学習者の「活動」を使用した作文で「誤用」としたものは20例あった。表-16から、学習者の「誤用例」で70%

表-16 「活動」の「誤用タイプ分類表」

誤用(不自然な使用)例		誤用全体に占める割合
活動	日本語にない語義(行事)で使用	70.00%
	名詞で単独で使用(例:活動があります)	80.00%

をしめるのは、(10)の作文のような「行事」という日本語にない語義での使用である。(10) 来月、学校で運動会という活動があるから、ぜひ参加してください

中国語の「活動」には日本語にない用法も多いが、名詞の「行事、催し、イベント」以外の語義の用例の出現頻度はどれも高くなかった。つまり、中国語の「活動」の用法の中で、もっとも使用されており、しかも日本語にないものは「行事、催し、イベント」という語義の名詞用法である。そのため、学習者がこの用法を日本語使用にも持ち込み、不自然な表現を生んでしまうと考えられる。中国語には形容詞としての用法もあるが、学習者の不自然な使用には品詞の取り違いは見られなかった。中国語でも形容詞としての使用はあまり多くないためだと考えられる。したがって、「活動」は日本語にない中国語のみの語義が、学習者の漢語使用に影響をもたらしているといえる。

9. 問題

表-17 から見て取れるように、「問題」は日本語・中国語間で共通する語義が多い。しかし、日本語だけの語義、中国語だけの語義も見られた。例えば用例 (k) は、中国語の語義の中で全体の 22% を占めた「質問、疑問」という語義での使用で、日本語の用例の中には見られなかった。

表-17 「問題」の「日中対照表」

		中国語		日本語			
品詞と出現比率		語義と出現比率		品詞と出現比率			
名詞	100%	取り上げて討論、研究する必要がある事。	40%	名詞	100%	取り上げて討論、研究する必要がある事。	4%
		解決を要する事項				解決を要する事項	
		答えや説明を要求する問い	5%			答えさせるための問い	25%
		故障、トラブル	1%			故障、トラブル	2%
		面倒な事件、厄介な事、さしさわり	17%			面倒な事件、厄介な事、さしさわり	46%
		前述したことが関わってくる事	12%			前述したことが関わってくる事	13%
		肝心な点、キーポイント	3%			世間の注目や関心が集まっているもの	10%
		質問、疑問	22%				

(k) 我想问你一个问题 (私、お聞きしたいことがあるんです)

また品詞については、日本語も中国語も名詞のみであった。

学習者の「問題」を使用した作文で「誤用」と判断したものは 13 例あった。表-18 によると、学習者による「誤用例」は全て「質問、疑問」という日本語にない語義での使用である。(11) の作文はその例。

表-18 「問題」の「誤用タイプ分類表」

	誤用 (不自然な使用) 例	誤用全体に占める割合
問題	日本語にない語義 (質問、疑問) で使用	100.0%

(11) 問題があったら、先生に聞いてください

学習者の作文で「誤用」としたものは上述の通り 13 例で、他の 9 語に比べ少なかった。つまり「問題」という語は学習者にとってそれほど、使い方を間違いやすい語ではないということが示唆される。「問題」は、中国語のみの語義が学習者の漢語使用に限定的な影響をもたらしているといえる。

10. 素質

「素質」は日本語と中国語とでは異なる語義で使用されていることがわかる。日本語では

表-19 「素質」の「日中対照表」

		中国語		日本語			
品詞と出現比率		語義と出現比率		品詞と出現比率			
名詞	100%	物や事の性質、本質	9%	名詞	100%	人の持って生まれた性質	48%
		環境や教育や訓練などで培われる身体上或いは人格上の特性。	91%			将来すぐれた能力が発揮されるもとなる性質	52%
		品性、素養					

は「人の持って生まれた性質」という語義での使用が 48% あり、全体の 52% を占めたのが「将来すぐれた能力が発揮されるもとなる性質」という語義での使用である。一方、中国語は 9% が「物や事の性質、本質」という語義で使われていた。中国語ではそのほか 91% が用例 (1) のように「環境や教育や訓練などで培われる身体上或いは人格上の特性」という語義で使われていた。

(1) 重视师资队伍建设和全面提高教师素质、改善教师的工作、学习条件和住房等生活条件。(教員陣の充実を重視し、教員の資質を全面的に高め、教員の勤務、学習、住

宅などの生活条件を改善する。)

日本語の「素質」は「将来すぐれた能力が発揮されるもととなる性質」という語義で使われるが、中国語の「素質」は「環境や教育や訓練などで培われる」ものである。したがって、日本語と中国語の各母語話者がもつ「素質」という語の語義には違いがあるといえる。コーパスの用例を見ると、日本語は「ある」や「持つ」などと共起しやすいが、中国語は「提高（高める、引き上げる）」「高（高い）」などと共起しやすい。このことは、この日本語・中国語の各母語話者の「素質」の語義の違いが影響していると考えられる。「素質」の品詞は、日本語、中国語とも名詞のみであった。

学習者の「素質」を使用した作文で「誤用」としたものは40例あった。表-20によると、学習者による「誤用」の55%を占めたのは(12)の作文のように、「高い」「低い」「高める」

表-20 「素質」の「誤用タイプ分類表」

	誤用（不自然な使用）例	誤用全体に占める割合
素質	日本語にない語義（環境や教育や訓練などで培われる身体上或いは人格上の特性）で使用 「高い」「低い」「高める」「高まる」「上がる」と共起	55.0%
	日本語にない語義（物の性質）で使用	10.0%
	日本語にない語義（人の生まれ持った生理的特質）で使用	2.5%
	「良い」「悪い」と共起（※）	32.5%

「高まる」「上がる」などと共起する「環境や教育や訓練などで培われる身体上或いは人格上の特性」という語義での使用であった。

(12) 王さんは留学したあとで素質が上がっています。

これは前述したように、日本語・中国語の語義の違いに起因していると考えられる。中国語の「素質」は培われるものにとらえられており、「素質」が「悪い」状態の時もあるが、教育や訓練などで培われた結果、比較的「良い」ものになるという考え方があるのだと考えられる。「素質」は日本語・中国語とも品詞は名詞だが、それぞれ違った語義で使用されている。語義の違いが学習者の漢語使用に影響しているといえる。

VI. 考察

以上、本研究の対象とした10の同形語一つ一つについて、コーパスからの用例を分類したうえで、各同形語が日本語・中国語の各母語話者にどのような条件の下で使用され、また中国語での用法が、中国語を母

表-21 各同形語の日本語・中国語間の語義と品詞の異同、及び漢語使用への影響

	語義の日中間での異同	品詞の日中間での異同	漢語使用に影響するもの
了解	日中間で異なる	同じ	中国語だけの語義とアスペクト範囲
素質	日中間で異なる	同じ	中国語だけの語義と共起する語
支持	日中間で微妙に異なる	同じ	中国語だけの語義と文体
感情	一部共通するが中国語だけの語義あり	同じ	中国語だけの語義と共起する語
表現	一部共通するが中国語だけの語義あり	同じ	中国語だけの語義
問題	一部共通するが中国語だけの語義あり	同じ	中国語だけの語義
活動	一部共通するが中国語だけの語義あり	中国語だけに形容詞	中国語だけの語義
乗張	一部共通するが中国語だけの語義あり	中国語だけに形容詞、日本語だけに動詞	中国語だけの品詞
熱心	一部共通するが中国語だけの語義あり	中国語だけに動詞あり	中国語だけの語義と品詞の違い
関心	一部共通するが日本語だけの語義、中国語だけの語義あり	中国語だけに動詞あり	中国語だけの語義と品詞の違い

語とする初中級の日本語学習者の漢語使用にどのような影響をもたらしているのかについて見てきた。これを簡単にまとめたのが表-21である。

本研究の対象となった10語は、学習者が初中級で学習する漢語で、かつ学習者の作文の中で不自然な表現の出現頻度が高かった語である。実際に、コーパスから抽出した用例を分類した結果、語義については「了解」「素質」「支持」が日本語・中国語間で異なっており、「感情」「表現」「問題」「活動」「緊張」「熱心」は日中間で一部共通するが中国語だけの語義も観察された。「関心」の語義は日中間で一部共通するものもあるが、日本語だけの語義と中国語だけの語義も見られた。

品詞については、「了解」「素質」「支持」「感情」「表現」「問題」は日本語・中国語で共通しており⁶、「活動」は共通する品詞のほかに、中国語だけに形容詞用法があった。「緊張」は共通する品詞のほかに、中国語だけに形容詞用法が、日本語だけにサ変動詞用法があり、「熱心」「関心」は共通する品詞のほかに中国語だけに動詞用法があった。対象となった10語には全て、日本語・中国語間で異なる語義が観察された。しかし、学習者の漢語使用への影響を観察すると、不自然な表現の原因となっているのは必ずしも語義の違いだけによるものではないということがいえる。「緊張」は日本語・中国語で一部の語義は共通するものの、中国語だけの語義も見られた。しかし、学習者の漢語使用に影響をもたらす不自然な表現を生んでいたのは、中国語の語義ではなく、中国語の形容詞用法、つまり品詞であった。また、「熱心」「関心」は、語義の違いと品詞の違いが複合的に学習者の漢語使用に影響を及ぼしていたし、「活動」は中国語だけの形容詞的用法が観察されたが、その用法の母語話者による使用頻度は低く、学習者の漢語使用にはあまり影響を及ぼしていなかった。また「感情」「素質」のように語義の異なりが共起する語にも影響したり、「支持」のように語義の異なりが文体の違いも生んでいることも観察された。

従来の研究で漢語は、日本語・中国語間で「意味が異なる語」や「意味の一部が重なる語」は習得が困難で、負の転移が起こりやすいとされてきた。確かに本研究でも表-21に示したように、「了解」「素質」「支持」「感情」「表現」「問題」「活動」などは日本語・中国語間の語義の違いや中国語だけにある語義が、学習者の漢語使用に影響していることが確かめられた。しかし、「緊張」のように日本語にはない語義をもつ語であっても、語義の違いは学習者の漢語使用に影響せず、むしろ日本語にはない形容詞用法が学習者の不自然な表現を生み出していることや、「熱心」「関心」のように語義と品詞双方が複合的影響をもたらしていることも観察された。このことは、「意味の異なる語」や「意味の一部が重なる語」がおしなべて学習者の習得や使用に影響すると単純には言えないことを示している。

では、学習者の漢語使用に影響し不自然な表現を生む原因となっていたのは、何な

⁶ 日本語のサ変動詞と中国語の動詞は本研究では同じ品詞とみなした。

のか。ここでは調査2で得られた各同形語の「誤用タイプ分類表」の中で誤用全体に占める割合が最も高かった不自然な表現と、その原因と考えられる中国語用法の出現比率を表-22に示し、考察を加えたい。

「緊張」「素質」「関心」「支持」「感情」は、学習者の不自然な表現に影響

すると考えられる中国語の用法は全用法の50%以上を占めていることがわかる。「緊張」と「素質」は9割以上である。それ以外の「活動」「熱心」「問題」「了解」「表現」については50%以下ではあるが、前章で示した各語の「日中対照表」を見て言えるのは、中国語のみに見られる用法の中で、学習者の不自然な表現に影響すると考えられるものはどれも、全用法の中で相対的に出現頻度の高い用法であった。

このことから、学習者の漢語使用に影響し、しばしば不自然な表現を生む原因となっているのは、中国語の用法の中でも出現頻度が相対的に高い用法であるということがいえる。つまり、語義・品詞の両面から見て中国語のみに存在する用法の中でも、相対的によく見たり聞いたり或いは中国語母語話者自身がしばしば使用する用法が、日本語の漢語を習得・使用する上で影響をもたらしているということである。

したがって、中間言語の段階にある学習者の漢語使用に影響し不自然な表現を生み出しているのは、語義の違い、あるいは品詞の違いという単純な枠組みでは判断できない。本研究では、もう少し大きな視点で、母語話者の使用を基盤にした用法に着目した。それにより観察されたのは、中国語だけに見られる用法の中でも使用頻度が相対的に高い用法が、中国語を母語とする初中級の学習者の漢語使用に大きく影響し、それがしばしば不自然な表現を生み出しているということである。

VII. まとめ

本研究では、日本語学習者が初中級で学習する日中同形語10語が、日本語・中国語の各母語話者にどのように捉えられ、またどのような条件の下で使われているのか

表-22 出現頻度が最多の誤用とその原因と考えられる中国語の用法

	全誤用中、最も出現頻度が高い誤用とその比率		誤用と関係がある中国語の用法とその比率	
緊張	ナ形容詞としての使用 (例：緊張だ、緊張な、緊張すぎ など)	66.7%	中国語だけに見られる形容詞用法	94.0%
素質	日本語にない語義 (環境や教育により、レベルが向上したり下降する身体上或いは人格上の特性) で使用	55.0%	中国語だけにある語義 [環境や教育により、レベルが向上したり下降する身体上或いは人格上の特性]	91.0%
関心	サ変動詞としての使用 (例：関心する、関心している など)	86.2%	中国語だけに見られる動詞用法	83.0%
支持	日本語にない語義 (応援する、サポートする、応援、サポート) で使用	54.0%	中国語だけにある語義 [支える、応援する、支援する、サポート]	59.0%
感情	日本語にない語義 (愛情、親密感) など使用	93.5%	中国語だけにある語義 [人や物に対する親密感、情愛、愛情]	56.0%
活動	日本語にない語義 (行事) で使用	70.0%	中国語だけにある語義 [行事、催し、イベント]	34.0%
熱心	日本語にない語義 (親切心にあふれる、または、温かい心) で使用	51.4%	中国語だけにある語義 [親切心にあふれる、心温かい]	32.0%
問題	日本語にない語義 (質問、疑問) で使用	100.0%	中国語だけにある語義 [質問、疑問]	22.0%
了解	日本語にない語義 (今まで知らなかったもの、部分を知る) で使用	50.0%	中国語だけにある語義 [今まで知らなかったもの、部分を知る]	21.0%
表現	日本語にない語義 (発揮する、ふるまう、態度、ふるまい、反応) で使用	86.4%	中国語だけにある語義 [態度、ふるまい、反応、パフォーマンス] + [発揮する、ふるまう]	21.0%

を意味的、文法的両側面から分析を行った。また、その中国語としての用法が、中国語を母語とする日本語学習者の漢語使用にどう影響しているのかについて考察をおこなった。これまでの研究のように、同形語の不自然な使用の原因を辞書的意味の異同からだけ、または品詞の面からだけで考えるのではなく、もう少し大きな視点で、各母語話者による実際の用例に基づき分析を進めたいと考えた。そこで、同形語の意味的・文法的側面の把握にあたっては、日本語と中国語の各コーパスを使用した。

その結果、従来の研究では示されなかった同形語の「日本語・中国語間の共通語義」と「日本語・中国語それぞれの語義」、「日本語・中国語間の品詞の異同」などが把握できた。さらに、学習者による短作文の中に見られる誤用のタイプ分析から、学習者に不自然な使用をさせる要素は、語によって様々であることが分かった。そして、中国語だけに見られる用法の中でも使用頻度が相対的に高く際立った用法が、中国語を母語とする初中級の学習者の漢語使用に大きく影響し、それがしばしば不自然な表現を生み出しているということが示された。

幼いころからの母語の言語習慣から抜け出して、外国語を場面に応じた用法で的確に使いこなせるようになることは難しいし、時間がかかることである。初中級の学習者の中間言語はその全体的な用法を獲得する過程にある。日本語と中国語が同形の漢語指導においては、本研究で観察されたような学習者の背後にある中国語としての語の「とらえ方」にも考慮しながら、日本語との違いを説明することが必要であろう。

謝辞：本研究の調査においては、中国福建省の集美大学日本語科及び東京都福生市の新日本学院に大変お世話になりました。また、多くの中国語を母語とする日本語学習者に調査に協力して頂きました。深く感謝申し上げます。

主要参考文献

- 1) 荒川清秀 (1979) 「中国語と漢語—文化庁『中国語と対応する漢語』の評を兼ねて—」. 『愛知大学文学論叢』 62、 pp.1-28
- 2) 大河内康憲 (1992) 「日本語と中国語の同形語」大河内康憲編『日本語と中国語の対照研究論文集』くろしお出版、pp.411-447
- 3) 加藤稔人 (2005) 「中国語母語話者による日本語の漢語習得」日本語教育学会編『日本語教育 125号』 pp. 96-105
- 4) 金田一春彦 (1976) 『日本語動詞のアスペクト』むぎ書房
- 5) 候仁鋒 (1997) 「同形語の品詞の相違についての考察」『日本学研究』 6、 pp.78-88
- 6) 国際交流基金 (1994) 『日本語能力試験 出題基準』 凡人社
- 7) 小森和子・玉岡賀津雄・近藤安月子 (2008) 「中国語を第一言語とする日本語学習者の同形語の認知処理—同形類義語と同形異議語を対象に—」『日本語科学』

23、pp.81-94

- 8) 五味政信・今村和宏・石黒圭 (2006) 「日中語の品詞のズレー二字漢語の動作性をめぐってー」『一橋大学留学生センター紀要』9、pp.3-13
- 9) 石堅・王健康 (1983) 「日中同形語における文法的ズレ」『日本語・中国語対応表現用例集』5、pp.56-82
- 10) 陳毓敏 (2003) 「中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得についてー同義語・類義語・異義語・脱落語の4タイプからの検討ー」日本語教育学会編『日本語教育学会秋季大会予稿集』、pp.174-179
- 11) 文化庁 (1978) 『中国語と対応する漢語』大蔵省印刷局
- 12) 松見法男 (2002) 「第二言語の語彙を習得する」海保博之・柏崎秀子編『日本語教育のための心理学』新曜社、pp.97-110

現代中国語の新受身表現「被 XX」について

——「被」の新しい使用法に関する研究——

田 帥

要 旨

本論文では、中国語の流行語「被 XX」について、日本語の受身構造モデルを適用して考察する。第1節では「被 XX」の表現と受身表現について先行研究に当たり、第2節では日本語の受身の構造図示に倣って現代中国語の受身の構造を図示する。また、考察結果を先取りして中国語での新旧の「被」による受身表現の対照表を作り、新表現がどのように異なるものであるのかを把握しやすくする。第3節では、新しい受身表現「被 XX」を4つのパターンにおいて考察する。第4節では「被」の歴史を概観する。第5節で結論を述べる。

キーワード：受身表現、受身構造、中国語の「被」、受身標記

0 はじめに

本論文で研究対象とする中国語の新しい「被 XX」表現には、「被自杀・被捐款・被幸福・被代表」のようなものがある。このような表現は受身でありながら一般の受身と異なり、意味することに含みがある。このような受身表現の構造を明らかにし、発生の社会的原因を考察してみたい。

現在中国語では漢字「被」の名詞の場合を除いて最も重要な役割は受身を表すことである。言語を問わず、受身文を作るには必要な要素がある。典型的な受身構造は三つの要素により構成される。受動者（動作、行為の受け手）、加動者（動作、行為の送り手 省略可能）、動作（動詞）である。

例

加動者	動作	受動者
犬	咬む	人間

以上のことは異なる観点から表現できる。普通の場合は「犬は人間を咬んだ。」で表す。

受身の場合は「人間は犬に咬まれた。」で表現する。日本語では「咬む」から「咬まれる」への変化を用いて受身を表す。中国語式の表現は「人間 被¹ 犬 咬む」である。

1 先行研究と本論文の課題

1-1 中国語での先行研究

中国語の新しい「被 XX」表現についての先行研究は「被 XX」の意味の側面を重視し、これについて議論することが多い。また、社会問題の角度からの分析もある。形式について論じている先行研究はごく一部のものだけである。例えば、湯玫英が「“被 XX” 格式流行原因探析」(2009)で「被 XX」の形がユニークであることを述べ、「被 + 他動詞以外」が新受身表現「被 XX」の特徴であり、これが従来の「被」による受身用法と異なる、と指摘しているぐらいである。

本稿では文法的な形式の角度から「被 XX」の新用法を分析・研究する。

1-2 日本語の受身表現について

1-2-1 日本語の受身

受身とは文法で、主語が他からの動作、作用をうける意を表す言い方。文語では、動詞の未然形に助動詞「る」「らる」(古くは「ゆ」「らゆ」)、古語では助動詞「れる」「られる」を付けて言い表す。(『大辞泉』増補・新装版)

① 直接受身

直接受身は、能動文における直接目的語または間接目的語を主語にするものである。

② 間接受身

間接受身は間接的に影響(ふつうは主語から見て悪影響)を被るものを主語に立てる表現であり、通常、主語は人間である。

1-2-2 日本語の受身構造についての先行研究

日本語の受身構造について構造モデルを使用して論じている先行研究に今泉喜一「日本語構造伝達文法」05版(2005)がある。直接受動態と間接受動態のモデルを以下のように示している(p.106)。

① 直接受動態²

元の文で動詞の目的語となっている名詞が受動態の主語となるとき、「直接受動態」と呼ばれる受動態になる。

¹「被」というものについて、中国語の場合は動詞の変化がないので、文の中では受身用の記号を加えて受身を表す「屈哨兵(2008)『現代汉语被动标记研究』」。その漢字「被」は受身の標記である。このような標記には「叫」、「讓」、「給」などもある。

²『大辞泉』によると、受動態とは、文法で、他からの動作、作用を受ける対象を主語に立てた場合に、その述語の動詞がとる形式。受身。

(1) 子供が父親に sikar-ar- ← 父親が子供を sikar-



図1 直接受動態「子供が父親にしかられ」

② 間接受身表現

元の文で動詞の目的語となっていない名詞が受動態の主語となる時、「間接受動態」と呼ばれる受動態になる。

(2) 私は雨に hur-ar- ← 雨が私に hur-

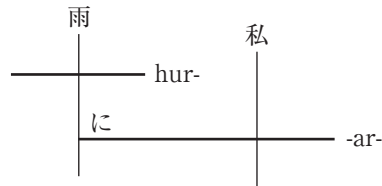


図2 間接受動態「私が雨に降られ」

「降る」は自動詞で、「降られる」は自動詞の受身形である。このような間接受身の表現は特に迷惑な気持ちを表現することが多く、「迷惑の受身」とも呼ばれる。

2 現代中国語「被」による受身の構造

2-1 構造図示

中国語における従来の「被」による受身表現を上日本語の構造図に倣って示してみたい。

(3) 摩托车被人们拦住了。(刘咏 1987 「两根奇特的手杖」)

(A) (B)

和訳：バイクが人々によって止められた。

(A) (B)

この例では、「人々がバイクを止めた」が元の文であり、それが受身になったので、図3のような構造図になる。

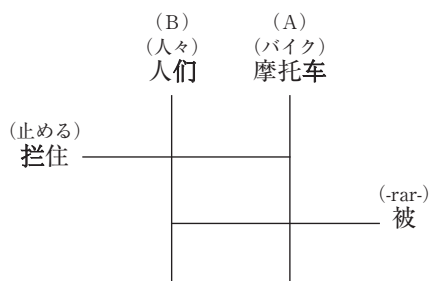


図3 摩托车被人们拦住了 (バイクが人々によって止められ)

2-2 考察の結果としての表1

本研究では構造モデルに従って考察を行った結果、次のような表(表1)を得ることができた。ここでは考察の結果として得られた表を先に示して、研究の概要を理解しやすくする。この結果を得るに至った経緯は3節において述べる。

表1 従来の「被」構造と新たな「被」構造の対照表

従来の「被」による受身		新しい「被」による受身	
文型	A 被 (B) V 了。 例：摩托车被人们拦住了	文型	A 被 (B) XX 了。 例：被自杀了
A	受動者(動作、行為の受け手)	A	弱者の方を表す。
B	動作者(動作、行為の送り手)であるが、省略しない場合は「被」が受身記号である。	B	優勢者の方を表す。表示すると動作者(原因者)が明るみに出てしまうので、通常隠しておく。
V	動詞(すべて他動詞である。)	XX	二つの漢字で構成した中国語の単語を表す。(自動詞、名詞、形容詞、他動詞)

表1の説明：

「被」の新しい用法による受身の文の形は、従来の「被」による一部の受身用法(本研究の対象とする「A 被 (B) V 了」という文型のもの)と似ている。表1では「被」による従来の受身用法と新しい受身用法を比べてその異同を示した。

- ① 両者ともAという部分が受動者である。ただし、新用法ではAの部分に制約があり、特に立場としての「弱者」が適合する。
- ② 元々、Bの部分は動作者であるが、新用法では特に「優勢者」である動作者・原因者を表す。新用法では社会的理由からこの原因者を明らかにしないことになっており、通常は表現されず隠されている。
- ③ 従来の文法では、Vの部分は他動詞しか考えられない。本研究では、新用法のその部分をXXで表す。新用法ではこの部分に他動詞だけではなく、自動詞、名詞、

形容詞も使用される。次の節において XX の部分を 4 つのパターンに分けて分析する。

3 新用法の4つのパターン

3-1 文型「A+ 被 (B) +Vi (自動詞) 了」

この文型は XX の部分が自動詞のものである。「自殺」という自動詞を例として論じる。

(4) 被自殺³

この文は従来の文法で考えれば「自殺された」という意味になりそうであるが、新用法では「自殺したことにされた」という意味になっている。

(5) 犯人被 (警察) 自殺了。

(5a) [直訳] 犯人が (警察に) 自殺された。

(5b) [意識] 犯人が (警察に) 自殺したことにされた。

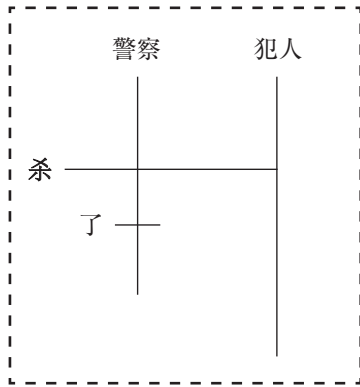
「自殺」というのは主体 (犯人) 個人の行為であり、直接に動作の対象となるものがない。自らの意識で行う、自らで完結する行為である。「自杀」(日本語で「自殺する」) という動詞は自動詞であり、「被」を「自杀」の前に付けることは、従来の中国語文法では考えられない。しかし、新用法では (4) のように「被自殺」という表現になる。この「被」の用法は従来の文法では説明できない。それで、ここで構造を用いて考察したい。

出来事として発生したことは、「犯人が警察に逮捕されて、警察に殺された」ということである。しかし、警察は「犯人を殺した」と言わずに「犯人が自殺した」と発表した。それで犯人は「自殺したことにされた」のである。これを構造で表すことにする。

図4は「警察杀了犯人。」(警察が犯人を殺した。) という構造である。これは出来事の表現として真である。真であることを示す構造は破線の枠の中に入れて表示する。

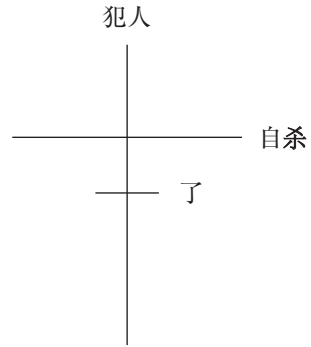
図5は「犯人自杀了。」(犯人が自殺した。) という構造であるが、これは出来事の表現としては偽である。偽の表現はここでは枠の中に入れてないが、図8からは丸枠(○)の中に入れて表示する。

³「被自殺」という言葉の出典について2008年3月12日、李国福さんという人は安徽の第一監獄病院で死亡したことが確認された。しかし、彼の家族はそのことを認めなかった。それは上訴しても変わらない結果になった。その李国福さんの死因は分からないのに自殺したという結論になった。それで「被自殺」という言葉が生まれた。(URL:<http://zh.wikipedia.org/wiki/被子句式> 2012.11.20)



真

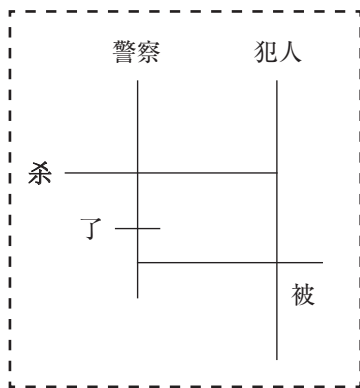
図4 警察杀了犯人。



偽

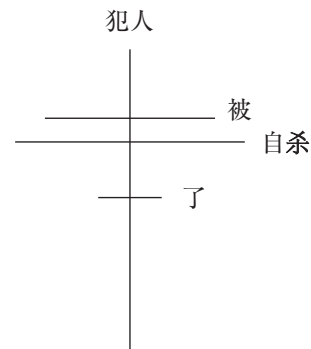
図5 犯人自杀了。

この図4、図5に受身を加えて構造図示すれば図6、図7のようになる。



真

図6 犯人被警察杀了。
(犯人が警察に殺された。)



偽

図7 犯人被自杀了。
(犯人が自殺された。)

「被自殺」に関する構造は、図6の構造と図7の構造を合成して、図8の構造になる。

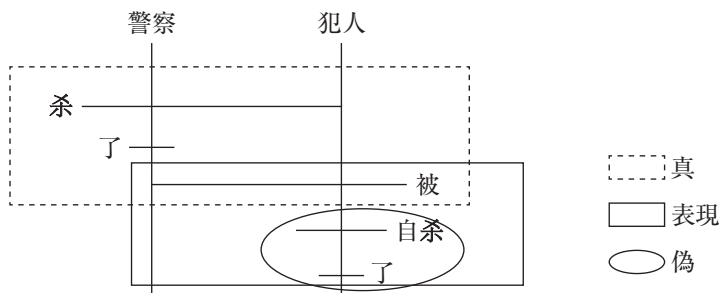


図8 [図6と図7の合成]

この合成構造図8について説明する。

□ で囲んだ部分「被自殺了」(自殺された……自殺したことにされた)は、本稿で考察の対象としている新しい表現の構造である。この表現は、破線枠内の構造が示す事実を、真実を隠した形で他者に伝えたいという気持ちから生まれたものである。

○ で囲んだ部分「自殺了」は、B(警察)あるいはBの利益関係者が公に発表する表現である。これは捏造されたものである。

⋯⋯ で囲んだ部分「警察杀了犯人」は、隠された真実のことを表す部分である。

「被自殺了」という新表現は、破線枠内の真実をそのまま表現することができないので、公に発表された「自殺了」という表現に「被」を加えて実線枠内の表現とし、これにより破線枠内の真実の出来事を伝えようとしているのである。「自殺了」に「被」を加えるということは従来の文法ではありえないのであるが、やむにやまれぬ表現意欲がこの新文法を生んだものと考えられる。

3-2 文型「A+被(B)+N(名詞)了。」

この文型はXXの部分の名詞のものである。「捐款」(献金)という名詞を例として論じる。

(6) 被捐款⁴

この文は従来の文法で考えれば「献金された」という意味になりそうであるが、新用法では「献金を強いられた」という意味になっている。

(7) A被(B)捐款了。

(7a) [直訳] Aさんが(Bに)献金された。

(7b) [意訳] Aさんが(Bに)献金を強いられた。

「被捐款」は「献金を強いられた」という意味である。「捐款」は日本語で「献金」の意味である。従来の中国語文法に基づけば、「被」+「名詞」の表現は不可能であるので、新しい表現ではないかと考えられる。つまり、普通の表現は「被+動詞+名詞」という表現になるので、「被+名詞」の表現では必ず真ん中に何らかの動詞が省略されているものと考えられる。この例の場合は中国語の「强迫」(強いる)という動詞が省略されている。

この関係は図9のような構造として考えられる。

⁴「被捐款」の出典について、中国四川省内江市の都市の緑化率は13%しかないので、政府の指示で都市にたくさん木や草などの緑植物を植えることになった。そのため、政府管理スタッフと市民は金を寄付して指示されたことをしなければいけなくなった。献金したくない人たちもしなければいけないので、献金することを「被捐款」と呼んだ。

(URL:http://news.china.com.cn/rollnews/201107/22/content_9075892.htm 2012.11.20)

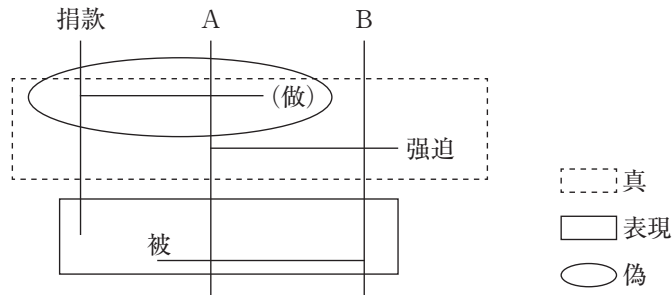


図9 被捐款

この図9は次のことを表している。

- 破線枠内の真の部分は「B 强迫 A 捐款了。」(B が A さんに献金することを強いた。)である。これは本当のことである。
- 丸枠内の偽の部分は「A 捐款了。」(A さんが寄付をした。)である。
もしこの件について、そのままの真実を言うと B に悪い影響を及ぼすので、B が強制したことの真実を隠して丸枠内のようなそをつく。
- ⋯ 実線枠内の表現の部分は「A 被捐款了。」(A さんが献金された。)となるが、このように表現することによって、破線枠部の事実を示唆することができる。
やむにやまれぬ表現への意欲から新しい表現が生まれたのである。

3-3 文型「A+ 被 (B) +adj. (形容詞) 了。」

この文型では XX の部分が形容詞になっている。「幸福」(幸福な)という形容詞を例とする。

(8) 被幸福⁵

この文は従来の文法で考えれば「幸福になられた」という意味になりそうであるが、新用法では「幸福のようにみせかけられた」という意味になっている。

(9) A 被 (B) 幸福了。

(10a) [直訳] A さんが (B に) 幸福になられた。

(10b) [意識] A さんが (B に) 幸福のようにみせかけられた。

「被幸福」は「幸福のようにみせかけられた」という意味である。実際は幸福ではない可能性があるが、この表現によれば幸福だということになる。従来の中国語文法には「被+形容詞」の表現は存在しない。新たな表現ではこれが可能になった。幸不幸に関わるどんな状況にあっても、主体は幸福であるとして表現されることがあり、

⁵「被幸福」の出典について中国の政府が国民のデータを集めた。そのデータは「幸福指数」というものである。結果はかなり高いというものが出ている。しかし、事実とは違っているので、国民はその話を信用していない。つまり、その幸福のことがみんなに認められないため、「被幸福」という言葉が生まれた。(『中国人大』2010年01期「“被幸福”，还是不要了」)

その場合、主体（A）は幸福であるという状態に見せかけられたことになる。

構造は図 10 のようなものとして考えることができる。

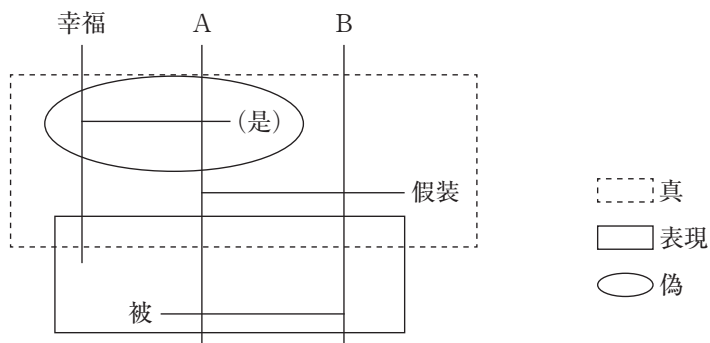


図 10 被幸福

この図 10 は次のことを表している。

- 破線枠内の真の部分は「B 假装 A 幸福了。」（B が A さんを幸福のようにみせかけた。）である。これは本当のことである。
- 丸枠内の偽の部分は「A 幸福了。」（A さんが幸福になった。）である。もしこの件について、そのままの真実を言うと B に悪い影響を及ぼすので、B は A さんの今の真実の状態を隠して丸枠内のようなうそをつく。
- ⋯ 実線枠内の表現の部分は「A 被幸福了。」（A さんが幸福になられた／みせかけられた）であり、このようにすると、事実を示唆することができる。表現意欲がこの新しい表現を生んだ。

3-4 文型「A+ 被 (B) +vt. (他動詞) 了。」

この文型では XX の部分が他動詞である。「代表」（代表する）という他動詞を例としたい。

(11) 被代表⁶

この文は従来の文法で考えれば「代表になられた」という意味になりそうであるが、新用法では「代表したことにされた」という意味になる。

(12) A 被 (政府) 代表了。

(12a) [直訳] A さんが (政府に) 代表された。

(12b) [意識] A さんが (政府に) 代表したことにされた。

「被代表」は「(知らない間に) 代表したことにされた」という意味である。例えば政府側の報告ではある決定が代表により認められたことになっている。その代表は

⁶「被代表」の出典について「被代表」とは、節 4-1 から 4-3 までのまとめとして理解できる。すべての政府側の不真実な望みを国民に与えることを国民の理解で「被代表」と表現した。その言葉は 2009 年 12 月末に生まれた。(URL:<http://zh.wikipedia.org/wiki/被子句式> 2012.11.20)

A さんである。しかし、実際には A さんはそのことを全然知らない。そのような場合に A さんは「被代表」と表現できる。

構造は図 11 のようなものとして考えられる。

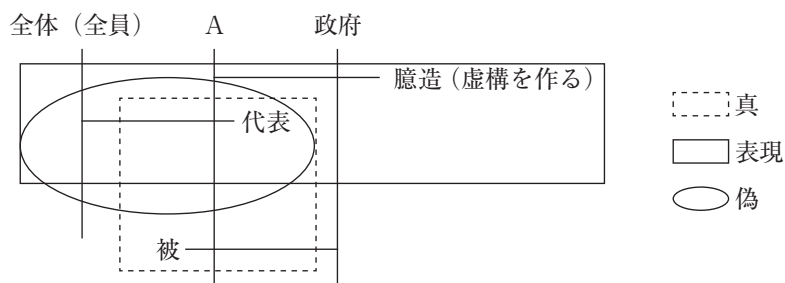


図 11 被代表

この図 11 は次のことを表している。

- 破線枠内の真の部分は「政府臆造 A 代表全体。」(政府が A さんを全員の代表であることにした。)である。これは本当のことである。
- 丸枠内の偽の部分は「A 代表了全体。」(A さんがみんなを代表した。)である。もしこの件について、そのままの真実を言うと B に悪い影響を及ぼすので、政府は A さんについての真実を隠してこのようなうそをつく。
- ⋯ 実線枠内の実際の表現の部分は「A 被代表了。」(A さんが代表された。／代表したことにされた。)であり、このようにすると、事実を示唆することができる。新しい表現である。

4 「被」の歴史

4-1 「被」の研究について

「被」による受身表現には長い歴史がある。その研究は近代以降に進められている。梶 (2008) は次のように指摘している。(要約して引用する。)

- ・「被」による受身文は中国語では特殊な文構造であり、近代以降に学者の注目を引いてきた。「被」による受身文に関する研究には長い歴史がある。
- ・近現代における「被」による受身文の研究は「20 世紀 20 年代からの関心」、「50 年代以降の発展」、「80 年代以来の高揚」の三つの階段に分けられる。
- ・特に 90 年代から現在に至るまで「被」による受身文について「接頭語説」、「介詞説」、「記号説」と「動詞説」の四つの説があった。
- ・前の三つ(「接頭語説」、「介詞説」、「記号説」)を唱える学者は「被」を用いた文を受身文として研究する。しかし、「動詞説」の研究者は「被」を動詞とする。つまり、その場合「被」は動詞なので、文には受身用法が存在しないことになる。
- ・この問題は十数年前から議論されてきたが、現在もなお解決をみていない。

4-2 漢字「被」の発展（文法化）

「被」は漢字としては「衣」と「皮」の二つの漢字を組み合わせたものである。掛け布団がない古代において、人は「服」と「皮」を掛けて就寝した。その後、掛け布団ができてから、掛け布団を「被」で表すようになった。

被、寝衣、长一身有半。（东汉・许慎『说文』）。

筆者訳：「被」というのは寝巻き（「掛け布団」）であり、長さが身長の1.5倍のものである。

ほぼ同じ時期に「披」という漢字が生まれた。意味は「掛ける」である。「被」と似ているので、仮借により「被」は動詞「披」として「掛ける」の意味で使えるようになった。つまり、「被」は動詞性を得た。その後、「覆う」、「受ける」、「遭う」の意味になった。

秦王复击轲、被八创。（『战国策・燕策』）

筆者訳：荆轲が秦王に切られて八箇所に傷を受けた。

4-3 近古時代までの記載の「被」による用法（例を挙げる）

i 上古時代⁷

名詞の例文：翡翠珠被。（戦国時代「楚辞・招魂」；向熹 2010）

筆者訳：华丽的被子

筆者訳：華麗な掛け布団。

動詞の例文：皋兰被径兮。（戦国時代「楚辞・招魂」；向熹 2010）

筆者訳：兰草遮住道路了。

筆者訳：フジバカマが道を遮った。

受身の例文：過一日被攻、雖欲事秦、不可得也。（戦国時代「戦国策・齊策一」；向熹 2010）

筆者訳：家一旦被攻破、即使想要贿赂秦国、也是不可以的。

筆者訳：国はいったん攻め落とされると、たとえ秦に賄賂を贈っても、存続することはできない。

ii 中古時代⁸

「被 + vt」による例文：错卒被戮。（後漢「汉书・酷吏传」；张延俊 2010）

⁷ 上古中国語において「被」による受身表現が始まった。資料記載が少ないので、具体的にいつから始まったのかを明らかにすることはできないが、文献には春秋時代から「被 + v」の表現が少しずつ出現したことが示されている（向熹 2010『簡明漢語史 上古漢語語法的發展』）。当時は「被」という漢字は通常、名詞あるいは動詞として使われていた。

⁸ 後漢以降に「被」による表現が以前より多くなった。形式としては「被 V」が多かった。当時の「被」式受身表現の文法構造は簡単なものであり、目的語、補語、連用修飾語が付かずに使われることが多かった。中古中期ごろに「被」式の表現が大幅に増加した。結果として受身を表す助動詞の中では「于」と「見」を超えて「為」に次ぐ第二位の使用頻度になった。さらに、中古晩期の著作『世説新語』中では「被」を受身助動詞として使用する頻度が「為」を超えて第一位になった。（张延俊 2010「汉语被动式历时研究」中古汉语被动式）

筆者訳：做错了什么就会被杀头。

筆者訳：何か間違っていると殺される。

「被 +n.+vt」による例文：吾皇被太后征。(三国時代「三国志・魏志・三少
帝紀」；张延俊 2010)

筆者訳：我皇被太后召见。

筆者訳：我々の皇帝は母に召見される。

iii 近古時代⁹

「被 +n.+vt」

例文：我被你埋怨。(元「琵琶记」十出；张延俊 2010)

筆者訳：私はあなたに恨まれた。

「被 +adj.+n.+vt」

例文：被冯渊的冤魂追索而死。(清「红楼梦」第四回；张延俊 2010)

筆者訳：冯渊の亡霊に催促されて死んだ。

「被 +n.+n.+vt.」

例文：学生正染病、被他父亲王尚书偶然遇见。

(元「拜月亭」第三十九出；张延俊 2010)

筆者訳：学生が病気になっている時に父親の王尚书に出迎えられる。

「被 +n.+vt+vt」

例文：黛玉知是外祖母了、正欲下拜、早被外祖母抱住、搂入怀中。

(清「红楼梦」第三回；张延俊 2010)

筆者訳：黛玉はおばあさんのことを知っていたから、礼拝しようとした
とき、おばあさんに抱きしめられた。

4-4 近現代の「被」による受身表現の特徴

中国語各方言の間には大きな差が存在している。しかし、現代中国語の標準語は北京語を普通話とし、北方語を基礎方言とし、模範的な現代白話文の著作を文法規範としたものである。受身表現に使用される「被」、「叫」、「讓」、「給」を口語において比較すると、「讓」>「叫」>「給」>「被」のような使用頻度の関係になる。

本稿においては紙幅の関係で詳しく論じることはできないが、通時的調査を通じて、本稿で扱っている新しい「被」の使い方は歴史上に存在しなかったことが分かる。

⁹ 近古になると、「被」を受身記号として用いる用法がたくさん出てきた。「被」式の受身表現はさらに広がっていた。文法構造や意味構成もさらに複雑になった。その時には「被」は受身記号として本流になることを認められた。特に元代には「被」式は最も重要な「受動態」の表現であった。「受動態」には殆ど「被」が付いている。「被」の使用量は「受動態」の表現では最も多くなった。(张延俊 2010『汉语被动式历时研究』 近古汉语被动式)

5 結論

日本語の受身の構造図示に倣って図示すれば、従来の中国語の受身の構造を直観的に理解できるようになると考えた。そして、この方法で研究対象の「被 XX」の構造を探ってみることにした。結果として、この構造は従来の受身とはまったく異なる新しい構造であることが明らかになった。新しい社会状況に対応するために新しい表現を生み出そうとする表現意欲が存在し、その意欲が新表現を生んだことが判明した。それは従来の文法では説明できない新表現なのであった。

この新表現の研究については、社会問題の面からも様々な議論があるものと考えている。本論文では、文法的な分析が中心であったが、今後は、両側面から研究を続けたい。

この新表現は一時的な非文法的な現象としてやがて終息していくのか、それとも真に新しい文法を形成するものとして発展していくのか、今後の展開を見守りたいと思う。

参考文献：

- 今泉喜一 (2005) 『日本語構造伝達文法』 [改訂 05 年版] 揺籃社
- 今泉喜一 (2009) 『日本語態構造の研究 一日本語構造伝達文法 発展 B 一』 晃洋書房
- 亀井孝・河野六郎・千野栄一編 (1996) 「受動態」『言語学大辞典：第 6 卷 術語編』三省堂
- 北京大学中文系 (1982) 1955、1957 級语言班 『现代汉语虚词例释』 商务印书馆
- 方一新 (2001) 『中国近代汉语词汇学』 商務印書館
- 李宗兴、祖生利、丁勇 (2009) 『元代汉语语法研究』 上海教育出版社
- 聂志军 (2008) 「“被”字被动句研究综述」『内江师范学院学报』 第 23 卷第 11 期
- 屈哨兵 (2008) 『现代汉语被动标记研究』 华中师范大学出版社
- 石毓智 (2010) 『汉语语法』 商务印书馆
- 汤玫英 (2009) 「被 XX 格式流行语原因探析」『新闻爱好者』 「上半月」
- 汤玫英 (2010) 『网络语言新探』 河南人民出版社
- 向 熹 (2010) 『简明汉语史』 「修訂本」 商務印書館
- 许少峰 (2008) 『近代汉语大词典』 (全二册) 中华书局
- 张 延 (2010) 『汉语被动式研究』 中国社会科学出版社

日本の女性労働力活用の課題

染谷 真己子

要 旨

問題提起

2012年10月に、日本でIMFの総会が48年ぶりに開催された。その総会にあわせてIMFはWorking Paper “Can Women Save Japan?”¹を発表した。この報告書は日本と大多数のアジア諸国（中国とベトナムを除く）においては労働市場の女性の活用が進んでおらず、潜在的に大きな労働力が残されていることを指摘した。

また、それだけには留まらず、女性初のIMF専務理事として世界中から注目を浴びているクリスティーヌ・ラガルド氏が日本の公共放送に出演し、この報告書の重要性を直接、日本国民に訴えかけたのも記憶に新しい。

日本の女性労働活用が話題になるのは、なにも今回に限ったことではなく、過去に何度も議論されてきた。そして、その都度、女性労働力を活用しようという機運が一時的に高まりを見せるが、その後熱気は長続きせず、結果的に女性の雇用状況が改善されなかった。

また、男女間の雇用の格差を是正するための検討がなされ1986年の男女雇用機会均等法施行（97、99年に改正、2007年改正法施行）に始まり、育児休業法92年施行（のちの育児・介護休業法へ改正）、男女共同参画社会基本法99年施行、次世代育成支援対策推進法2003年施行など多くの法律も制定されている。

法律の整備だけでなく、2007年12月、関係閣僚、経済界・労働界・地方公共団体の合意により、「仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）憲章」・「仕事と生活の調和推進のための行動指針」が策定され、仕事と生活の調和（ワーク・ライフ・バランス）の実現に向け官民一体となって取り組み始めている。また、厚生労働省においては、女性の活躍を推進するポジティブ・アクションを企業や世間に周知、浸透させるため、厚生労働省のHP内に情報ポータルサイトを作成している。

そして、近年政府は内閣府特命大臣（男女共同参画担当）を任命し、女性の労働活

用を後押し、支援をしているが依然として日本の女性の労働参加はわずかな上昇にすぎない。

先進国では1980年代以降、女性の年齢階級別の労働参加率がM字カーブから脱却し、出産を経験した後も国や自治体、企業、そして、家族の援助を受けながら育児をし、現場へ復帰する女性が増加した。日本と同じような状態にあったノルウェー、フィンランドやオランダなどが劇的な変化を遂げ、持続可能な経済成長を続けている点も見逃せない。それに比べて日本は同様の期間、女性の労働活用を進めようと官民それぞれの立場で努力してきたにも関わらず、いまだに女性の労働参加率がM字カーブを描いているのである。

しかも、これから世界の国々に先駆けて急速に高齢化社会を迎える日本では、確実に労働力が不足する。これは紛れもない事実であり、避けては通れない問題である。事実、日本の労働人口は2005年の6870万人をピークに、減少傾向へと転じており、10年に6630万人、20年には6190万人、30年には5680万人まで減ると予想されている²。

このように、日本は高齢化社会へ歩みを進めている一方、女性の晩婚化なども影響し、合計特殊出生率も世界的にみて低い傾向にあり、労働力減少に歯止めがかからないことがより一層顕著にあらわれている。

労働人口の減少はすなわち、その国の経済成長の鈍化にも直結する。労働力を維持しながら、また、持続可能な経済成長を続けることこそが国にとって最重要課題である。そのために、国、企業は本腰を入れて女性の労働活用を進めていかねばならない。海外からの移民を大量に受け入れることで労働力を確保することが難しい日本では、まだ、眠っている女性の労働力を掘り起こし活用することがもっとも合理的である。

また、日本では女性の労働力を活用することだけでなく、雇用したのち、女性を管理職へ昇進させていないという問題が生じている。欧米の先進諸国に比べて日本の企業の女性管理職の割合は隣の韓国と並んで、極めて低水準にある。アメリカ合衆国の例をあげれば、女性の管理職は43%³を超えており、ほぼ男性と同じ水準にある。日本はどのような状況にあるか、およそ10%⁴と大幅に遅れている。

欧米の先進諸国においても上級管理者や企業の進むべき意思決定をする取締役などの女性の割合は男性に比べて、低い状況にはあるが、日本ではそれらの役職についている女性は数%である。先に述べたように、最高経営執行者（CEO）にまで昇進する女性はアメリカでも数少ないが、2012年7月に人々の注目を集めた発表があった。それは、大手インターネット検索サイトグーグルの代表的な経営幹部であったマリッサ・メイヤー氏がライバル企業ヤフーのCEOに就任したことである。しかもこの電撃移籍と同時にメイヤーCEOが妊娠していたことで、経営の立て直しと出産育児の両立ができるのか、さらに注目された。日本でこのような関心を集める企業トップの事例はほぼ皆無である。

なぜ、日本ではこれほどまでに女性の労働活用や昇進が進まないのか。法令や企業内部での取り組みも始まっているが、なかなか裾野が広がらない。その理由はどこにあるのか。日本の女性労働活用を増やすために必要なことは何か、女性の働きやすい状況とは何か、男性と女性の能力に違いがあるのか、なぜ女性は昇進できないのかなどを明らかにし、日本の女性労働活用と昇進問題を考察する。

まず、第1章において、男性と女性のリーダーシップの能力に違いがあるのか INSEAD の教授ハーミア・イバーラ (Herminia Ibarra) とオティリア・オボダル (Otilia Obodaru) の研究から考察する。第2章において、同じくハーミニア・イバーラとカタリスト・リサーチ担当バイス・プレジデントのナンシー M. カーター (Nancy M. Cater)、カタリスト・リサーチ担当ディレクターのクリスティン・シルバ (Christine Silva) が提唱する女性の昇進のために本当に必要な企業制度について考察する。

そして、第3章で日本企業が実際に取り組んでいる女性労働活用、昇進の実態について述べる。そして、どのようにすれば、日本の女性が活躍できるようになるのか結論を述べたい。

第1章 ハーミニア=オティリアの研究

INSEAD 教授のハーミニア・イバーラ⁵とオティリア・オボダルはリーダーの資質のなかで女性にかけているものは何かを探り出すため、同大学が過去5年間行ったエグゼクティブ・プログラム「グローバル・エグゼクティブ・リーダーシップ・インベントリー」(GELI)に参加した149カ国2816人に関する2万2244人の360度評価を実施した⁶。

この評価によって女性はほとんどの項目に高い評価をえており、一部の項目においては男性よりも優れているとさえ評価されていた。しかし、それにもかかわらず、女性のリーダーがリーダーシップを十分に発揮出来ていない現状をどう考えるか。その結果をこの2人の研究者はある項目が低いためであると結論づけた。その項目とは「構想力 (Envisioning)」である。構想力とはビジネス・チャンスや流行を先読みし、他社よりも先に抜き出る戦略を打ち出す非常に重要な能力のことである。彼女達の研究では女性リーダーはこの能力が男性よりも劣っているとされた。

果たして、女性は男性リーダーより本当に構想力が乏しいのか、ハーミニア=オティリアはこの疑問を解決するため、再検証をおこなった。この360度評価に参加した女性の比率は被評価者20%、評価者27%となっている。

表1-1 ハーミニア=オティリアの研究で使われた評価項目と実際の評価一覧

評価項目	自己評価の高い項目	男性による他者評価の高い項目	女性による他者評価の高い項目
構想力	男女差なし	男性	女性
エンパワーメント	男女差なし	男女差なし	男女差なし
勇気づけ	女性	女性	女性
組織デザインと調整	女性	女性	女性
報奨とフィードバック	男女差なし	女性	女性
チーム作り	男女差なし	女性	女性
外向きの姿勢	女性	女性	女性
グローバルな発想	男女差なし	男女差なし	男女差なし
粘り強さ	男女差なし	女性	女性
EQ	女性	女性	女性

出典) ハーミニア・イバーラ、オティリア・オボダル 「女性リーダーに唯一欠けている力」『ハーバード・ビジネス・レビュー』 2009年3月号、115頁。

繰り返しになるが、上記の表にもあるように、女性の評価は相対的に男性よりも高いものとなっており、これまでの他の研究結果と異なり、女性が正当な評価を受けている印象を受ける。それにも関わらず唯一低かったのが構想力である。この構想力の結果が男性よりも低くなった要因は、同僚の男性が女性を評価した際、極めて低い評価をつけたためである。

GELIの評価項目は全てを等しく扱っておらず、一部の項目に重点を置き、傾斜させる方式を採用しており、もっとも多くの評価者が構想力を「リーダーに必要な不可欠な資質である」と考えていた。

この評価結果から見えて来たことは、女性リーダーに対して快く思っていなかったのは同僚の男性であった。女性の敵は女性と言われることも多いが、今回の結果からはそのことは明らかにならなかった。また、同僚の男性でなければ、上司、部下いずれの男性も女性を性別に関わりなく評価している。

なぜ、女性が同僚の男性から構想力の項目でこのように低い評価を受けてしまうのか、3つの仮説が考えられた。

仮説1 女性は男性に劣らない先見性を備えているが、用いる手法が異なる。

仮説2 女性は危ない橋を渡るまいとする。

仮説3 女性はビジョンを重視しない。

これらの仮説をハーミニア=オティリアは順に検証した。その結果、仮説1は女性が男性と異なり、周囲の意見を取り入れ、出来上がったビジョンが部下やそれに関わった人々全ての手によってなされた成果として強調する。そのため、女性リーダーがビジョンを描く際に男性の同僚を仲間に入れることによって、リーダーの貢献が過小評

働かされてしまう恐れがある。

仮説2は女性が仕事をする時、蓄積してきたデータなどを活用し、間違いなく遂行できると思うまで実行しない傾向にある。これが誇張されている可能性が考えられる。

仮説3は女性がビジョンを重要視しないとされるが、ハーミニア＝オティリアも同様の結果を示している。女性は構想力よりも現実的であり、実際に何が可能で、実現可能かを常に考えている。

第2章 ハーミニア＝ナンシー＝クリスティンの研究

先の研究にも参加しているハーミニアは他にも女性の昇進について問題があることを提唱している。それは、女性の昇進に必要な不可欠と考えられてきたメンタリングである。

メンタリング（Mentoring）とは、1980年代頃より提唱された人材育成、指導の方法である。女性やマイノリティーなどが企業内部に必要なスキルを学ぶ手助けをし、昇進に必要な人との繋がりや構築の仕方を教え、上級の管理職へと導くための担当をつける制度である。通常、メンター（Mentor）と呼ばれる男性が、メンティ（Mentee）の女性を指導することが多かった。それは当時、女性がまだ、メンターになれるほど昇進してはおらず、新しく入ってきた女性を指導し支える環境ではなかったからである。メンタリングはその後、多くの企業で取り入れられ、実践されていった。

しかし、このメンター制度が女性を苦しめているとハーミニアは述べている。それは、メンタリングが本社や支社などでそれぞれ独立し多数存在しており、それらすべてに女性は参加しなければならず、仕事以外でも時間的な制約を受ける。メンタリングではそれぞれ同一のことを言われる訳ではなく、それぞれのメンターが感じたことをメンティに伝えるため、正反対のことを指摘される場面も少なくない。

また、男性よりも女性の方が圧倒的に多くのメンターがついているにも関わらず、実際の昇進では男性より遅いという結果が出ている。つまりメンターがついていなくても、結局昇進は男性の方がより早く、より高い地位に進んでいることを意味している。また、企業は将来有望な人材を育成するために、部門、部署間での配置転換などを行うことで、より多くの経験を積ませるが、男性はこの配置転換後、昇進もともなう。しかし、女性は本当に前職と同じ地位で他の部門、部署へ転換がなされるだけである。

そこで、ハーミニアは女性の昇進にメンタリングだけでなく、より必要になるのはスポンサーシップ（Sponsorship）であると述べている。すなわち、メンタリングとスポンサーシップの役割を分けて考えるべきであり、女性の昇進により必要とされるのはスポンサーシップであると結論づけた。

なぜ、昇進にはメンターではなく、スポンサー（Sponsor）が必要なのか。メンターは育成に関わっている人材の評価や助言を与えるだけの存在であり、スポンサーはそれに加えて、メンティをより引き上げようと後押しするために上級管理者たちへ直接的にあるいは、間接的に根回しを行うといった違いがある。そのために、ハーミニアはメンターの役割よりも、女性にはより協力的なスポンサーが必要とした。

ハーミニアは役に立つスポンサーシップの条件を5つあげている。

- ① 社内でメンタリングとスポンサーシップ制度それぞれの求める狙いを明らかにし、それを周知させることで女性が何を欲しているのか、はっきりさせる。また、女性を昇進させるために作られた制度が他のものに変質しないようにする目的もある。
- ② スポンサーとの組み合わせは制度の目的に応じて選択する。すなわち、スポンサーは将来有望な女性に欠けている分野で経験があり、昇進の意思決定会議に参加できるような人物でなければならない。そのような人物でなければ、女性の昇進を助け、後押しすることができないからである。
- ③ 本社と出先の人材育成プログラムを連携させ、直接の上司を巻き込む。これは効果的なスポンサーシップが単独で行われておらず、人事考査や研修・育成、後継者選抜計画などを含む包括的なプログラムの一部として実施されるようにするためである。これらが上手く関連すると、単体での成功よりもより多くの効果を発揮することになる。
- ④ ジェンダーとリーダーシップの複雑な関係をスポンサーに学ばせる。例えば、男性の昇進に役立つ戦術は女性の昇進に必ずしもプラスに働くものではない。女性のロールモデルが存在しない時、あらたに女性がリーダーとして信頼してもらえるスタイルを作り出さなければならない。特に女性がリーダーシップを発揮しようと男性的な振る舞いをしてしまうと、失敗するケースが多い。そのため、女性が違和感の無いリーダーシップスタイルを確立する必要がある。
- ⑤ スポンサーに責任を負わせることである。これは女性の昇進までの期間を設定し、その間にスポンサーがあらゆる手段を講じて、彼女達を昇進にふさわしい人物に育てることである。この期間内に女性が昇進しなければ、その場合は女性自身ではなく、スポンサーの失敗とされる。これは女性を昇進させるのにとっても有効な手段でもある一方、問題も抱えている。それは、期間が限定されている点である。スポンサーが担当した女性を昇進させてしまえば、そこでスポンサーの役割を終え、その女性の後見役を降りてしまい、その先まで目を配る必要がなくなってしまう。実際、昇進して後、ある一定の期間、スポンサーが見守る状況が生まれれば、さらに女性の昇進後の新しい職務への移行がスムーズに行えるであろうとハーミニア達は指摘するのである。

第3章 日本企業の取り組み

IMFのWorking Paperにおいて日本では女性労働力を十分に活用していないという指摘がなされたが、実際企業ではどのように女性を活用しているのか。第3章においては日本企業の女性活用の取り組みについて、考察する。その際、『日経Women』が断続的に行っている女性活用度調査により導きだされた「女性が働きやすい企業ランキング」⁷をもとにその上位企業を取り上げる。

ここ数年の日経Womenの「女性が働きやすい企業ランキング」のトップの座を争っているのは外資系企業の日本IBMとP&Gである。この2社においては、過去の研究⁸においてその取り組みを考察しているため、今回は取り上げない。

この研究では、女性が多く働いている小売業の高島屋と保険業の第一生命、日本生命について、女性の活用の取り組みがどのようになされているのかをみていくこととする。

(1) 高島屋のケース

百貨店事業は、顧客の大半が女性であることから、男性よりも女性が多い職種である。そのような事業環境において、高島屋が女性の活用をさらに進めるため、特に力を入れて取り組んでいるのが、ワーク・ライフ・バランスである。

高島屋は、2008年に厚生労働省が立ち上げた「仕事と生活の調和推進プロジェクト」に日経済団体連合会推薦の10社のなかに選ばれ、他の企業に率先して、ワーク・ライフ・バランスの是正を推進してきた。

その成果が評価され、2011年に厚生労働省が「女性労働者の能力発揮を促進するための積極的な取組（ポジティブ・アクション）」や「仕事と育児・介護との両立支援のための取組」について、他の模範ともいべき取組みを推進している企業を表彰する「均等・両立推進企業表彰」において、厚生労働大臣最優良賞を受賞している。

同社は、男女の性別による区分を無くした人材育成に取り組んでおり、採用・給与・昇進・職務・配置・定年など全て男女同一条件となっている。2001年からの3年間は「男女共同参画型企業」に向けて取り組み、現在は性別に関わらず能力重視の育成、職場配置を行っている。その結果、マネジャーやバイヤーといった百貨店の基幹業務における女性比率は下記の表のように年々高まりをみせている。しかし、それでも現在役員職には2名の女性が登用されているに過ぎない。

また、高島屋では、入社後10年間の人材育成の一環として、「メンター制度」を導入している。入社4年目のメンティを所属が異なる部門の入社10年目前後のメンターが指導することにより、様々な状況に臨機応変に対応出来る人材の育成を目指している。

また、女性の育児休暇取得だけでなく、男性の育児休暇取得も奨励しており、2007年16人、08年15人、09年4人、10年18人、11年11人、12年2人（2012年5月15日時点）がそれぞれ取得した⁹。

表3-1 高島屋における女性従業員比率

	2008年	2009年	2010年	2011年	2012年
マネジャー職	22.20%	25.20%	26.70%	24.40%	24.20%
バイヤー	32.70%	32.80%	33.50%	34.50%	38.90%
係長以上の 役職者	29.30%	30.60%	32.90%	35.40%	38.40%
全体	46.80%	47.30%	48.30%	49.90%	52.20%

（出典）高島屋 HP「女性比率」タカシヤマ CSR、目的別 INDEX、従業員 2012年10月22日
<http://www.takashimaya.co.jp/corp/csr/search/employee/positive.html#pLinkEmployee10>

（2）第一生命保険のケース

保険業界も百貨店業界と同様に、女性が多い職場である。そのため、女性の能力を掘り起こし、活用することは企業にとっても大きく成長を見込めるため、有望な策として位置づけられている。

第一生命保険は、ダイバーシティ・インクルージョンという考え方を軸に女性の活用を進めている。この取り組みが評価され、2012年5月に東洋経済新報社の第5回ダイバーシティ経営大賞を受賞している¹⁰。

第一生命保険では、社内全てにダイバーシティ推進の取り組みを根付かせるため、実効ある取り組みを進められるよう女性アシスタント・マネジャーを中心にダイバーシティ推進者と所属を統括する管理職をダイバーシティ推進責任者として任命した。

さらに、2011年度より新たに「ブロック・リーダー」を任命し、ダイバーシティ推進者の相談役（メンター）としてきめ細かい活動フォローを行っている。

そして、さらなる女性の活躍推進に向けて、キャリア・アップを目指す女性職員を支援するための取り組みであるポジティブ・アクションを取り入れている。ポジティブ・アクションの具体的な支援策は、自らチャレンジするための体系的な能力開発プログラムの作成、キャリア・アップに向けた支援をしている。

また、第一生命保険は社員が自律的にキャリア・ビジョンを描き、より付加価値の高い新たな職務へのチャレンジを支援する取り組みとして、キャリア・サポート・プログラムを行っている。とくに女性社員が視野拡大を図り、多様な職務展開ができる

ようキャリア・チャレンジ制度と社内外トレーニー制度を取り入れている。

表3-2 第一生命保険の女性管理職の割合

	女性職員数	女性の占める割合
経営管理職	9人	1.50%
管理職	649人	17.60%
アシスタント・マネジャー	3731人	74.30%

(出典) 第一生命保険 HP「多様な人材が活躍する職場作り」DSR 経営、従業員
2012年10月22日

<http://www.dai-ichi-life.co.jp/company/dsr/employee/diversity/index.html>

キャリア・チャレンジ制度は自立的に新しい職務にチャレンジしようとする社員に対し、職務を明示して公募する制度で、2008年度以降、毎年度40名を超すエリア社員が自らの希望によって実際に新しい職務に転換していく青銅である。もう一つの社内外トレーニー制度は、キャリア・サポート・プログラムの一環として社内・社外に短期間留学することにより業務知識や幅広い視野を醸成する制度である。

上記の表にあるように、女性を活用するためにポジティブ・アクションやキャリア・サポートを積極的に行う一方、経営そのものに関わる女性の人材はまだ少ないといえる。

(3) 日本生命のケース

日本生命も第一生命保険と同様、女性社員が多い企業である。同社は多くの女性社員が全国各地で活躍し、社員一人ひとりが輝き、イキイキと仕事をすることで会社も個人も成長し続ける企業であることを目指し、2008年に「輝き推進室」を設立した。「輝き推進室」を中心として各種支援制度の充実やセミナー等を通じて、社員の仕事と家庭の両立や、キャリア・アップのためのサポートを行っている。

女性のキャリア・アップ支援は2011年の人事制度改正により、女性内務社員の活躍の場が保険事務中心から多彩なフィールドへと広がった。そのため、新たなフィールドで活躍している女性職員や、女性管理者の体験談などを聞く機会の提供している。また、社内ホームページにて毎月「輝きウーマン」として全国で活躍する職員を紹介することで、新しい情報を発信している。

そして、女性管理職情報交換会を実施し、全国の女性管理職が一同に会し、通常の業務では構築することが難しい女性同士のコミュニケーション・ネットワーク構築を促す。また、この情報交換会は更なる女性活躍推進に向け、後任育成や職場内の活性化等をテーマに議論を交わし、会社への提言を行っている。

また、営業職員であるトータル・パートナーを含めると、女性の占有率が約9割近くを占める日本生命にとって、女性の活躍は必要不可欠である。このような認識のもと、女性職員の上位役職登用をすすめ、様々な分野で女性の部長・課長が活躍している状況を作り出している。

近年同社は、特に毎年課長相当職への積極的な登用を実施していることに加え、既に多方面で活躍をしている課長補佐・業務主任層については、今後を支える将来の課長候補としての意識醸成・育成を図っており、これからも継続的に女性管理職を輩出できる風土・土壌が徐々に築かれつつある。

また、「輝き推進室」を中心とした、女性のキャリア・アップに向けた更なる風土醸成等の取組を引き続き実施していくことにより一層、女性を積極的に登用する方針を固めている。

そして、ワーク・ライフ・バランスの実現に向けた取組として、家族や地域を取り巻く環境の変化に伴い、女性職員のみならず、男性職員にとっても仕事と生活の調和を図りながら、働き続けていく環境づくりが求められる。こうしたことをふまえて、ワーク・ライフ・バランスの考え方を理解することを目的に、新任役付者研修会や社外講師によるセミナー等を開催している。

日本生命も女性の活用を進めているが、取締役や執行役員クラスの人事になると女性の登用は進んでいない。このように上位職が女性にとってのガラス・シーリング(ガラスの天井)とならないように、各企業も努力を続けていかなければならないが、道半ばといえる。

アメリカでは1980年代に大きく取り上げられたガラス・シーリング論であるが、日本ではあまり問題となっていない。それは、未だに女性が管理職にすらつけないためと思われる。それだけでなく、性別役割分担の意識が根強い日本において、女性は結婚したら家庭に入るといった認識が変わっていないのではないかと。女性の昇進の壁を取り払うべく努力はなされてきたが、あまり変わっていない。

これからの労働人口の減少はIMFの報告書でも指摘されている通りであるが、さらなる日本には女性の活躍の場の提供が重視されなければならない。

結論

IMFの報告書やラガルド専務理事の直接の訴えにもあったように、日本は女性の雇用がなぜ増えないのか、また、女性の能力を生かす方針が取られないのか、管理職はなぜ少ないのかという問題を考察してきた。

女性管理職はアメリカなどでは50%近い状態であるが、日本では10%弱である。この点を見ても日本は女性の管理職が少ないという事実が変わりない。そして、管理

職や上級役員へ登るために必要な素質は何かについて考えて来たのが、第1章のハーミニア=オティリアの研究であった。欧米でも上級役員やCEOなど企業のトップに登ることは女性にとって、険しい道になり、なかなかたどり着くことが難しい。

その理由として、ハーミニア=オティリアは企業が行くべき道筋を描くための「構想力」が女性には足りないと結論づけた。その他の指標で男性よりもよい結果を残しても、この「構想力」が足りないため、他の全ての能力が帳消しにされてしまうという。すなわち構想力とは、未来を指し示すビジョンであり、女性はこのビジョンをあまり重要視せず、目先のことにとらわれがちになるという。そのため、彼女らは「先見性を磨き、それを強みにするリーダー」に女性に変貌していくことが必要であると結論づけた。

また、第2章では、同じくハーミニア=ナンシー=クリスティンの研究から、それまで企業内部で女性の昇進と社内のパイプ作りに有効とされてきたメンタリングが、実は女性にとって足かせになっている事実を明らかにした。そして、本当に女性に必要なのは、メンタリングではなく、スポンサーシップであるとした。それは、女性の心理的・社会的サポートとキャリア面でのサポートをするメンタリングよりも昇進のために積極的に女性を推薦するスポンサーの方が昇進には必要である。

そして、第3章において、日本企業の実際の取り組みを考察した。日本企業は問題提起でも述べたように政府が制定してきた様々な法律や制度に則り、女性を雇用し、働きやすい環境を整え、少しずつ昇進の機会を与えるようになっている。これらの法律や制度は女性労働の門戸を開くには、威力を発揮しているが、その後の女性労働力の活用までは十分に受け切れていない。女性を雇用するための制度だけでなく、これからは活用の方に重点を移す時期に来ている。また、若い女性のロールモデルとなれる、管理職、上級職への道筋も早急に策定しなければならない。

また、日本の場合、『日経 Women』のアンケートに女性は「将来管理職になりたくない」という回答が全体の46.2%を占めた。その理由として最も多いのが「自分は向いていないから」というもので、全体の25.2%を占めているという記述がある。

国立社会保障・人口問題研究所が2008年に実施した「第4回全国家庭動向調査」の結果では、結婚後は専業主婦に専念すべきと考えている女性が増えている。企業内部で女性の活用が進む一方で、管理職へ上がりたくない、結婚後は会社を辞めて家庭に入りたいという女性との間で大きな隔たりも生じており、女性の意識改革も企業は同時に進める必要がある。

¹ Chad Steinberg and Masato Nakane (2012) Can Women Save Japan(and Asia Too)? IMF Working Paper <http://www.imf.org/external/pubs/ft/wp/2012/wp12248.pdf> 2012年10月20日

² 朝日新聞デジタル「日本の労働力、2030年に950万人減厚生労働省試算」経済 2012年7月23日版 <http://www.asahi.com/business/update/0723/TKY201207230115.html>

³ ILO “LABORSTA” 2008

⁴ 厚生労働省 「平成23年度雇用均等基本調査の概要」2012年 <http://www.mhlw.go.jp/toukei/list/dl/71-23r-05.pdf>

⁵ Herminia Ibarra (ハーミニア・イバーラ) INSEAD コーラ・チェアード記念教授、専攻は組織行動学である。INSEADに在籍する前はハーバード・ビジネス・スクールで教鞭をとっていた。主な著書は Working Identity: Unconventional Strategies for Reinventing Your Career, Harvard Business School Press, 2002. 邦訳『ハーバード流キャリアチェンジ術』翔泳社、2003年がある。

⁶ INSEADの360度評価に使われているのは「グローバル・エグゼクティブ・リーダーシップ・インベントリー」(GELI)と呼ばれ、INSEADのグローバル・リーダーシップ・センターのマンフレッド・ケッツ・ド・プリース、ピエール・プリニョー、エリザベス・フロレント＝トレイシーによって考案された。

GELIの項目は構想力＝さまざまな文化や視点にもとづきビジョン、ミッション戦略を掲げる。リーダーシップを發揮する上でもっとも重要視されている項目と位置づけられることがもっとも多い。チーム作り＝協力的な組織を作り上げる。エンパワーメント＝部下への権限委譲や情報共有。外向きの姿勢＝社外のステークホルダーとの良好な関係構築。勇気づけ＝モチベーションを高める。グローバルな発想＝グローバルな考え方を組織に根付かせる。組織デザインと調整＝管理システムの構築により、社員の足並みを揃える。粘り強さ＝部下にある一定のリスクを負わせ、粘り強さと勇気を育成する。奨励とフィードバック＝適切な奨励制度とフィードバック。EQ＝人材の心の知能指数を高める。以下の2点はハーミニア＝オティリアの研究では使われていないがGELIには含まれるのは、ワーク・ライフ・バランスとストレス耐性の項目である。

⁷ 『日経 Woman』は1988年の創刊以来、断続的に「企業の女性活用度調査」を行っている。今回、その調査の2012年度版ランキングを参照に、3社を選び出した。

女性活用度調査は2012年1月～2月中旬に上場企業など国内有力企業4316社を対象に日経BPコンサルティングが実施したもので、そのなかで450社が回答をしている。

このランキングは(1)管理職登用度：管理職(課長職以上)の女性の割合や、女性役員の有無など(2)ワークライフバランス度：年間総労働時間や有給休暇取得率、育児休業取得率など(3)女性活用度：女性活用やダイバーシティ推進、ワークライフバランス推進のための専任組織の有無、女性社員対象の研修制度の有無など(4)男女均等度：女性社員の割合や男性社員と女性社員の勤続年数の均等度など——の4つの指標に分けて測定し、それぞれの上位企業ならびに総合順位を発表している。

⁸ 染谷真己子 「日本における女性労働活用の展望と課題－カンター研究からの考察－」『杏林大学大学院論文集』3号 2006年

⁹ 高島屋 HP 「男性の育児休暇取得者」タカシマヤのCSR目的別INDEX 従業員 <http://www.takashimaya.co.jp/corp/csr/search/employee/support.html#pLinkEmployee13> 2012年10月22日

¹⁰ 第一生命 HP 「いちばん、従業員の活気あふれる会社」DSRレポート2012 http://www.dai-ichi-life.co.jp/company/dsr/report/2012/pdf/index_011.pdf 2012年10月22日

参考文献

Herminia Ibarra, Otilia Obodaru (2009). Women and the Vision Thing. *Harvard Business Review* (9) ハーミニア・イバーラ、オティリア・オボタル 「女性リーダーに唯一欠けている力」『Diamond ハーバード・ビジネス・レビュー』3月号、2009年。

Herminia Ibarra, Nancy M. Carter, Christine Silva (2010). Why Men Still Get More Promotions Than Women. *Harvard Business Review* (9) ハーミニア・イバーラ、ナンシー M. カーター、クリスティン・シルバ 「メンタリングでは女性リーダーは生まれにくい」『Diamond ハーバード・ビジネス・レビュー』3月号、2011年。

トーマス J. デロング、ジョン J. ガバロ、ロバート J. リーズ 「メンタリングの原点」

『Daiiamond ハーバード・ビジネス・レビュー』 3月号、2008年
Alice H.Eagly, Linda L.Carli “*Through the Labyrinth,*” Harvard Business School Press,2007.

日経 Women 編「一生仕事で困らない！ 幸せな働き方大研究」 6月号、2012年.

日本経済新聞 「経営改革・出産の両立なるか」 海外メディア 2012年7月22日付 朝刊

日本生命 HP 「従業員について」 日本生命について > CSR > 従業員 2012年10月23日

<http://www.nissay.co.jp/kaisha/csr/jugyoin/#anc02>

U.S.Glass Ceiling Commission *Glass Ceiling Commission - Good for Business: Making Full Use of the Nation's Human Capita*, Cornell University ILR School DigitalCommons@ILR.2010年10月20日

http://digitalcommons.ilr.cornell.edu/cgi/viewcontent.cgi?article=1118&context=key_workplace&sei-redir=1&referer=http%3A%2F%2Fwww.google.co.jp%2Furl%3Fsa%3Dt%26rct%3Dj%26q%3Dglass%2520ceiling%2520commission%2520good%2520for%2520business%26source%3Dweb%26cd%3D1%26ved%3D0CDAQFjAA%26url%3Dhttp%253A%252F%252Fdigitalcommons.ilr.cornell.edu%252Fcgi%252Fviewcontent.cgi%253Farticle%253D1118%2526context%253Dkey_workplace%26ei%3D7NnzUOvbO9CZkgXR4YCADg%26usg%3DAFQjCNHmgFoJ3B6vewE3cNA0wTfRM29GRQ#search=%22glass%20ceiling%20commission%20good%20business%22

日本語構造伝達文法の中国語への適用

——述目句の研究——

蔣 家義

要 旨

「日本語構造伝達文法の中国語への適用」という研究の一環として、本稿は述目句の構造モデルの描出を試みた。まずは、述目句の述語と目的語との意味関係の多様性を論じた。次に、述目句の述語となる動詞の格フレームを取り上げた。出現頻度の高い、或いは日本語に比べれば、特徴のある二項動詞の格フレームのタイプを整理してまとめた。その上で、それらの格フレームのタイプ（紙幅の関係で本稿は7タイプのみを扱った）を持つ二項動詞が構成した述目句の構造モデルを描出した。

キーワード：述目句、格フレーム、深層格、日本語構造伝達文法、構造モデル

1 はじめに

本稿は「日本語構造伝達文法の中国語への適用」という研究の一環である。前稿「日本語構造伝達文法の中国語への適用—予備的考察—」（蔣 2012a）では、研究の目的、考察の対象、日本語構造伝達文法の基礎（構造モデル、時空モデル）等を論じた。「日本語構造伝達文法の中国語への適用—主述句の記述的研究—」（蔣 2012b）では、主述句の記述的研究を行い、主述句の構造モデルの描出を試みた。前稿に続いて、本稿では、述目句について考察を行う。日本語構造伝達文法との関係等については、前稿をご参照いただければ幸いである。

本稿の2節では、述目句の定義を述べ、3節では、述目句の述語と目的語との意味関係の多様性を論じる。4節では、述目句の述語となる動詞の格フレームを取り上げる。5節では、出現頻度の高い、或いは日本語に比べれば、特徴のある二項動詞の格フレームのタイプを整理し、それらの格フレームのタイプを持つ二項動詞が構成した述目句の構造モデルを考察する。

2 述目句とは

述目句は (1)¹ に示すように、“述語—宾语”（述語—目的語）という文法関係で結合した句である。一般に述目句の前の部分は動作や行為、状態を表す単語² または句³（述語）であり、後の部分はこの動作や行為、状態と関連のある事物を表す単語または句（目的語）である。

- (1) a 洗 衣服⁴ (服を洗う)
洗う 服
- b 画 人像 (肖像を描く)
描く 肖像
- c 去 学校 (学校へ行く)
行く 学校
- d 抽 烟斗 (パイプでタバコを吸う)
吸う パイプ
- e 下 大雪 (大雪が降る)
降る 大雪
- f 是 学生 (学生だ)
だ 学生
- g 教 我 外语 (私に外国語を教える)
教える 私 外国語

述目句は“述宾短语”や“述宾词组”の日本語の訳語である。この構造は1980年前後までは“动宾短语”や“动宾词组”とも呼ばれていた。鳥井（2008：237）によれば、“动宾”の“动”は品詞名の“动词”（動詞）を、“宾”は文成分名の“宾语”（目的語）を用いていて、論理的でないので、文成分名の“述語”（述語）と同じ文成分名の“宾语”から“述宾”という語を用いるようになったということである。

3 述目句における述語と目的語との意味関係

日本語では目的語は「本を読む」の「本を」、「医者を呼ぶ」の「医者を」等のように、「述語の表わす行為・動作の対象となり、その行為・動作を蒙るもの、という意味の関係にあって、それを示すことによって述語の意義を充足せしめるもの。（中略）

¹ 本稿の例文は主に《(人机通用) 现代汉语动词大词典》、《汉语动词用法词典》、《HSK 中国汉语水平考试词汇大纲汉语 8000 词词典》、《商务馆学汉语词典》から引用した。“★”の付いた例文はほかの参考文献から引用した。

² 品詞は動詞であると考えられる。

³ 動詞句であると考えられる。

⁴ 以下、“ ”（一重下線）で述語を示し、“ ”（波線）で目的語を示す。

形態上は連用格助詞の「を」によって示されるのが普通である」とされている（渡辺 1971：165）。

これに対して、中国語では目的語（即ち“宾语”）は述語の後にあり、述語の表す動作や行為、状態と関連のある事物を表すものとされている。このような目的語と述語は「行為・動作を蒙るもの」とどまらず、多種多様な意味関係にある。

例えば、上に挙げた（1）のうち、aでは目的語“衣服”が述語“洗”の表す行為の「受事」（自発的な動作、行為に関わる直接の客体である）であり、bでは目的語“人像”が述語“画”の表す行為の「結果」（生じたり、引き起こしたり、或いは達成したりする事物である）であり、cでは目的語“学校”が述語“去”の表す行為の「処所」（事態の起こる場所や状況、或いは経過域である）であり、dでは目的語“烟斗”が述語“抽”の表す行為の「工具」（使われる道具である）であり、eでは目的語“大雪”が述語“下”の表す動作の「施事」（自発的な動作、行為、或いは状態の主体である）であり、fでは目的語“学生”が述語“是”の表す状態の「系事1」（主体の類別や身分、役割で、動詞“是”（…だ），“姓”（姓は…である），“叫”（（名前は）…という），“等于”（…に等しい）等の表す事態の客体である）である。gでは間接目的語“我”と直接目的語“外语”がそれぞれ述語“教”の表す行為の「与事」（利害関係を有する間接の客体である）と「受事」である。

（2）に示すように、「受事」、「結果」、「処所」、「工具」、「施事」、「系事1」、「与事」のほか、「方式」（用いられる方法や形式である）、「目的」（達成しようとする目標である）、「時間」（事態の起こる時点、或いは持続する期間である）等の意味関係もある。（2）のaでは“仿宋体”が“写”の「方式」であり、bでは“博士”が“考”の「目的」であり、cでは“春节”が“过”の「時間」であると考えられる。

- (2) a 写 仿宋体 （宋朝体で書く）
 書く 宋朝体
- b 考 博士 （博士後期課程を受験する）
 受験する 博士後期課程
- c 过 春节 （春節を過ごす）
 過ごす 春節

このように、中国語の目的語と述語との意味関係は多種多様である。その原因として、以下のことが考えられる。①日本語では一般に格助詞「を」を伴うか否かによって、目的語は規定されている。これと同時に、目的語の範囲も制限されている。中国語では目的語、即ち“宾语”は述語の後にあるという語順によって、規定されている。語順が無標的で、語彙的意味を持たないので、“宾语”の範囲は制限されない。したがって、②中国語文法での“宾语”という概念は日本語文法での目的語という概念より外

延が広い。前者は上に述べたように、述語の表す動作や行為、状態と関連のある「受事」、「結果」、「処所」、「工具」、「施事」、「系事」、「与事」、「方式」、「目的」、「時間」等を表しており、「行為・動作を蒙るもの」（「受事」にあたる）を表す後者に対して上位概念であると言えよう⁵。

4 動詞の格フレーム

こうした目的語と述語との意味関係は格文法で言う、述語となる動詞または動詞句に対して目的語となる単語または句の深層格にあたる。本節から述日句の目的語（及び主語）となる単語または句の深層格を考察するが、まず述語となる動詞の格フレームを取り上げる。

動詞の選択できる深層格には、動詞の表す事態の成立に必ず必要なものとそうでないものがある。例えば(3)では、動詞“洗”に対して名詞“我”、“明天”、“被罩”の深層格はそれぞれ「施事」、「時間」、「受事」である。そのうち、「施事」と「受事」は動詞“洗”の必ず必要な深層格であり、「時間」は必ずしも必要でない深層格である。

(3)	我	明天	洗	被罩	(明日、布団カバーを洗う)
	私	明日	洗う	布団カバー	
	施事	時間		受事	

動詞とその動詞の表す事態の成立に必ず必要な深層格はいわゆる格フレームを構成している。(3)の動詞“洗”と深層格「施事」、「受事」は「施事+“洗”(洗う)+受事」という格フレームを構成している。

そして、すべての動詞がそれぞれ格フレームを持つが、動詞の性質、必ず必要な深層格の種類及び数によって、それらの格フレームをいくつかのタイプに分類することができる。例えば(4a)の動詞“打”が「施事+“打”(殴る)+受事」という格フレームを持ち、(4b)の動詞“踢”が「施事+“踢”(ける)+受事」という格フレームを持つが、「施事+“打”(殴る)+受事」、「施事+“踢”(ける)+受事」、(3)の「施事+“洗”(洗う)+受事」は3つの動詞の性質（自発的な行為を表すこと等）、必ず必要な深層格の種類（「施事」と「受事」）及び数（2つ）が同じであると考えられる。したがって、「施事+“打”(殴る)+受事」、「施事+“踢”(ける)+受事」、「施事+“洗”(洗う)+受事」を「施事+動詞（自発的な行為を表すこと等）+受事」という格フレームのタイプに分類することができる。

⁵ 両言語の根本的な違いを考えに入れば、中国語文法での“宾语”と日本語文法での目的語とは別の概念であると言っても過言ではないであろう。

- (4) a 哥哥 打 弟弟 (兄が弟を殴る)
 兄 殴る 弟
 施事 受事
- b 运动员 踢 球 (スポーツマンがボールをける)
 スポーツマン ける ボール
 施事 受事

格フレームのタイプは数多くある。例えば《(人机通用) 現代汉语动词大词典》(林・王・孫 (編) 1994) は 2000 個余りの動詞の格フレームを詳細に記述した上で、表 1 に示すように、それらの格フレームを 53 タイプに分類している (V = 動詞)。

表 1 格フレームの 53 タイプ (林・王・孫 (編) 1994 : 31-34)

一、一項動詞の格フレーム	
1. (V : 一項動詞であり、自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ばない)	
< 1 > 施事 + V	
2. (V : 一項動詞であり、非自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ばない)	
< 2 > 当事 + V	
二、二項動詞の格フレーム	
3. (V : 二項動詞であり、自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ぶ)	
< 3 > 施事 + V + 受事	< 4 > 施事 + V + 結果
< 5 > 施事 + V + 受事または系事	< 6 > 施事 + V + 受事または工具
< 7 > 施事 + V + 処所または受事	< 8 > 施事 + V + 受事または方向
< 9 > 施事 + V + 受事または範囲	< 10 > 施事 + V + 受事または結果
< 11 > 施事 + V + 受事または処所	< 12 > 施事 + V + 受事または目的
< 13 > 施事 + V + 受事または与事	
4. (V : 二項動詞であり、自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ばない)	
< 14 > 施事 + V + 同事	< 15 > 施事 + V + 原因
< 16 > 施事 + V + 与事	< 17 > 施事 + V + 系事
< 18 > 施事 + V + 目的	< 19 > 施事 + V + 依拠
< 20 > 施事 + 工具 + V	< 21 > 施事 + V + 工具
< 22 > 施事 + V + 時間	< 23 > 施事 + V + 方式
< 24 > 施事 + V + 範囲	< 25 > 施事 + V + 処所
< 26 > 施事 + V + 処所または時間	< 27 > 処所 + V + 施事
5. (V : 二項動詞であり、非自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ぶ)	
< 28 > 当事 + V + 受事	< 29 > 当事 + V + 結果
< 30 > 当事 + V + 客事	< 31 > 当事 + V + 客事または処所
< 32 > 処所 + V + 客事	
6. (V : 二項動詞であり、非自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ばない)	
< 33 > 当事 + V + 範囲	< 34 > 当事 + V + 工具
< 35 > 当事 + V + 数量	< 36 > 当事 + V + 処所
< 37 > 処所 + V + 当事	< 38 > 時間または処所 + V + 当事
7. (V : 二項動詞であり、所有・所属を表す)	
< 39 > 領事 + V + 客事	< 40 > 領事 + V + 分事

< 41 > 領事 + V + 客事または分事	< 42 > 客事 + V + 領事
< 43 > 分事 + V + 領事	
8. (V : 二項動詞であり、繫辞にあたる)	
< 44 > 当事 + V + 客事	< 45 > 当事 + V + 系事
三、三項動詞の格フレーム	
9. (V : 三項動詞であり、自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ぶ)	
< 46 > 施事 + V + 与事 + 受事	< 47 > 施事 + V + 受事 + 与事
< 48 > 施事 + 与事 + V + 受事	< 49 > 施事 + V + 受事 + 系事
< 50 > 施事 + V + 受事 + 範囲	< 51 > 施事 + 受事 + V + 材料または工具
< 52 > 施事 + V + 与事 + 結果	< 53 > 施事 + 同事 + V + 結果

こうした格フレーム（のタイプ）は動詞の性質、必ず必要な深層格の種類及び数を示してくれる一方、その配列が深層格を付与される語句と動詞の構成する句または文の基本的な語順を示してくれる。例えば4.の「< 25 > 施事 + V + 処所」は動詞の性質（二項動詞であり、自発的な事態を表し、その事態が直接他に及ばない）、必ず必要な深層格の種類（「施事」と「処所」）及び数（2つ）を示してくれる一方、その配列が「〔施事〕を付与される語句 + 動詞 + 「処所」を付与される語句」という句または文の語順を示してくれる。

また、「< 5 > 施事 + V + 受事または系事」というタイプの格フレームにおいては、深層格は施事と受事の2つ、または施事と系事（=系事2（主体の類別や身分、役割で、動詞“扮演”（扮する）、“担任”（担任する）、“当”（務める）等の表す事態の客体である。例えば“她彼女 扮演扮する 白毛女白毛女”（彼女が白毛女の役を務める）の“白毛女”である）の2つである。深層格が施事と受事である場合と、深層格が施事と系事である場合とでは、その動詞の意味が少し異なる。例えば動詞“演”（演じる）はこのようなものである。“演”は深層格が施事と受事である場合、劇、映画等の芸能を行うことを表し（5a）、深層格が施事と系事である場合、劇、映画等で、ある役を務めることを表す（5b）。

- (5) a 学生 演 喜劇 (学生が喜劇を演じる)
学生 演じる 喜劇
 施事 受事
- b 他 演 哈姆雷特 (彼がハムレットを演じる)
彼 演じる ハムレット
 施事 系事

ただし、一般に辞書では、「劇、映画等の芸能を行うこと」と「劇、映画等で、ある役を務めること」が動詞“演”の同じ“义项”（見出しの下に意味によって配列した項目）に置かれており、この“义项”が「劇、映画等の芸能を行う。また、その中

で、ある役を務める」というふうに記述されている。即ち、施事と受事という深層格を持ち、劇、映画等の芸能を行うことを表す“演”と、施事と系事という深層格を持ち、劇、映画等で、ある役を務めることを表す“演”とは同一の動詞であると考えられている。「<6>施事+V+受事または工具」、「<26>施事+V+処所または時間」等に関しても、同じことが言える。

5 述目句の深層格と構造モデル

本節では、二項動詞の述目句の深層格と構造モデル⁶を考察する。まずは林・王・孫（編）（1994）の《（人机通用）现代汉语动词大词典》、孟・鄭・孟・蔡（1999）の《汉语动词用法词典》、及び筆者の考察に基づいて、出現頻度の高い、或いは（日本語に比べれば）特徴のある二項動詞の格フレームのタイプを整理してまとめておく（表2）。

表2 出現頻度の高い、或いは特徴のある格フレームのタイプ

施事+V+受事	施事+V+結果	施事+V+処所	施事+V+系事2
施事+V+同事	施事+V+目的	施事+V+原因	施事+V+工具
施事+V+方式	施事+V+時間	当事1+V+客事1	当事1+V+結果
当事1+V+処所	処所+V+当事1	当事2+V+系事1	領事+V+客事2

注：

同事＝相手にされ、或いは除外される間接の客体である。例えば“我_私 联络_{連絡を取る} 了几个_{いくつ} 同学_{同級生}”（私が数人の同級生と連絡を取った）の“几个同学”である。

原因＝事態を引き起こす原因である。例えば“老太太_{おばあさん} 愁_{心配する} 路费_{旅費}”（おばあさんが旅費を心配する）の“路费”である。

当事1＝動詞“是”、“姓”、“叫”、“等于”等の表す事態以外の非自発的な動作、行為、或いは状態の主体である。例えば“我_私 碰见_{出会う} 一个_{一つ} 老_{古い} 朋友_{友人}”（私が古くからの友人に出会う）の“我”である。

客事1＝非自発的な動作、行為に関わる直接の客体である。例えば“我_私 碰见_{出会う} 一个_{一つ} 老_{古い} 朋友_{友人}”（私が古くからの友人に出会う）の“一个老朋友”である。

当事2＝動詞“是”、“姓”、“叫”、“等于”等の表す事態の主体である。例えば“我_私 是_だ 学生_{学生}”（私が学生だ）の“我”である。

領事＝所有・所属関係を有する主体である。例えば“我_私 有_{ある} 一本_{一冊} 书_本”（私が一冊の本を持っている）の“我”である。

客事2＝領事の持つ客事である。例えば“我_私 有_{ある} 一本_{一冊} 书_本”（私が一冊の本を持っている）の“一本书”である。

⁶ 構造モデルに関しては、今泉（2012: 1-102）、蔣（2012a）の5.1節を参照。

次に、表2の格フレームのタイプを持つ二項動詞が構成した述目句を具体的に考察したいが、紙幅の関係で「施事+V+受事」、「施事+V+結果」、「施事+V+処所」、「施事+V+工具」、「施事+V+方式」、「当事1+V+客事1」、「処所+V+当事1」⁷のみを扱う。

5.1 施事+V+受事

「施事+V+受事」というタイプの格フレームを持つ動詞は“穿”（着る），“打”（殴る），“卖”（売る），“扔”（捨てる），“踢”（ける），“洗”（洗う），“喜欢”（好む），“修理”（修理する），“掩盖”（覆う），“阅读”（読む）のような自発的な事態を表す二項動詞である。このような動詞は“動詞B+語句C”という形の述目句を構成し、その上で“語句A || 動詞B+語句C”⁸という形の動詞性主述句を構成することができる。例えば(6)である。

- (6) 語句A || 動詞B+語句C
- a 哥哥 || 打 弟弟 (兄が弟を殴る) (= 4 a)
- 兄 殴る 弟
- b 小蔡 || 喜欢 交响乐 (蔡さんが交響楽を好む)
- 蔡さん 好む 交響楽

そして、「施事+V+受事」という配列が深層格を付与される語句と動詞の構成した句または文の基本的な語順を示すので、この“語句A || 動詞B+語句C”では、語句Aの付与される深層格は施事となり、語句Cの付与される深層格は受事となると考えられる。例えば(6a)の“哥哥”と(6b)の“小蔡”の深層格は施事であり、(6a)の“弟弟”と(6b)の“交响乐”の深層格は受事である。

ここでは、「施事+V+受事」というタイプの格フレームを持つ動詞が構成した述目句と、それを含んだ主述句の構造モデルを図1のように描出する。図1aは述目句の構造モデルであり、図1bはそれを含んだ主述句の構造モデルである。

⁷ 表2に書いてある16タイプの格フレームは出現頻度の高い、或いは（日本語に比べれば）特徴のあるものであるが、紙幅の関係で最も出現頻度の高い3タイプ「施事+V+受事」、「施事+V+結果」、「当事1+V+客事1」と、最も特徴のあると考えられる「施事+V+処所」、「施事+V+工具」、「施事+V+方式」、「処所+V+当事1」を選んで考察する。

⁸ 以下，“||”（縦二重線）で主語と述語部分との境界を示す。

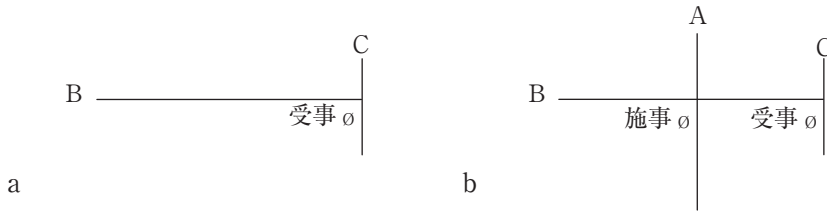


図1 「施事+V+受事」を持つ動詞が構成する述目句と主述句の構造モデル

この構造モデルでは、水平線が動詞 B の表す属性 “B” を示し、水平線と十字をなして交差している垂直線が語句 A のさす対象である主体 “A” を示し、水平線と横倒れの T 字をなして接している垂直線が語句 C のさす対象である客体 “C” を示す。水平線と垂直線との交点のところに書いた “施事₀” が語句 A の深層格「施事」を示し、水平線と垂直線との接点のところに書いた “受事₀” が語句 C の深層格「受事」を示す。“施事₀” と “受事₀” の “₀” は深層格に対応する表層格が無標的であることを意味する。

具体例 (6) の構造モデルならば、図2のようになる。

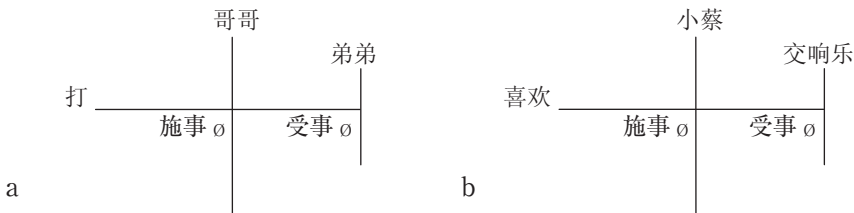


図2 (6a, b) の構造モデル

5.2 施事+V+結果

「施事+V+結果」というタイプの格フレームを持つ動詞は“成立”（創立する）、“创作”（創作する）、“发明”（発明する）、“画”（描く）、“建”（建てる）、“生产”（生産する）、“写”（書く）、“印”（印刷する）、“制造”（製造する）、“装配”（組み立てる）のような自発的な事態を表す二項動詞である。このような動詞は“動詞 B+ 語句 C”という形の述目句を構成し、その上で“語句 A || 動詞 B+ 語句 C”という形の動詞性主述句を構成することができる。例えば (7) である。

(7) 語句 A || 動詞 B+ 語句 C

a 爱迪生 || 发明 电灯 (エジソンが白熱電球を発明する)

エジソン 発明する 白熱電球

b 画家 || 画 马 (画家が馬を描く)

画家 描く 馬

「施事+V+結果」という配列が深層格を付与される語句と動詞の構成した句または文の基本的な語順を示すので、この“語句 A || 動詞 B+ 語句 C”では、語句 A の付与される深層格は施事となり、語句 C の付与される深層格は結果となると考えられる。例えば (7a) の“爱迪生”と (7b) の“画家”の深層格は施事であり、(7a) の“电灯”と (7b) の“马”の深層格は結果である。

ここでは、「施事+V+結果」というタイプの格フレームを持つ動詞が構成した述目句と、それを含んだ主述句の構造モデルを図3のように描出する。図3aは述目句の構造モデルであり、図3bはそれを含んだ主述句の構造モデルである。

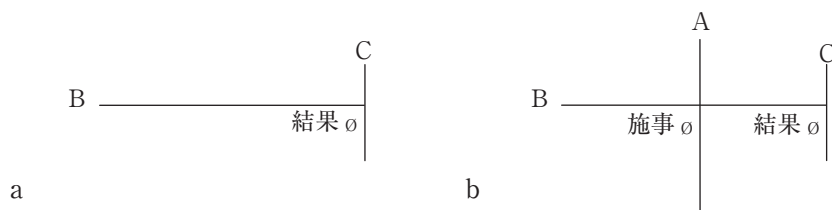


図3 「施事+V+結果」を持つ動詞が構成する述目句と主述句の構造モデル

この構造モデルでは、水平線が動詞 B の表す属性“B”を示し、水平線と十字をなして交差している垂直線が語句 A のさす対象である主体“A”を示し、水平線と横倒れの T 字をなして接している垂直線が語句 C のさす対象である客体“C”を示す。水平線と垂直線との交点のところに書いた“施事₀”が語句 A の深層格「施事」を示し、水平線と垂直線との接点のところに書いた“結果₀”が語句 C の深層格「結果」を示す。“施事₀”と“結果₀”の“₀”は深層格に対応する表層格が無標的であることを意味する。

具体例 (7) の構造モデルならば、図4のようになる。

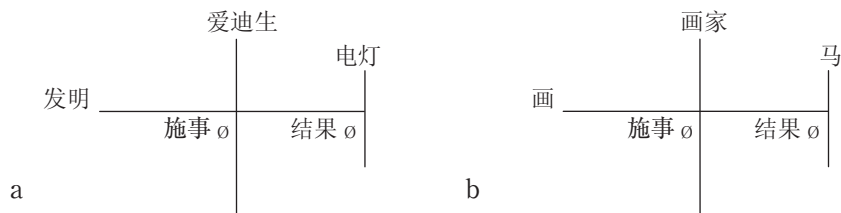


図4 (7a, b) の構造モデル

5.3 施事+V+処所

「施事+V+処所」というタイプの格フレームを持つ動詞は“出”（出る），“到达”（到着する），“逛”（遊びに行く），“回”（戻る），“进入”（入る），“路过”（経由する），“爬”（登る），“去”（行く）のような自発的な事態を表す二項動詞である。このような動詞は“動詞 B+ 語句 C”という形の述目句を構成し、その上で“語句 A || 動詞 B+ 語

句 C” という形の動詞性主述句を構成することができる。例えば (8) である。

- (8) 語句 A || 動詞 B + 語句 C
- a 汽车 || 路过 那儿 (くるまがそこを經由する)
くるま 經由する そこ
- b 父亲 || 去 过 北京 (父が北京に行ったことがある)
父 行く た 北京

この“語句 A || 動詞 B + 語句 C”では、語句 A の付与される深層格は施事となり、語句 C の付与される深層格は処所となると考えられる。例えば (8a) の“汽车”と (8b) の“父亲”の深層格は施事であり、(8a) の“那儿”と (8b) の“北京”の深層格は処所である。

ここでは、「施事 + V + 処所」というタイプの格フレームを持つ動詞が構成した述目句と、それを含んだ主述句の構造モデルを図 5 のように描出する。図 5a は述目句の構造モデルであり、図 5b はそれを含んだ主述句の構造モデルである。

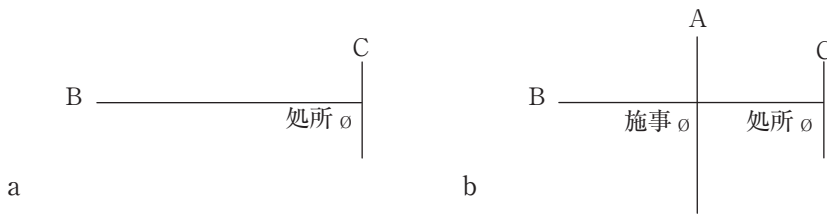


図 5 「施事 + V + 処所」を持つ動詞が構成する述目句と主述句の構造モデル

具体例 (8) の構造モデルは図 6 のようになる。

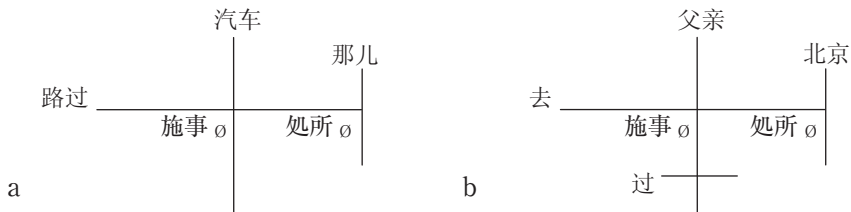


図 6 (8a, b) の構造モデル

表層では、(8b) の助詞“过”が付加成分として述語“去”に付いているが、深層では、“过”の表す意味「～したことがある」が属性を補助する働きをしている。構造モデル (図 6b) では、“过”の表す意味 (補助属性) を短い水平線で示す。

5.4 施事+V+工具

「施事+V+工具」というタイプの格フレームを持つ動詞は“盛”（どんぶり等で飯等を盛る）、“抽”（パイプ等でタバコ等を吸う）、“喝”（どんぶり等でお茶等を飲む）、“晒”（日光等で体等をさらす）のような自発的な事態を表す二項動詞である。このような動詞は“動詞 B+ 語句 C”という形の述目句を構成し、その上で“語句 A || 動詞 B+ 語句 C”という形の動詞性主述句を構成することができる。例えば (9) である。

(9) 語句 A || 動詞 B+ 語句 C

- a 老王 || 总是 抽 烟斗 (王さんがいつもパイプでタバコを吸う)
王さん いつも 吸う パイプ
- b 赶车 人 || 喝 大 碗 (馱者が大きな茶碗で飲む)
車を御する 人 飲む 大きな 茶碗

この“語句 A || 動詞 B+ 語句 C”では、語句 A の付与される深層格は施事となり、語句 C の付与される深層格は工具となると考えられる。例えば (9a) の“老王”と (9b) の“赶车人”の深層格は施事であり、(9a) の“烟斗”と (9b) の“大碗”の深層格は工具である。

ここでは、「施事+V+工具」というタイプの格フレームを持つ動詞が構成した述目句と、それを含んだ主述句の構造モデルを図 7 のように描出する。図 7a は述目句の構造モデルであり、図 7b はそれを含んだ主述句の構造モデルである。

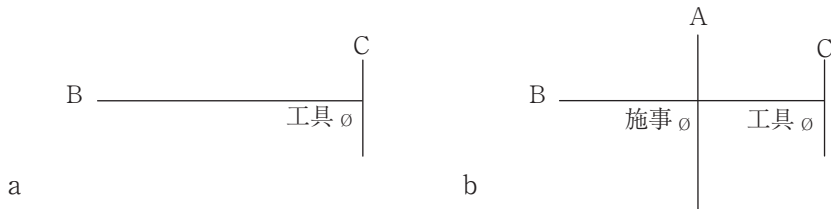


図 7 「施事+V+工具」を持つ動詞が構成する述目句と主述句の構造モデル

具体例 (9) の構造モデルは図 8 のようになる。

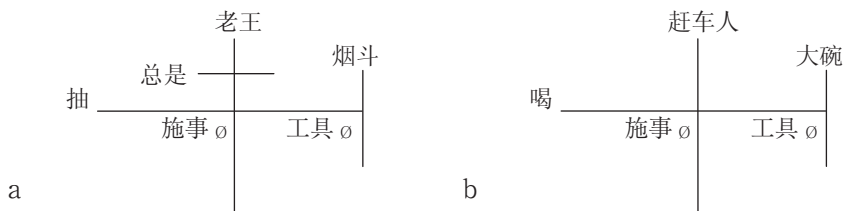


図 8 (9a, b) の構造モデル

表層では、(9a) の副詞“总是”が連用修飾語として述語“抽”を修飾しているが、深層では、“总是”の表す意味が属性を補助する働きをしていると考えられる。構造モデル(図8a)では、“总是”の表す意味(補助属性)を短い水平線で示す。

5.5 施事+V+方式

「施事+V+方式」というタイプの格フレームを持つ動詞は“唱”(ある調やメロディーで歌う)、“写”(ある字体等で書く)、“走”(ある歩き方で歩く)のような自発的な事態を表す二項動詞である。このような動詞は“動詞 B+ 語句 C”という形の述目句を構成し、その上で“語句 A || 動詞 B+ 語句 C”という形の動詞性主述句を構成することができる。例えば(10)である。

- (10) 語句 A || 動詞 B+ 語句 C
- a 他 || 写 楷书 (彼が楷書で書く)
 彼 書く 楷书
- b 战士们 || 走 了 一段 正步 (兵士たちが歩調を取って歩いた)
 兵士 たち 歩く た 一区间 歩調を取ること

この“語句 A || 動詞 B+ 語句 C”では、語句 A の付与される深層格は施事となり、語句 C の付与される深層格は方式となると考えられる。例えば(10a)の“他”と(10b)の“战士们”の深層格は施事であり、(10a)の“楷书”と(10b)の“一段正歩”の深層格は方式である。

ここでは、「施事+V+方式」というタイプの格フレームを持つ動詞が構成した述目句と、それを含んだ主述句の構造モデルを図9のように描出する。図9aは述目句の構造モデルであり、図9bはそれを含んだ主述句の構造モデルである。

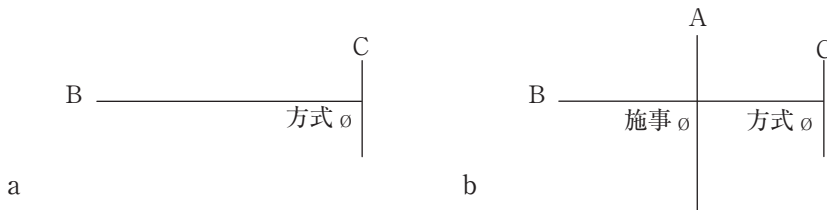


図9 「施事+V+方式」を持つ動詞が構成する述目句と主述句の構造モデル

具体例(10)の構造モデルは図10のようになる。

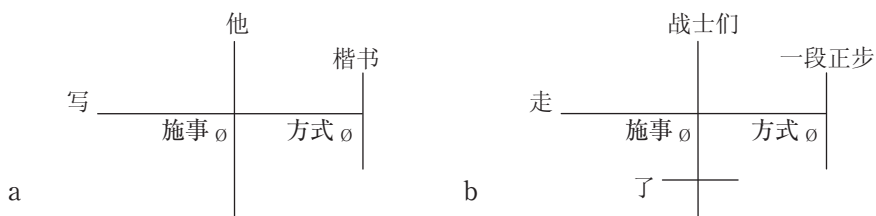


図10 (10a, b) の構造モデル

5.6 当事1 + V + 客事1

「当事1 + V + 客事1」というタイプの格フレームを持つ動詞は“符合”（合致する）、“记得”（覚えている）、“明白”（分かる）、“碰见”（出会う）、“缺乏”（欠乏する）、“听见”（聞こえる）、“误解”（誤解する）、“遗失”（遺失する）のような非自発的な事態を表す二項動詞である。このような動詞は“動詞 B + 語句 C”という形の述目句を構成し、その上で“語句 A || 動詞 B + 語句 C”という形の動詞性主述句を構成することができる。例えば (11) である。

(11) 語句 A || 動詞 B + 語句 C

- a 大家 || 都 明白 了 真相 (みんなに真相が分かった)
 みんな すべて 分かる た 真相
- b 我 || 碰见 一个 老朋友 (私が古くからの友人に出会う)
 私 出会う 一つ 古い 友人

この“語句 A || 動詞 B + 語句 C”では、語句 A の付与される深層格は当事1となり、語句 C の付与される深層格は客事1となると考えられる。例えば (11a) の“大家”と (11b) の“我”の深層格は当事1であり、(11a) の“真相”と (11b) の“一个老朋友”の深層格は客事1である。

ここでは、「当事1 + V + 客事1」というタイプの格フレームを持つ動詞が構成した述目句と、それを含んだ主述句の構造モデルを図11のように描出する。図11aは述目句の構造モデルであり、図11bはそれを含んだ主述句の構造モデルである。

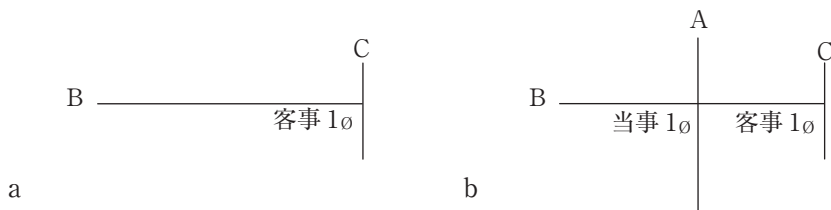


図11 「当事1 + V + 客事1」を持つ動詞が構成する述目句と主述句の構造モデル

具体例 (11) の構造モデルは図 12 のようになる。

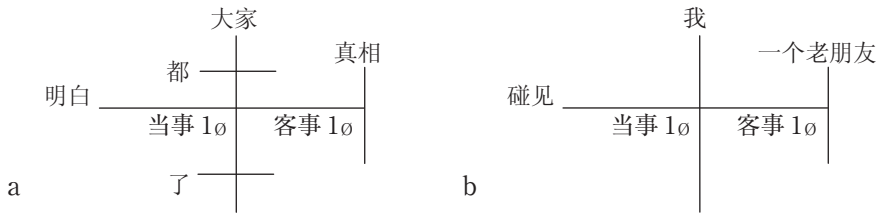


図 12 (11a, b) の構造モデル

5.7 処所+V+当事 1

「処所+V+当事 1」というタイプの格フレームを持つ動詞は“充滿”（満ちる）、“挂”（掛かる）、“有”（存在する）、“沾”（付く）のような非自発的な事態を表す二項動詞である。このような動詞は“動詞 B+ 語句 C”という形の述目句を構成し、その上で“語句 A || 動詞 B+ 語句 C”という形の動詞性主述句を構成することができる。例えば (12) である。

(12) 語句 A || 動詞 B+ 語句 C

- a 她的眼里 || 充滿 泪水 (彼女の目に涙があふれる)
 彼女の 目中 満ちる 涙
- b 街上 || 有 一辆 汽车 (大通りに一台の自動車がある)
 大通り 上 存在する 一台 自動車

この“語句 A || 動詞 B+ 語句 C”では、語句 A の付与される深層格は処所となり、語句 C の付与される深層格は当事 1 となると考えられる。例えば (12a) の“她的眼里”と (12b) の“街上”の深層格は処所であり、(12a) の“泪水”と (12b) の“一辆汽车”の深層格は当事 1 である。

ここでは、「処所+V+当事 1」というタイプの格フレームを持つ動詞が構成した述目句と、それを含んだ主述句の構造モデルを図 13 のように描出する。図 13a は述目句の構造モデルであり、図 13b はそれを含んだ主述句の構造モデルである。

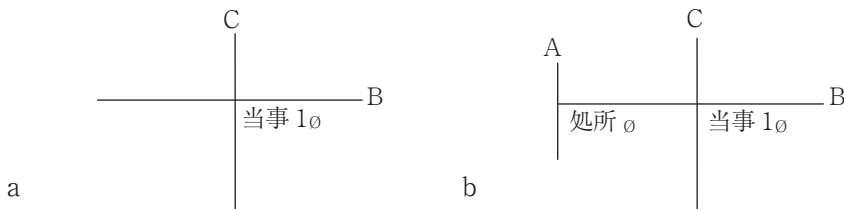


図 13 「処所+V+当事 1」を持つ動詞が構成する述目句と主述句の構造モデル

具体例（12）の構造モデルは図14のようになる。

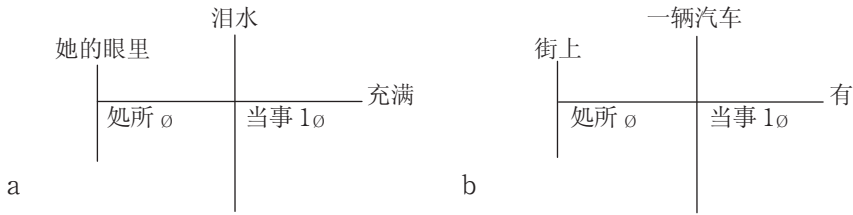


図14 (12a, b) の構造モデル

6 おわりに

表1 (<3>~<45>)と表2に書いてある格フレームのタイプから分かるように、述目句の目的語は受事、結果、処所、系事2、同事、目的、原因、工具、方式、時間、客事1、当事1、系事1、客事2等、多種多様な深層格を取ることができる。しかしながら、筆者が《(人机通用) 现代汉语动词大词典》を統計した結果によると、約8割の動詞はその目的語の取る深層格が受事である。即ち、述目句の目的語の取る様々な深層格で受事の出現頻度が圧倒的に高いと考えられる。この約8割の動詞は目的語の取る深層格が受事であると同時に、主語の取る深層格が施事である。したがって、主述句で「施事+V+受事」という深層格の組み合わせの出現頻度が圧倒的に高いとも考えられる。

述目句の構造モデルと、それを含んだ主述句の構造モデルに関しては、次のようなことが言える。①ほとんどの述目句は目的語となる語句Cのさす対象が客体として、述語動詞Bの表す属性と結合した構造モデル(図15a)を有する。それを含んだ主述句は主語となる語句Aのさす対象が主体として、述目句の構造モデルと結合した構造モデル(図15b)を有する。

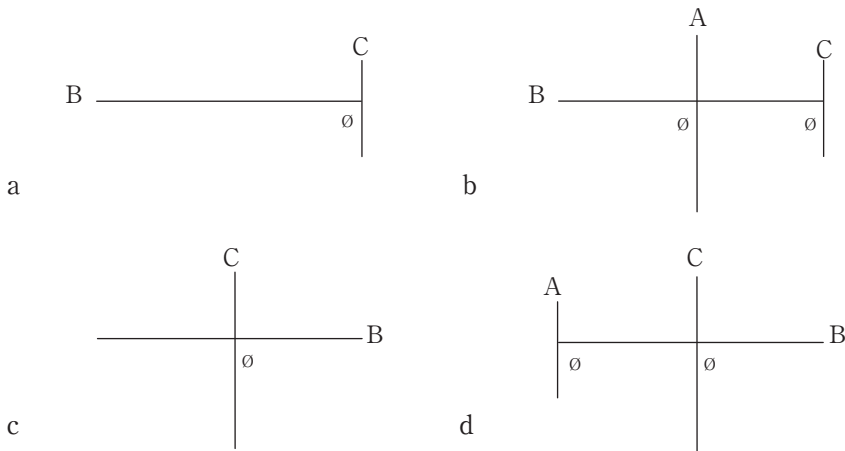


図15 述目句と主述句の構造モデル

②わずかであるが、一部の述目句（例えば「処所+V+当事1」のような格フレームを持つ動詞が構成した述目句）は目的語となる語句Cのさす対象が主体として、述語動詞Bの表す属性と結合した構造モデル（図15c）を有する。それを含んだ主述句は主語となる語句Aのさす対象が客体として、述目句の構造モデルと結合した構造モデル（図15d）を有する。

参考文献

- 今泉喜一（2012）『日本語構造伝達文法（改訂12年版）』揺籃社
- 蔣家義（2012a）「日本語構造伝達文法の中国語への適用—予備的考察—」『大学院論文集』（杏林大学大学院国際協力研究科）第9号
- 蔣家義（2012b）「日本語構造伝達文法の中国語への適用—主述句の記述的研究—」『言語と交流』（言語と交流研究会）第15号
- 鳥井克之（2008）『中国語教学（教育・学習）文法辞典』東方書店
- 渡辺実（1971）「客語」松村明（編）『日本文法大辞典』明治書院
- 北京语言大学汉语水平考试中心（編）（2000）《HSK 中国汉语水平考试词汇大纲汉语8000 词词典》北京语言大学出版社
- 林杏光、王玲玲、孙德金（主编）（1994）《（人机通用）现代汉语动词大词典》北京语言学院出版社
- 孟琮、郑怀德、孟庆海、蔡文兰（編）（1999）《汉语动词用法词典》商务印书馆
- 商务印书馆辞书研究中心（編）（2007）《商务馆学汉语词典（双色本）》商务印书馆

マンガにおけるオノマトペの考察

——音韻形態と表記形態の分析を中心に——

坂寄 仁美

要 旨

マンガには多彩なオノマトペが用いられており、本研究においても他の表現メディアでは現れないような臨時的形態が多数観察された。しかし、そのほとんどは既存の形態を何らかの方法でアレンジしたものであり、母語話者の感覚をもってすれば、表現意図を理解しうるものであった。これまでのオノマトペ研究では、表記形態の研究はあまりなされていなかったが、本稿では音韻形態とともに表記形態について分析を試み、マンガのオノマトペ表記の特性を指摘した。また、オノマトペによって表される意味内容が、視覚・聴覚・身体感覚・嗅覚・心理などにわたる交感覚（クロスモーダル）的なものとして機能していることを確認した。

言語の表記は音の記録化をめざして行われるものであるが、その本来の機能を越えたところに、マンガにおける文字の存在がある。マンガのオノマトペにおける文字は、本来の表記の機能を越えた「超文字」として存在しており、言語情報と同時に絵としての非言語情報を伝達するものであると結論づけた。

1. 先行研究

マンガのオノマトペに関する先行研究として、オノマトペの分布を調査したスコウラップ（1993）と、表現効果について述べた山口（2003）を提示する。

1.1 スコウラップ（1993）による分析

スコウラップ（1993）では、若者対象のコミック誌から2編とスポーツ雑誌から1編の計3編の作品において、それぞれ3000字あたりに出現したオノマトペが、①吹きだし内のセリフ、②絵の中で表された事柄と関連している音や様態を描写するために背景として独立して用いられたもの、のいずれかであることを調査している。その結果、絵の背景として独立して用いられたオノマトペが多いことを指摘している。また、

独立して用いられたテキストがオノマトペであるか、間投詞であるかを正確に区別することは困難であったと述べている。

1.2 山口 (2003) による分析

山口 (2003) は、マンガにおけるオノマトペの表現効果について述べている。マンガが視覚に訴えるメディアであることを指摘した上で、文字種による使い分けの効果について、ひらがなは「柔らかい感じの音や様子」に、カタカナは「鋭く強い感じの音や様子」に、漢字は「重くかたい感じの音や様子」に、ローマ字は「軽くおしゃれな感じの音や様子」に用いるとしている。また、文字の大小で遠近感を表す例や、書体の工夫によって、文字だけでは表せない情報を添加する例についても言及している。

2. 研究方法

2.1 研究対象の範囲

本稿では、間投詞の一部もオノマトペに含むとする小野 (2007) の定義を参考にして、活字化されたテキストと、背景として独立して用いられた手書きのテキストにおいて、用法から見てオノマトペとして用いられているものを研究対象とする。

2.2 分析対象

2009 年度丸善ホームページによる年間売上ランキングから、作品による重なりを除いた上位 10 作品を分析対象とする。表 1 に分析対象と考察の際に使用する略称を提示する。

表 1 本稿における分析対象とその略称

	作品名	略称		作品名	略称
1	ONE PIECE (52)	『OP』	6	PLUTO (7)	『PLT』
2	NANA (21)	『NA』	7	NARUTO (45)	『NRT』
3	聖☆おにいさん (3)	『聖☆』	8	ガラスの仮面 (43)	『ガラス』
4	のだめカンタービレ (22)	『のだめ』	9	君に届け (9)	『君に』
5	鋼の錬金術師 (22)	『鋼錬』	10	星守る犬	『星守』

<http://www.maruzen.co.jp/shopinfo/feature/best/comic.shtml> (2010.6.12 / 作品名 () 内の数は巻数)

2.3 分析方法

2.3.1 音韻形態の分析

本稿では、田守 (1999) による音韻形態の分類の (1) から (9) (表 2 参照) を便宜的に「定型」の音韻形態とし、それに外れたものを「非定型」の音韻形態として扱う。「定型」については、マンガ以外の一般資料と比較し、「非定型」については「定型」から派生した形態であるか否かを検討し、「定型」からの派生の仕方について考察する。

田守（1999）は音韻の形態的特徴を分析する際に、音韻形態を「CV式」（C = 子音・V = 母音）によって表しており、ひとつのオノマトペ内における「音」の異同については考慮していない。ひとつのオノマトペ内における「音」の異同についても観察するため、本稿では山口（2002）の「〔CV/V〕1=A、〔CV/V〕2=B」とする表し方を採用し、特殊音については従来の音声表記法に従って、長音を「R」、促音を「Q」、撥音を「N」で表して音韻形態を考察する。また、オノマトペの接尾辞のひとつと考えられる「ばっさり」に用いられるような「り」については「ri」で表す¹。本稿で「定型」とする音韻形態の分類を本稿採用の方式で表すと表2のようになる。

また、スコウラップ（1993）の一般資料におけるオノマトペの分布に関するデータを用いて、音韻形態の出現について比較する²。

表2 本稿における「定型」の音韻の表し方（「田守ほか（1999）」参照）

		音韻形態の分類	田守（1999）式	本稿採用式（坂寄）
(1)		ふ（と）	CV	A
(2)	a	ばっ	CVQ	AQ
	b	ぱん	CVN	AN
	c	かー	CVV	AR
(3)	a	かーっ	CVVQ	ARQ
	b	かーん	CVVN	ARN
(4)	a	ばっばっ	CVQ—CVQ	AQAQ
	b	ぼんぼん	CVN—CVN	ANAN
	c	ぐーぐー	CVV—CVV	ARAR
(5)		がば	CVCV	AB
(6)	a	ばたっ	CVCVQ	ABQ
	b	ばたり	CVCVri	ABri
	c	ばたん	CVCVN	ABN
(7)	a	ばっさり	CVQCVri	AQBri
	b	ふんわり	CVNVCVri	ANBri
(8)		ばたばた	CVCV—CVCV	ABAB
(9)	a	ころりころり	CVCVri—CVCVri	ABriABri
	b	ばたんばたん	CVCVN—CVCVN	ABNABN

¹ この方法により、「ガタガタ」は「ABAB」、「どたばた」は「ABCB」の形で表す。同様に「ばっさり」は「AQBri」、「ふんわり」は「ANBri」、「きゅー」は「AR」と表す。

² 本稿では、マンガ以外の小説や絵本のような資料を「一般資料」として扱う。

スコウラップ（1993）はデータ収集に関して、基本的にオノマトペ辞典（『擬音語・擬態語辞典』天沼寧編（1974）・『英語人と日本語人のための日本語擬態語辞典』五味太郎（1989））に準拠し、「物音や動作の様態等を表す臨時語や、一般的によく使われるがたまたま辞書に載っていない語も、オノマトペに含めた」という点で本稿と同様の観点でデータを収集しており、本稿と同様の観点であるからデータを採用した。児童文学・中高生向け小説・一般的な小説の3ジャンルの、それぞれ異なる作者による3作品から列举されたオノマトペを音韻形態別に分類し、比較する。

2.3.2 表記形態の分析

これまでのオノマトペの形態に関する研究では、音韻形態と表記形態とを切り離さずに考察されてきたが、マンガにおけるオノマトペは、この両者を区別して考察する必要がある。音韻形態と同様に、表記形態もまた作者の表現意図によって選択されていると考えるからである³。表記形態においても「定型」と「非定型」を便宜的に設定したうえで、次の点から分析を試みる。

まず、オノマトペに用いられる文字種を観察することで、表記形態の「非定型」について考察する。『朝日新聞の用語の手引き』(1994)の表記の原則を便宜的に「定型」とし、それと異なるものを「非定型」として分析する。すなわち、オノマトペの中で、音を表すもの(擬声語・擬音語)についてはカタカナで表記し、様態や心理を描写したもの(擬態語)についてはひらがなで表記することを「定型」として扱い、この原則から外れたものを「非定型」として、その効果について考察する。また、「ひらがな+カタカナ」または「カタカナ+ひらがな」のような混種のもの、アルファベット、漢字については文字種による「非定型」として考察する。さらに、マンガのオノマトペに現れる文字の大小や文字配置に関わる特殊な表記形態を「非定型」として考察する。最後に、スコウラップ(1993)のデータを用いて文字種について一般資料との比較を行う。

2.3.3 意味に関する分析

本稿では、苧坂(1999)による「擬音・擬態表現と感覚モダリティ、行動および心的状態の一例」で用いられた五感に基づく分類を参考にして、そこに表現されたオノマトペの意味について分析を試みる。また、分析対象すべての作品に出現した、笑いに関わるオノマトペを取り出して、どのような機能を果たしているか考察する。

3. 結果と考察

3.1 音韻形態の分析

3.1.1 「定型」と「非定型」の音韻形態の比率

田守(1999)をもとに、本稿で「定型」とした形態と、「非定型」の形態の比率を求めた。「非定型」の音韻形態については、「定型」から派生したと考えられる「派生型」の形態と、「特殊型」の形態、「創出」の形態の3種に分類した。それらを集計したものが表3である。

「特殊型」とは、音韻形態としては特殊であるが、「こけっこっこー」などのように、金田一(1978)や田守(1999)らによって「特殊な形態」として挙げられたようなも

³ 長音を表した「ほー」・「ほお」・「ほお」という3種の異なる表記を区別して分析した。本稿では、「ー(長音符)」で表された長音は「R」、「A(CV)」の母音(V)の小さな文字で表したものを「a」、「A(CV)」の母音(V)と同一母音のくり返しによって表記している場合は「A」で表した。これによって、「ほー」・「ほお」・「ほお」の形態は、それぞれ「AR」・「Aa」・「A A」で表す。

のを指す。「創出」とは、特定の作者が特定の場面のみに用いた臨時語の類⁴で、「派生型」や「特殊型」に当てはまらない形態を指す。データからは、「定型」の形態と、「非定型」の中でも「派生型」に属する形態を合わせると、全体の約97%を占めており、「特殊型」や「創出」の割合は極めて少ないことがわかる。

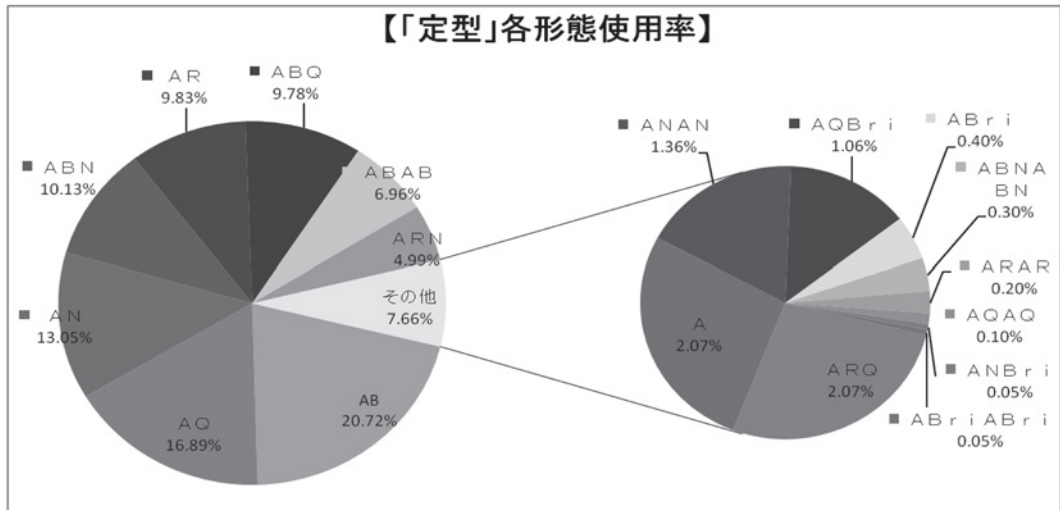
表3 「定型」と「非定型」の使用率

	「定型」	「非定型」			計
		「派生型」	「特殊型」	「創出」	
使用数(例)	1984	1550	13	74	3621
使用率(%)	54.79	42.81	0.36	2.04	100

3.1.2 「定型」の形態

「定型」の形態を、「定型」内の使用率が高い順に並べたものがグラフ1である。田守(1999)は、1モーラまたは2モーラのみのおノマトペは現代日本語においてごく少ないと指摘しているが、今回分析対象としたマンガのおノマトペでは、2モーラ〔AB〕の形態は11.35%(411例)使用されており、「定型」と「非定型」の全形態の中で、最も高い使用率となっている。また、田守(1999)が「一般的・典型的」な形態であると述べた〔AQBri〕と〔ANBri〕のようなおノマトペの接尾辞〔ri〕を伴う形態や、〔ABriABri〕と〔ABNABN〕のように反復の形態は、今回の分析対象においては、使用例が少なかった⁵。

グラフ1 「定型」の各形態使用率



⁴ 以下、本稿ではこのようなものを「個人言語」として述べる。

⁵ データ抽出に際して、同じ形態のおノマトペが同一コマ内の離れた位置に書かれた場合、反復の形態としてカウントしなかったことも、その原因の一つと考えられる。

3.1.3 「非定型」の形態①（「派生型」）

「派生型」は「定型」から派生したと考えられる形態である。抽出したデータにおいては、1モーラの〔A〕、2モーラの〔AB〕やその他の「定型」に、オノマトペの形態的特徴である要素（R・N・Q・反復・ri）を添加または挿入することによって、派生したと考えられるオノマトペがほとんどであった。派生の方法はさまざまであるが、①「オノマトペの形態的特徴となる要素（R・N・Q・反復・ri）」を用いたもの⁶、②オノマトペに用いられた音を添加するもの⁷、③「定型」の組み合わせによるもの⁸、の3種にほぼ分類可能であった。①から③の「派生型」を複数組み合わせたものも「派生型」として分類した。

使用数が100例（全体使用率2.8%）の〔A*〕⁹や、89例（同2.6%）の〔AB・〕¹⁰や110例（同3.0%）の〔AB*〕などが多くの作品に観察されており、「派生型」の形態には、マンガのオノマトペの形態として一般的といえるような形態が多く存在する。

3.1.4 「非定型」の形態②（「特殊型」）

「特殊型」は、形態としては特殊であるが、辞書に掲載されるなど、語彙として一般性が高く、作者の個人言語とは考えられないものを拾い上げた。なお、形態として特殊で、語彙として一般性が高くとも、「定型」の形態からの「派生型」と考えられる「ゆっくり（ARQBri）」のようなものは「ゆっくり（AQBri）」の「派生型」に含め、「特殊型」には含めなかった。その結果、次のような全14例の使用が観察された。

- 「ちんたら（ANBC）」（「～走る」）『聖☆』（p.86）
- 「よっこら（AQBC）」（機械をまたぐ場面）『鋼錬』（p.171）
- 「あーだこーだ（ARBCRB）」←「ああだこうだ」（議論する場面）『星守』（p.14）

3.1.5 「非定型」の形態③（「創出」）

「非定型」の中で、「派生型」や「特殊型」の形態にあてはまらない形態を「創出」として扱った。「創出」と考えられる形態を、①日本語の音韻形態から外れたもの、②オノマトペの形態的特徴となる要素（R・N・Q・ri）を除いて3音以上が用いられたもの¹¹、③記号によるもの¹²、に分類した。観察された用例は以下のような全74例である。

⁶ 例「かちーん（ABRN→ABN+R）」・「ひひーん（AARN→AAR+N）」

⁷ 例「ドド（AA）」・「わははははは（ABBBBB）」・「ギクウ（A BⓈ）」

⁸ 例「パラッパー（ABQ+AR）」・「ミーンミンミン（ARN+ANAN）」

⁹ 「*」は直前の音韻が2つ以上連続することを表す。（例：どどどどどど）

¹⁰ 「・」は「…」・「…」またはその連続を表す。（例：バサ……）

- ① 日本語の音韻体系から外れたもの〔43例〕
- a) 「CV」拍でないもの・・・「BUOOO…」(エンジン音)『星守』(p.87)
- b) 撥音で始まるもの・・・「んぎぎぎぎ…」(重い荷物を運ぶ)『星守』(p.112)
- ② オノマトペの形態的特徴となる要素を除いて3つ以上の音を用いたもの〔21例〕
- 「どっせい (AQBC)」(象を投げ飛ばす)『聖☆』(p.81)
 - 「バッチカン (AQBCN)」(くしゃみ)『聖☆』(p.101)
- ③ 記号によるもの〔10例〕・・・「♪」(鼻歌を歌う場面)『鋼錬』(p.47)

3.1.6 音韻形態における一般資料との比較

一般資料に現れたオノマトペは、すべてが本稿における「定型」の形態もしくは「派生型」に分類でき、「特殊型」や「創出」の形態は観察されなかった¹³。一般資料のジャンルごとの音韻形態を分類し、本稿で抽出したマンガにおける各形態の使用率と合わせて表4に提示した。児童文学においては、中高生向け小説と一般的な小説に比べて「派生型」の比率が高くなっており、音韻形態のバリエーションに富んでいることがわかる。中高生向け小説と一般的な小説においては、オノマトペそのものの使用が少ないこともあるが、「定型」が9割以上を占めた。一般資料と比較して、マンガのオノマトペには「定型」から派生した「派生型」の形態が非常に多く用いられていること、「特殊型」の形態や「創出」の形態が現れやすいことが確認された。

表4 一般資料のジャンルごとの音韻形態およびマンガの音韻形態の分類¹⁴

ジャンル	一般資料									マンガ		
	児童文学			中高生向け小説			一般的な小説					
総使用数(例)	118			30			25			3621		
形態別	定型	派生	特殊/ 創出	定型	派生	特殊/ 創出	定型	派生	特殊/ 創出	定型	派生	特殊/ 創出
使用数(例)	83	35	0	29	1	0	23	2	0	1984	1550	87
使用率(%)	70.3	29.7	0	96.7	3.3	0	92	8	0	54.8	42.8	2.4

¹¹ 多くの研究者が、日本語のオノマトペは1モーラまたは2モーラの形態に分類することができると指摘している(田守(1999)・山口(2002)ほか)。得られたマンガのオノマトペのデータにおいても、オノマトペの形態的特徴となる要素(R・N・Q・ri)を除いて、3つ以上の音を用いたものは稀であったため、「ABC」のように3音以上が使われた形態は「創出」として扱った。

¹² 本稿ではその用法から判断して、オノマトペと類似した機能を持つ記号として扱った。

¹³ 例えば児童文学に現れた「ワンワン」は、本稿ではANAAN(AN+AAN)の形態で表し、「派生型」の形態に分類したものである。また、スコウラップ(1993)の分析対象とした資料を確認したが、「特殊型」や「創出」は含まれなかった。

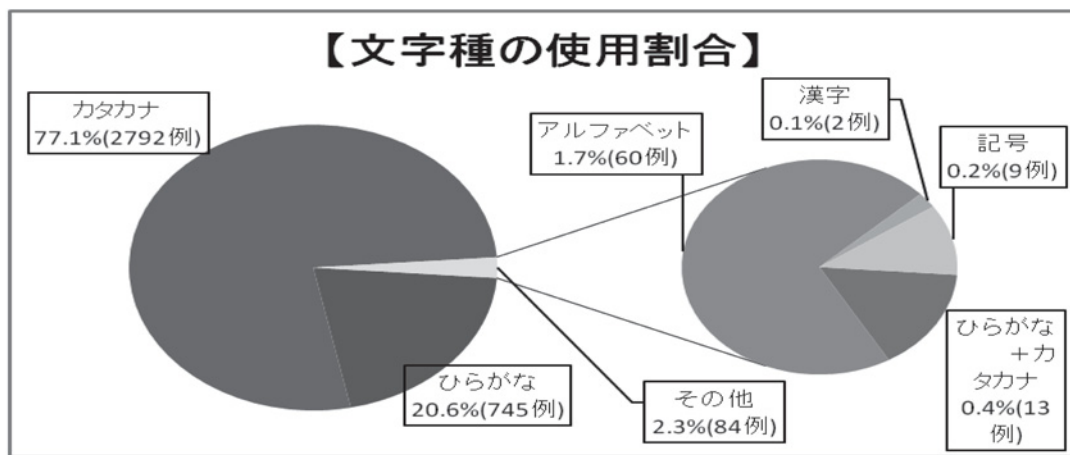
¹⁴ 一般資料のデータはスコウラップ(1993)をもとに集計。マンガのデータは筆者による。

3.2 表記の形態分析

3.2.1 「非定型」の形態①（文字種によるもの）

オノマトペを表記した文字種を集計し、グラフ2に示した。圧倒的にカタカナの使用が多く、次にひらがなが続く。使用数は少ないがアルファベットや「ひらがな+カタカナ」または「カタカナ+ひらがな」による混種のもの、漢字、記号によるものが観察された。それぞれの「非定型」について後述する。

グラフ2 文字種の使用割合



3.2.1.1 ひらがなによるオノマトペの「非定型」の用法

①人の音声器官による音を表すもの、②自然に関わる音を表すもの、等が観察された。

3.2.1.2 カタカナによるオノマトペの「非定型」の用法

①「新しい感じ」を添加するもの、②音からの派生として様態・心理を表すもの、③鋭さを表すもの、④速さや勢いを表すもの、⑤人物の登場に効果音的に添えられたもの¹⁵、等が観察された。

3.2.1.3 「ひらがなとカタカナ」を組み合わせたもの

「ひらがな+カタカナ」によるオノマトペはわずかな用例だが、日本語の表記法の中では極めて珍しい少数派のものであり、音声を視覚的手法によって表現するというマンガのオノマトペの特性が観察される。最も特殊な用例が観察された『鋼錬』(p.165)では、人造人間の泣き声を表した「オギャおぎゃおぎゃ」において、小書き文字の「オ」

¹⁵ 爆発の場面に多用される「ドン」を、音を伴わない場面で用いた例（『OP』）など。

から始まる特殊な例が見られた。また、「ほあ`おあ`おあァァ」という本来の日本語の表記にはない「あ`」の使用が観察された。これらは、いずれも吹きだしの中に手書きで記されており、オノマトペを表す文字としての機能をかろうじて保っており、音を表すオノマトペでありながら、実際に音声言語として発音することよりも、人造人間の泣き声を、人間のそれとは異なるものとして視覚的にも表現したいという作者の意図が感じられる。

3.2.1.4 アルファベットによるオノマトペ

アルファベットを①日本語の音韻体系に合わせてローマ字的に用いたもの（例：車のエンジン音「DORURU…」『星守』（p.107））と、②日本語の音韻体系から外れたもの（例：携帯電話の着信音「RRR」『のだめ』（p.55））とが観察された。アルファベットによるオノマトペは2作品の24例に限られており、データ全体からみた使用率は1.8%と少ないが、マンガ以外の一般資料では現れにくいオノマトペである。これは、読者に音を想起させるというより、むしろ視覚に訴える効果の高い表現手法である。アルファベットによるオノマトペは機械音を表すものに限られており、自然に調和しない無機的な音であることを読み手に意識させる。

3.2.1.5 漢字によるオノマトペ

『OP』に2例のみ用いられており、音楽を奏でることによって攻撃する主体が、攻撃する際に発生させた音が、「斬^{シャー}♪」（p.146）と「爆^{ドーン}♪」（p.147）と表されている。これらは吹きだしの中に活字化されて記され、それぞれの漢字に「斬」には「シャー」、「爆」には「ドーン」という振り仮名が付されている。これは、漢字によって「斬る」、「爆発する」という意味と「シャー」、「ドーン」という音のイメージとを組み合わせた複雑なオノマトペである。表意文字としての漢字を用いることによって「できごと」を意味し、表音文字としてのカタカナを振り仮名として用いることによって、「できごと」の発生に伴う音を表現している。表音文字であるカタカナ・ひらがなと、表意文字である漢字を併用する日本語の表記体系の特性を活かしたオノマトペである。用例は非常に少ないが、マンガにおけるオノマトペの表記はもちろん、日本語の振り仮名表記の可能性を広げるものである。

3.2.2 表記の「非定型」②（文字のデザインや文字の配置によるもの）

マンガのオノマトペには、表す意味・内容や、場面に合わせてさまざまデザインが施されている。ここでは、文字の変形、配置、絵としての機能について取り上げる。

3.2.2.1 文字を変形させたもの

『NRT』において、人物が攻撃を受けている場面に描かれた「ドン」（p.15）という

オノマトペでは、「ド」の字を墨が垂れたような独特の字体に変形させている。また、目を見開く場面に描かれた「ギン」(p.100)というオノマトペは、「ギ」の濁点を、文字「キ」に重ねて付し、独特の字体にしている。これらはそれぞれの場面の印象を強める効果をあげている。

3.2.2.2 文字配置の原則を外れたもの

日本語の文字配置は、縦書きであれば上から下へ、横書きであれば左から右へ、という原則がある。しかし、マンガでは図面にデザインとして文字を配置するため、この原則に外れた用例が多数観察された。例えば『OP』の「ドドン」(p.166)では、3つの文字を三角形の頂点の位置に配することにより、コマの中心である爆発源から、音が放射状に広まる様子を表し、文字も背景の一部として構成されている。また『鋼錬』の「ドボン」(p.84)は、隣り合う2つのコマの境界を越えて描かれた文字が、右から左に読むように配置されている。これによって音の発生源が右にあり、爆発の影響が左のコマの人物の位置にまで及んでいることを表している。さらに、「ド」「ボ」「ン」としだいに文字を小さく描くことで、音の発生源からの遠近に伴って生じる音の強弱を表現している。ここでの文字は通常は表せない音の位置や方向性、強弱を表しており、絵としての機能を併せ持っている。言語として文字列を捉えうるからこそ、このような絵と文字の境界上の機能を果たせるのである。

3.2.2.3 言語情報よりも絵としての機能に重きをもった文字

『鋼錬』の見開きの左ページ(p.122)ではイラストの黒い背景に、かろうじて判読可能な文字が白抜きで無数に描きこまれ、人造人間が激しく泣いて空間にその声が充満している様子が表現されている。同右ページ(p.123)では、見開きの左ページの人造人間の泣き声が、音の発生源から離れた地点を描いたコマにまたがって、特殊な形状の吹きだしを使ってページの中心に配されており、発生した音が、ページ内の全てのコマに影響を与えるものとして描かれている。吹きだしがあることによって、その文字を音として捉え、複数の人造人間の泣き声を描写したものであると理解でき、その泣き声が離れた空間にいる人物にも届いていることを表すものとしても機能している。ここでの文字は言語情報を伝えるという本来の機能に加えて、コマの絵の一部としても機能している。

3.2.3 文字種の使用における一般資料との比較

スコウラップ(1993)の一般資料のデータを用いて、文字種について比較を行った集計結果が表5である。一般資料のオノマトペの表記は、ひらがなによるものとカタカナによるものに限定されており、マンガにおいて観察されたアルファベット等は存在しないことが確認された。また、ひらがなを用いた語には音を表すようなものはな

く、「うとうと」や「ぐっすり」のような様態を表すものに限定されていた。加えて、ひらがなで表記されたオノマトペは「やんわり」や「たっぷり」、「はっきり」など、一般の語彙として定着したものが多いという傾向がみられた。一方、カタカナを用いたオノマトペは、音を表すものと様態を表すものの両方に用いられていた。一般資料における文字種の選択は、『最新版 朝日新聞の用語の手引き』（1994）の原則におおむね従っていた。

オノマトペの文字種の選択は使用者に委ねられており、一般資料においてもその傾向は認められるが、マンガのオノマトペは選択の自由度がさらに高いことが特徴である。

表5 マンガと一般資料の文字種使用比較¹⁶

		ひらがな	カタカナ	ひらがな+カタカナ	アルファベット	漢字	記号	合計
使用数(例)	マンガ	745	2792	13	60	2	9	3621
	一般資料	45	128	0	0	0	0	173
使用率(%)	マンガ	20.6	77.1	0.4	1.7	0.1	0.2	100
	一般資料	26.1	73.9	0	0	0	0	100

3.3 オノマトペの表す意味に関する分析

3.3.1 五感による分析

3.3.1.1 五感に関する使用傾向

人間の感覚である視覚、聴覚、触覚、嗅覚、味覚の五感のうち、味覚を表すオノマトペは極端に使用例が少なく、わさびの辛さを描写する「ピリッ」（『聖☆』 p.49）の1例のみが観察された。嗅覚を表すオノマトペもバリエーションが非常に乏しく、『鋼錬』（p.146）などで、においを嗅ぐ場面で「クン」1例、「クンクン」2例、「くんくんくん」2例の計5例のみが使用されていた。

あるオノマトペが視覚・聴覚・触覚のいずれを表すのかは、絵の情報をもってしても、明確に1つの感覚と断定できないものが多数あった。例えば、『鋼錬』（p.121）の瓦礫が崩れる場面に、背景として書きこまれた「ガラガラ」というオノマトペは、崩れるときの音を表しているのか、崩れる様態を描写しているのか、絵の情報を判断の根拠としても断定しかねる。この場合は音を描写することが主な目的と考えられるが、様態を描写する二次的な目的を否定できないからである。使用される場面にもよるが、このようなオノマトペは聴覚と視覚の両方に訴えていると捉えるのが妥当であろう。同様に『OP』（p.16）において、人物が武器を手取る場面に書きこまれた「ばっ」というオノマトペでは、「武器を手取る時の音」を描写し、「勢いよく武器をつか

¹⁶ 一般資料のデータはスコウラップ（1993）をもとに筆者が集計。マンガのデータは筆者による。

む様子」を視覚的に表現し、さらに、「勢いよくつかむ時の人物の手の触覚（身体感覚）」をも表していると考えられる。このような場面では、視覚・聴覚・触覚（身体感覚）の3つの感覚を1つのオノマトペによって描写しているといえるだろう。

このように、オノマトペが表す意味が1つの感覚ではなく、複数の感覚にわたるような交感覚（クロスモーダル）のものが多数観察された。絵を補う役割を果たすものがオノマトペであるとすれば、オノマトペで表す事象は、視覚に訴える絵では表しえない、聴覚にかかわるものが多いはずである。今回の分析対象では、当然ながら聴覚にかかわるものが最も多く観察された。しかし、興味深いことに、オノマトペの表す事象が複数の感覚にかかわる事象を表すという観点で再考察すると、二義的なものとして聴覚以外の感覚を表すオノマトペが多数観察された。このことから、マンガのオノマトペには、絵によっては表しきれない音以外の情報を補うという機能を果たしているといえるだろう。

3.3.1.2 オノマトペによる心理描写

小説では心理描写に文字言語を用いるが、マンガは絵が主的表現手段となるため、心理描写には工夫が必要となる。そこで、短いながらも具体的描写力を持つオノマトペを用いれば、コマを装飾しながら、特定の心理を端的に描写することが可能になる。心理・様態を表すオノマトペは、「ガッカリ」（『NRT』（p.145）、『君に』（p.136））のように、広く擬態語として認識されており、小説のような一般的な表現方式にも用いられるものがほとんどであった。一方で、心理・様態の描写に音を用いているものが観察されたが、それらは『君に』（p.8）のショックを受ける場面に書きこまれた「ガン」などのように、マンガにしか用いられないオノマトペが多かった。音による心理描写は、「ガッカリ」のように擬態語として認識された、心理を表す既存のオノマトペを用いて表現したものよりも、誇張された心理描写である場合が多い。それらは顔の表情や様子を描いた絵に添えることによって、はじめてその描写力が正確に発揮される。例えば、『OP』（p.67）において人物の登場シーンに添えられた「ドン」は音ではなく、特定の人物の登場によって周囲の人物たちが動揺する心理を表している。また、『聖☆』において、象を投げる場面に描きこまれた「どっせい」（p.81）や、登場人物であるイエス・キリストが恍惚の表情を浮かべる場面に描かれた「ハレルヤ」（p.52）などのように、セリフであるか心理を描写したオノマトペであるかの判別が困難なものもあった。

3.3.2 笑いに関わるオノマトペの意味分析

笑いに関わるオノマトペは全ての作品に出現し、かつバリエーションが豊富であった。今回のデータでは、重なりで109例、文字種の違いを含めた異なりで62例の使用が観察された。

笑いに関わるオノマトベのうち、絵を参照することでその意味が判別できるものについて、「笑い声」と「笑いの様態」に分類したところ、圧倒的に笑い声を表すものが多く、「にこっ」のように様態を表したものは10例のみと、ごく少数であった。このことは、マンガが視覚に頼るメディアであるという特質上、音を可視化する必要があるが、笑いの様態は絵によってある程度の伝達が可能であり、文字による情報を必要としないからだと考えられる。また、人物の性別や年代、性格といったアイデンティティによって笑い声や笑い方を表すオノマトベが選択され、登場人物のキャラクターを補強する役割を果たしていると確認された。

4. まとめ

4.1 音韻形態について

マンガのオノマトベに観察される音韻形態は多種多様であり、他の表現メディアでは決して現れないような臨時的形態が多数観察された。しかし、それらの臨時的形態のほとんどは、なんらかの方法によって「定型」から派生した形態であることが確認された。結果として、純粹に作者の個人言語と考えられる「創出」の形態は稀であり、たとえ「創出」の形態であっても、その多くは日本語母語話者であれば意味を捉えうるものであった。「攻撃音」「爆発音」などの、特定の非日常的な音に関するオノマトベに臨時的形態のオノマトベが現れやすく、日常的に耳にする音を表すオノマトベは、「定型」の形態またはその音を表すオノマトベとして一般化したものをアレンジした「派生型」の形態が多かった。

また、一般資料において多用される形態が、必ずしもマンガでは多用されず、逆に、一般資料では稀だとされている形態がマンガに多用される傾向が見られた。例えば、一般資料では現れにくいとされる1モーラ〔A〕や2モーラ〔AB〕のような「語基」のみの形態がマンガでは多く出現する一方、一般資料では多く出現するオノマトベ接尾辞としての「ri」の音を含む〔AQBri〕のような形態は、マンガではごく少数しか用いられていなかった。

一般資料では、一文の中で、オノマトベとオノマトベ以外の語を明確にする役割の一部を、オノマトベの形態的特徴となる要素「Q/R/N/ri」が果たしている。マンガに〔A〕や〔AB〕のみの形態が多く現れるのは、これらの形態のオノマトベが背景として独立した部分に多く現れることと関係している。つまり、マンガでは、一般資料におけるオノマトベ以外の情報は絵によって表され、そこにオノマトベの文字テキストが混在するため、必ずしもオノマトベを明確にするための形態的特徴となる要素「Q/R/N/ri」を要求しないのである。また、〔AQBri〕のような形態が出現しにくいのは、この形態が「びっくり」のように様態を表すものが多く、視覚的手段でそれを表しうるからだと考えられる。

4.2 表記形態について

日本語には表記の原則はあるが、文字種を選択は書き手に委ねられている。オノマトペの表記の場合は、その制限はさらに緩やかである¹⁷。マンガのオノマトペはそのような日本語の表記の特性を活かして、実に多様な表記を生み、さまざまな役割を果たしている。

例えば、ひらがなやカタカナ、漢字、アルファベットのそれぞれの文字種のもつ表記的意味を利用して、人物の心理や様態を補強することができる。文字種や表記法の選択によって、ストーリー展開に必要な情報を伝えることもできる。さらに、手書きによってデザインが施されたオノマトペは、表現意図に合わせた工夫によって、多くの情報を読み手に与えることができる。場合によっては、文字言語としての情報を伝える機能よりも、絵としての機能によることによって、新たな情報を伝達することができる。

4.3 意味について

自己の世界観を表現する上で、その手段に制限があることで、マンガは独自の表現方法を発達させてきた。絵によっては表せない音や様態を可視化する役割を果たしているという点で、マンガにおけるオノマトペは不可欠なものである。今回の考察では、ひとつのオノマトペが交感覚（クロスモーダル）として機能している例、音や様態のオノマトペを用いて登場人物の心理を描写している例が観察された。また、音韻形態や表記形態によって、笑い声を発する主体の属性や笑いの心理状態などを表していることが確認できた。

絵と照らし合わせることで、オノマトペの表す事象が明確になると考えていたが、今回の分析ではその予想に反して、絵の情報を付加しても表された事象を確定できないことがあった。しかし、そのような明確でない部分の存在が、読み手の想像に委ねられることにつながっており、マンガの魅力となっているということもいえる。

5. 結論

人間が耳にする音を正確に表記することは不可能なことである。しかし、私たち日本語母語話者は、自分の耳に聞こえた音を日本語に許容される音として拾い、言語として表記しようとする。また、音以外の様態や心理もオノマトペによって言語化する場合がある。それらの特定の事象を表したオノマトペの多くは、日本語文化圏において、「一定程度」¹⁸ 共有することが可能となる。マンガに用いられた臨時的なオノマト

¹⁷ 文化庁による国語表記の基準においても、オノマトペの表記は外来語などと同様に、規定する対象とされていない。

¹⁸ 「一定程度」とするのは、言語が記号として完全ではなく、使い手と受け取り手の間で意味の隔たりが生じるからである。

べは、作者の個人言語に近いものだが、それでも日本語文化圏のなかでは、互いにその感覚を「一定程度」共有できるのである¹⁹。

活字化された文字が読み手に与える情報は、デジタルなものである²⁰。オノマトベが音や心理、状態を表すアナログな要素の強い語であることを考えると、表記や音韻形態において自由度の高いマンガは、文字のみの表現メディアと比較して、アナログなオノマトベの特性をさらに発揮できる表現方式であるといえる。マンガは感性に訴える表現メディアであるから、直接に人間の感性を刺激するアナログな手書きが好まれ、実際にも手書きの手法が多く用いられていた。

作者の表現したい世界を忠実に読み手に伝えるために、マンガにはさまざまな工夫が施されている。現実の世界は五感を伴う3次元の世界であるが、マンガではそれを絵と文字言語によって2次元で表現する。そこで音や動き、さらに心理的な情報を与える手段として、オノマトベが重要な役割を果たしている。オノマトベによって、動かない絵を動かし、聞こえない音を聞かせ、見えない心を感じさせることが可能となるのである。マンガにおけるオノマトベは、文字による言語情報の伝達機能を果たすと同時に、絵としての機能を併せ持つことで、多くの非言語情報をもたらしている。それゆえに、作者の伝達意図を反映して、さまざまな音韻形態や表記形態が存在しているのである。

言語の表記は、音の記録化をめざして行われるものであるが、マンガのオノマトベは音よりも視覚を重視する傾向がある。それによって与えられる情報が、音そのものの情報にならぶ重要な意味を持っている。つまり、音の記録化という本来の文字機能を越えたところに、マンガにおけるオノマトベの存在がある。マンガのオノマトベにおける文字は、本来の表記の機能を越えた「超文字」として存在しているのである。

¹⁹ 金田一（1978）は、言語の有契性について述べ、オノマトベ（特に擬音語）は意味と音とに必然性があると述べている。意味と音の関係として合理性があるため、臨時語であっても意味が理解されやすいと指摘している。

²⁰ 情報はデジタルではあるが、読み手に届くことでアナログな要素が発生する。

《引用文献・主要参考文献》

- 『擬音語・擬態語辞典』（浅野鶴子編・金田一春彦解説）角川書店（1978） pp.9-11,17
『最新版 朝日新聞の用語の手引き』朝日新聞社用語幹事編 朝日新聞社（1994）
pp.3-6
- 『現行の国語表記の基準 文化庁国語研究会監修』ぎょうせい（2001）
- 『現代擬音語擬態語用法辞典』（飛田良文・浅田秀子著）東京堂出版（2002）
- 『日本語オノマトペ辞典』（小野正弘編）小学館（2007） pp.9-12
- 天沼 寧「擬音語・擬態語」『日本語教育』68号日本語教育学会（1989.7）
- 苧坂直行編著『感性のことばを研究する—擬音語・擬態語に読む心のありか—』新曜社（1999） p.5
- 角岡賢一「日本語オノマトペ語彙の形態論的考察」『龍谷大学国際センター研究年報 第15号』（2006）
- 金田一秀穂『気持ちにそぐう言葉たち』清流出版（2009）
- 佐竹秀雄「現代日本語の文字と書記法」『朝倉日本語講座2』朝倉書店（2005）
- 玉村文郎「日本語の音象徴語の特徴とその教育」『日本語教育』68号日本語教育学会（1989.7）
- 田守育啓・ローレンス＝スコウラップ『オノマトペ—形態と意味—』くろしお出版（1999） pp.19-25
- 夏目房之介『マンガはなぜ面白いのか』NHK出版（1997）
- 成田徹男・榊原浩之「現代日本語の表記体系と表記戦略」『人間文化研究2』名古屋市立大学（2004）
- 森岡健二『文字の機能』明治書院（1987）
- 山口仲美『犬は「びよ」と鳴いていた』光文社（2002） pp.27-33
- 山口仲美「視覚効果を生かしきる—コミックと擬音語・擬態語」
—『暮らしのことば擬音語・擬態語辞典』（山口仲美編）講談社（2003） p.513—
ローレンス＝スコウラップ「日本語の書きことば・話しことばにおけるオノマトペの
分布について」—『オノマトピア—擬音・擬態語の楽園』笈壽雄・田守育啓編：
勁草書房（1993） pp.80-81,90-92—
- 四方田犬彦『漫画原論』筑摩書房（1994）
- Frederik.L.Schodt『THE WORLD OF JAPANESE COMICS』Kodansha International（1983）
- W.J オング 坪井直文・林正寛・糟谷啓介訳『声の文化と文字の文化』藤原書店（1991）

《資料》

『ONE PIECE (52)』尾田栄一郎 (集英社)

『NANA (21)』矢沢あい (集英社)

『聖☆おにいさん (3)』中村光 (講談社)

『のだめカンタービレ (22)』二ノ宮知子 (講談社)

『鋼の錬金術師 (22)』荒川弘 (スクエアエニックス)

『PLUTO (7)』浦沢直樹 / 手塚治虫 (小学館)

『NARUTO (45)』岸本齐史 (集英社)

『ガラスの仮面 (43)』美内すずえ (白泉社)

『君に届け (9)』椎名軽穂 (集英社)

『星守る犬』村上たかし (双葉社)

※作品名 () 内の数は巻数

指導教授推薦文

論文等テーマ 心理動詞のアスペクト
—局面指示体系による分析—

著 者 名 関口 美緒

論者は日本語の心理動詞の研究を進めているが、本論文ではその一環として、心理動詞のアスペクトについて考察している。

心理動詞は一般にアスペクトを確認することは困難であるとされており、積極的に研究がなされているとは言いがたい。しかし、心理はやはり人間の現象として確実に時間の中に生起しているのだから、これをとらえて分析する必要があることは言うまでもないことである。それができなかったのは、方法を伴う理論がなかったからである。

論者は「日本語構造伝達文法」理論において開発された「局面指示体系」理論を用いればそれが可能になることを見いだした。この理論は動作・作用動詞（目に見える現象）を中心にして開発されたものであるが、論者はこの理論を心理動詞（目に見えにくい現象）に適用し、心理動詞のアスペクトを解明することになった。

また論者は、先行研究において心理動詞を常識的にしか扱っていないことが研究の進展を阻んでいたものと考え、医学・生理学・心理学等の関係理論を調査し、心理動詞の表す心理そのものを根本的にとらえようとしており、そちらからも多くの知見を得ている。

そのような考察の結果、論者は、感覚動詞、知覚動詞、思考動詞、感情動詞それぞれのアスペクトの特徴を細密にとらえることができ、またそれらの異同についても論じることができるようになった。心理動詞研究において、これは画期的なことであると言える。

論者のこのような研究が「局面指示体系」理論そのものの発展にも寄与していることは言うまでもないことである。

本論文をこの論文集に掲載することにより、心理動詞の新しい研究を多くの方に知っていただくことができ、また批正を賜る機会を得ることができれば幸いに思う。

2012年10月30日

推薦者（指導教授） 今 泉 喜 一

論文等テーマ 認知言語学の観点から見た中国語の「的」の意味変化と文法化
著者名 辛 奕羸

論者は中国語の「的」と日本語の「の」の引き起こす多義現象の異同について研究をしている。本論文では、今後研究を進めるに当たって「的」が本来どのようなものであるのかを明らかにしておくことが必要であるとの見解の下、「的」に関する通時的な調査・考察を行っている。関係する「底」「地」についても触れている。意味の変化については認知言語学の観点から考察している。

資料に見る最も古い「的」は「明らかなだ」を意味する形容詞である。それがメタファーによる意味の拡張により、名詞化さらに副詞化を遂げた。本論文ではその各段階での変化につき細かく考察を行い、その意味変化をもたらしたものは人間の認知の展開であることを明らかにした。

本論文で明らかにしたもう一つのことは、「的」が今日の名詞と名詞をつなぐ機能をもつ助詞になった経緯は、その意味変化とはほとんど何の関わりもないということである。「的」は、実質的な意味を失い副詞化して機能語（虚詞）となっていたために、宋代において音韻の近似していた助詞「底」の代わりに使用されることになった。当時、助詞「底」は名詞と名詞をつなぐ機能を持っており、ここから「的」がこの機能を受け継ぐことになった。また、「底」のすでに持っていた、助詞「地」との動態助詞的な共通性をも受け継いだ。

論者はこのような形で「的」が何であるかを知り、現代語の「的」を把握することになった。今後の研究を進める上で足場を固めたことになるものと考えられる。

この論文を本論文集に掲載することにより、識者の方のご指導を得られれば本人の研究にとって大きな励みとなるであろうことを信じ、ここに掲載論文として推薦する次第である。

2012年10月30日

推薦者（指導教授） 今 泉 喜 一

論文等テーマ コーパスを利用した日中同形語対照研究
— 中国語を母語とする日本語学習者の漢語習得支援のために —
著者名 山内 美穂

山内さんの研究は、修士論文で研究したものを、その後更に深化させ、発展させたものである。

日中対照の同形語の研究は、様々にされてきているが、山内さんが取り上げた日中語は、今まで気づかれにくく、同意同形語として、処理されてきた語をとりあげたも

のとして、大変価値あるものと言える。

具体的には、緊張、了解、熱心、関心、問題など10コの語彙について、3種のコーパス（現代日本語及び中国語）を使って調査し、その意味のずれについて精査した。

結果、品詞性、語義などのちがいが明らかにされ、それを使った日本語学習中の中国人学生にテストし、その誤用&原因を明らかにした。

中国における日本語学習史の深まりに伴い、より深く、厳しい対照が必要とされてきているが、この研究は、そうした深化に伴う、必要性を含んだ価値あるものと言える。掲載するに妥当であると考える。

2012年10月30日

推薦者（指導教授） 金田 一 秀 穂

論文等テーマ 現代中国語の新受身表現「被 XX」について
—「被」の新しい使用法に関する研究—

著 者 名 田 帥

論者は中国語の新しい受身表現「被自殺・被幸福」などが従来の文法では説明できないことに関心を持ち研究を始めた。「自殺された・幸福になられた」のような意味ではなく、「自殺したことにされた・幸福であることにされた」という意味になるのであるが、これをどのように文法的に説明すればよいのかについて、構文と構造と表現意欲の面から考察した。

構文に関しては、従来の受身表現で「被」の従える要素は他動詞であったが、新表現では他動詞のほかに自動詞、名詞、形容詞も可能となっており、従来あり得なかった構文になっているとしている。

構造に関しては、1つの構造中に3つの部分、すなわち、「真の部分」、「偽の部分」、「表現の部分」を設定すると説明が可能になるとしている。「真の部分」とは現実の出来事を反映する構造であり、「偽の部分」とは公に発表された内容を反映する構造である。「表現の部分」とはその両部分を一部ずつ取り入れた構造である。一部ずつ取り入れて表現するために文法的には破格な表現となったと考えている。

表現意欲に関しては、真の部分をそのまま言語表現すると差し障りがあるのでそれはできないが、それでもそのことを表現したいという強い意欲が根底に存在するのであり、そのために新しい表現が生まれたのだと論じている。

先行研究はこの問題について意味の面ないし社会問題の面から論じている。本論文のように言語構造の面から論じているものはなく、新しい試みであるので、この論文集に掲載することにより関係の方々からご批正を賜ることができればありがたいこと

と思い、掲載論文として推薦する次第である。

2012年10月30日

推薦者（指導教授） 今 泉 喜 一

論文等テーマ 日本の女性労働力活用の課題

著 者 名 染谷 真己子

染谷真己子君の論文「日本の女性労働力活用の課題」は同君が長年、取り組んで来た「ビジネス界における女性労働力の活用」研究の一環である。

日本で2012年10月に開かれたIMF理事会においてラガルド専務理事から発表された「女性は日本を救うことができるか」というワーキングペーパーに刺激されてまとめられたものであるが、この分野でもロザベス・モス・カンターから始まり、グラス・シーリング論、そして現在、「ラブリンズ（迷宮）を通して」、ハーミニア・イバーラの研究にいたるすばらしい業績が積み重ねられて来た。

最後の研究では女性のトップ・リーダーへの資質を問うものであるが、ラガルト女史がいうように日本の組織において女性の活躍の場が与えられれば問題を解決できるのかどうかである。染谷君が書いているように日本の場合にある程度社会で育った女性がいつの間にか家庭志向になるという問題はいろんな制度の改革だけではなく、女性自身の意欲の問題でもあるように思われる。

今回の研究で利用しているインシールド（ヨーロッパのビジネス・スクール）でのハーミニア・イバーラなどの研究報告を日本で行った場合にどのような結論がでてくるのであろうか。染谷君の今後の研究に期待したい。

2012年10月31日

推薦者（指導教授） 武 内 成

論文等テーマ 日本語構造伝達文法の中国語への適用

— 述目句の研究 —

著 者 名 蔣 家義

論者は「日本語構造伝達文法」理論が中国語研究においても有効な理論たりうるかを研究し、「予備的考察」（2012.3）、「主述句の記述的研究」（2012.7）の2論文で適用が可能である見通しがつき、現在、中国語の言語構造モデルの開発に取り組んでいる。

本論文では「述目句」の構造モデルについて考察している。「述目句」とは文字通り「述語と目的語により構成される句」のことであるが、中国語でいう「目的語」とは「主語—述語—目的語/SVO」語順の「目的語」のことであり、動詞の後に置かれる語を意味し、日本語でいう「目的語（を格名詞）」よりかなり多くの格を含むことになっている。

日本語では「格」は格助詞によって示されるが、中国語格表示は格助詞に相当する介詞「在・和・往・从……」等でなされる場合と、そのような形式によってはなされない場合とがある。後者が非常に多いのであるが、そのような明示されない格の関係は「格フレーム」で把握されている。論者は、53タイプある格フレームから、使用頻度の高い7種類のフレームを選び出して構造モデルを考えている。

構造モデルは基本的に日本語の構造モデルと同様のものとなったが、格の表示においては日本語の形態表示と異なり、すべてが〇となる。これを区別するために「受事・結果・処所……」等の格の種類を併記することになっている。

なお、日本語と大きく異なるのは5.7の「処所+V+当事1」の場合で、「大通りに車がいる」において、中国語での主語は語順から「大通り」であるとされている。しかし、これも構造上では日本語同様、「大通り」は主格ではなく「処所」格となる。

この論文を本論文集に掲載することにより、論者の中国語構造モデル開発に対する識者のご指導を賜ることができればありがたいことと思ひ、ここに推薦する次第である。

2012年10月30日

推薦者（指導教授） 今 泉 喜 一

論文等テーマ マンガにおけるオノマトペの考察
— 音韻形態と表記形態の分析を中心に —

著 者 名 坂 寄 仁 美

日本語におけるオノマトペの研究は、認知言語学の発展によって、近年盛んになりつつあるが、歴史的研究や文献に頼るかたちが多く、実際の言語態としての現実態について解明しようというものは稀である。坂寄さんの研究は、オノマトペの表記体の最先端である漫画におけるオノマトペの用例から、その意味や形態を明らかにしたものである。

表記体系として、ひらがなやカタカナ、アルファベット、また漢字などにより、多彩な表現がされている。

また、字体の大小やそのデザインが、絵と一体化してマンガ固有の表現を可能にし

ていること。

また、大変正統的にそれぞれの音韻と、意味、用法の使われ方の異なり、などさまざまな視点から、現代日本のオノマトペの具体像を浮彫りにした。

多くの用例を集めたその労力、また多くの用例を分析した分析力、また、それをまとめあげる忍耐力など修士論文の見本とも言える修士論文を仕上げたが、今、論文は、そのエッセンスをまとめたものであり非常な労作と言える。また今後オノマトペ研究をしようとするときに、キーストーンとなるような論文であると言える。

2012年7月25日

推薦者（指導教授） 金 田 一 秀 穂

2011年秋学期 博士前期課程（修士）修了論文

	申請者氏名	リサーチ ペーパー	修士論文題目	指導教授
1	GANEGODAGE RANGANI KANCHANA		A STUDY ON TAXATION SRILANKA VS AUSTRALIA (スリランカとオーストラリアにおける租税研究)	千葉 洋
2	宋 美玲		配偶者控除の廃止に関する一考察	千葉 洋
3	張 洪斌		日中個人所得税について考察 —日中比較から中国個人所得税への示唆—	千葉 洋
4	張 雷		急速に発展する中国の高速鉄道 —経済成長の原動力に—	馬田 啓一
5	陳 雷		ローカーボンへの道 —中国と日本—	馬田 啓一
6	董 偉偉		日本の消費税と中国の流通税の比較検討	千葉 洋
7	劉 玉霞		米中貿易摩擦と反ダンピング問題	馬田 啓一
8	刘 紫娟		グループ法人税制の導入についての一考察	千葉 洋
9	林 洋		中国のF T A戦略と地域主義への対応	馬田 啓一
10	明石 工		参加型農村開発におけるファシリテーション 手法の研究	小野田欣也
11	金 セツピョル		リメイクされた日本・韓国のドラマから確認 する両国若者の敬語づかいの比較	本田 弘之
12	姜 力寧		『枕草子』における周作人と林文月の訳につ いて	楠家 重敏
13	谷 蓉	※	日本語の否定疑問文の意味と応答について	金田一秀穂
14	鈴木 望		公立学校における国際教育・国際理解教育 —神奈川県内の公立学校、特に横浜市・川崎市に着目して—	諏訪内敬司
15	馬 慶麗		日中の諺について —動物に関する諺を中心に—	玉村 禎郎
16	白 阿拉坦其其格		モンゴル語と日本語の原因態（使役態）の対照研究 —ホルチン（Khorchin）方言の場合—	今泉 喜一
17	楊 旭		日中和製漢語の対比 —「自由」、「共和」を巡って意識語の考察—	楠家 重敏
18	羅 北辰		明治時代に日本語から導入された中国語語彙 の変容	本田 弘之

	申請者氏名	リサーチ ペーパー	修士論文題目	指導教授
19	李 玉春		日本語と朝鮮語の格助詞の比較研究 —二重主語文の対照研究として—	玉村 禎郎
20	郭 燕	※	日中同形異義語の教育研究 —日本語教科書を資料として—	玉村 禎郎
21	張 興	※	日中関係のなかの張作霖像の検証 —人物評価の変遷を中心として—	小山 三郎
22	橘田 和幸		平均寿命の男女差と環境要因の関連性に関する検討 —保健統計データの分析から—	出嶋 靖志
23	胡 安毅		インターネットを用いた漢方薬の使用選好に 関する日中比較調査の試み	金子 哲也
24	内田万里子		Teaching English Pronunciation in Japan: Integration of Phonetics in a Non-Native Context. (日本における英語の発音指導法：英語を母 国語としない日本の英語音声学教育)	イアン・ ランバート
25	王 昱星		通訳訓練法としてのリプロダクション ～母語と外国語に対する記憶力を中心に～	塚本 尋
26	崔 善姫		比喩表現の訳出についての一考察 —『金閣寺』の中国語訳を中心に—	塚本 慶一
27	陳 曼娜		同時通訳における訳出プロセスについて	塚本 尋
28	増田真由美		中日同形語翻訳における一考察 —成語の訳出処理について—	塚本 尋
29	茂呂さより		テキストとしての都市 —人間コミュニケーションの舞台としての都市と それを構成する諸要素に関する記号論的分析：19 世紀・20世紀英国小説を題材として	赤井 孝雄
30	楊 小琴		日中・中日翻訳における加訳の処理に関する 一考察	塚本 慶一
31	李 媛媛		「てしまう」表現の中国語訳について —『ノルウェイの森』の日中バージョンを通して—	塚本 慶一
32	李 春玉		文学作品におけるオノマトペの日本語から中 国語への訳出についての一考察 —『夏の庭』を中心に	塚本 慶一
33	劉 玉潔		『雪国』を通して日中翻訳の語彙変化を探る —年代別の中国語版訳二つを対象に	塚本 慶一

※リサーチペーパー

2012年春学期 博士前期課程（修士）修了論文

	申請者氏名	リサーチ ペーパー	修士論文題目	指導教授
1	川庄 史恵		住所に関する一考察	千葉 洋
2	金 正花		給与所得者の必要経費に関する一考察	千葉 洋
3	渡辺 淳一		加算税制度に関する一考察	千葉 洋
4	王 佳佳		相続税・贈与税における財産評価に関する一考察	千葉 洋
5	王 昭		中国の外資利用政策の転換と日本の対中直接投資の行方	小野田欣也
6	張 俊		移転価格税制に関する一考察	千葉 洋
7	長尾 真輔		法人税法における役員給与制度の問題点	千葉 洋
8	万 欢		中国における再生資源に関する研究	小野田欣也
9	持田 達史		法人税法施行規則別表の構造について	千葉 洋
10	聶 暁雪		日本語における誤用例研究について	玉村禎郎
11	魯 波		現代中国語会話における敬語表現	金田一秀穂
12	竹澤 順子		ボリビアのリプロダクティブ・ヘルス/ライツに関する研究 —貧困層女性の現状と課題—	高坂宏一
13	西山 明美		サブサハラアフリカ諸国の於ける5歳未満児の下痢症予防に関する研究	田口晴彦
14	徐 然		新しい観光交流時代における通訳ガイドの現状に関する一考察 —中国の日本語通訳ガイドを中心に—	塚本慶一

RONBUN SHU (X)

CONTENTS

Articles

Aspect in Japanese Psychological Verbs

— Analysis by Aspectual Indication Cords —

.....Mio Sekiguchi

From Cognitive Linguistic Point of View to See Chinese DE's Semantic Change
and Grammaticalization

.....Xin Yiying

Comparison of homographs between Japanese and Chinese using corpus

.....Miho Yamauchi

About the new passive voice

— HOW TO USE “被” TODAY —

.....Tian Shuai

Problem of the woman work force utilization of japan

.....Makiko Someya

The Application of JKD-Grammar to Chinese

— A Study of Chinese Verb-Object Phrases —

.....Jiang Jiayi

A study of onomatopoeia in Japanese manga

— Based on analysis of phonological structure and phonetic transcription —

.....Sakazaki Hitomi

杏林大学大学院国際協力研究科論文集 第10号

発行年月日 2013年3月31日

編集発行者 杏林大学大学院国際協力研究科長 松田 和晃

東京都八王子市宮下町476

電話 042(691)0011

印刷 株式会社 コームラ

〒501-2517 岐阜市三輪ぷりんとぴあ3

Tel 058-229-5858

Fax 058-229-6001